
聖霊の街

葛城 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖霊の街

【Nコード】

N8281F

【作者名】

葛城 炯

【あらすじ】

遺跡探検家のアリアは見習い魔導師のソフィアと共に旅をしていた。ある日、アリアはソフィアの人形達が精霊のミダル（分身）だと知る。町に着くと、そこにいたのは幽霊のネメシア、剣術師のエアリス。そして人形遣いのグレイ。さらにグレイの知人のギザキ、ノイエとも出逢う。夜の襲撃を退け、アリア達は遺跡へと向かう。遺跡の精霊に辿り着いた時、ネメシアがグレイを蘇生させた意味、ソフィア達と出逢った意味を知る。総てを終えて、仲間達と別れ、旅立つ。新しき旅へと……

0 ・復活（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

0・復活

0・復活

二つ月が満月の夜。

霧が辺り一面を包み続け、旅人達が新たな道を見つけて、誰も近付く者が居なくなった峠の道。

街道の名残らしき道の跡に1人の少女が地面に座って祈り続けていた。

霧が雨となり、降り続ける中で少女は祈り続けていた。

もし……その光景を旅人が見たら……腰を抜かしてすぐに立ち去っていただろう。声なき悲鳴と共に……

何故ならば……少女の身体は透きとおり……雨粒もまた少女の身体を濡らすことなく地面に落ちて水溜りとなっていく。

つまり……幽体。

幽体の少女が祈りを捧げているのは……街道跡脇の大木。

朽ち倒れるかと見える様相の大木に少女の霊は祈りを捧げ続けていた。

不意に……叢雲が峠を包み……槍のような雨が降り始め、雷鳴が響き渡った。

突如っ！ 大木に稲妻が撃ち落とされ……轟音と共に大木は根元から爆発するかのように弾け倒れる。

その……大木の根元の穴から青白く……ぼおっと光る手が地面を掴み……瘦せた男が這い上がってきた。

地獄から地上へと昇り来たかのように……

ゆつくりと辺りを確かめた男は……目の前の少女の霊に気づき……力なく笑った。

「やあ……貴女でしたか。私を甦らせてくれたのは……ん？」

上半身を穴から出して、地面に肘をつき男は悩み始めた。

「……あれ？ 貴女とは契約していませんか……？ なにか御要望

でもおありでしょうか？」

少女は笑い顔のまま、ひらりと手を傍らの草むらを指した。

「おお。僧衣まで用意していただけたのですか。……しかし、何故でしょう？　そこまでして私を甦らせたというのは？　何が用事で
も？」

少女は……男の言葉に少なからず不機嫌となったようで、一度目を伏せてから……男を睨み付けた。

「うわおっ！　……と、ととと……あぎゃっ！」

男は視線に驚き……体勢を崩し、再び穴の中へと落ちてしまった。

「は、はい。そう怒らないでください。貴女の目に睨まれると腰が砕けてしまいますから」

少女は再び微笑むとすつと立ち上がり、街道へと歩き始めた。

「……あれ？　私への用事は……？」

少女は問いかけには応えず……右手をくいつと動かすと……男は地面に転げ回った。

「あ……ちよつとネメシアさん。ご無体が過ぎますよっおおおっ」
微笑みの表情のまま少女の幽霊は……怒っているようだった。

0・復活（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです

1 大猫娘と人形と…… 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

1・大猫娘と人形と…… 1

1・大猫娘と人形と……

「……あじい」

アタシは無駄と知りつつも呟かずには居られなかった。

なんでカンカン照りの山尾根の道を歩いているのかというところ……ソフィアの占いの所為だ。先に行くソフィアは白銀色の細長い杖を持ち、大きめの袋袍を背に、白魔導師の定番衣装の僧衣に乱れ一つもなくきちつと着こなしたまま、無駄口も言わずに時々、アタシを振り向き『しかたないわね』みたいな視線を投げつつも、無言ですつとソツなく歩いている。

ここ数日、熱っぽいというか風邪っぽかったのに、ご立派です事。ちなみにソフィアが持っているのは『光の杖』。『魔王が顕れるとき、光の杖を持つ尼僧が顕れ、魔王を撃ち倒すだろう』と巷の吟遊詩人の定番で歌われている杖。

……それがこんな所にあるなんて、出発した町の吟遊詩人達も知ったら目玉を飛び出させて吃驚して宿屋の屋根を突き破らんばかりに飛び上がるだろう。

とはいえ……いまはタダの旅の僧侶と同行一名。

「なんでソフィ姉えの戒律に付き合っ居るんだろ……」

アタシはソフィアを『ソフィ姉え』と呼んでいる。言つとくけど、本当の姉妹ではない。お互い旅の途中で出会って……まあ、訳あって同行している。まわりに説明するのが面倒いので『義姉妹』で通しているけどね。

ソフィアの本名はソフィア・フレイア。誰も見たことはないという聖アイルコンティヌ寺院出身の白魔導師。階級はアコライト。つまりは見習い修行僧。毎朝、五角形で出来たサイコロ2個を投げて日々の戒律を決めている。

今日の戒律は『もつとも暑き道（手段）を』と『不言』だそうな。

……ということ、次の町までの道をもっとも暑いという山尾根の道を選んで一言も言わずに移動しているというわけ。アタシは『不言』の方は遠慮しているけど。

向かっているのはノギの町。精霊の名を付けて居るんだから遺跡とかお宝がありそうだとアタシが決めて向かって居るんだけど……こんな険しい道の場所だったとは。とは言え、普通は尾根下の日陰の道を使うらしい。断崖から見下ろせる道には幾つかの商隊やら旅人達が見え……たまにコツチを振り仰ぐ人達はアタシ達が何処かの旅初心者だと思っっているに違いない。

あのね。こちらら旅慣れしている遺跡探検家のアリア・フェージアム・ファルド様だつてえのっ！ 一人旅で世界を旅して……いたんだからアタシだけアツチの道を使っても良かったんじゃないの？ って、気づくのが遅かったな。戻るより進む方が早そうな位置まで来ちゃってるし……

ははは……我ながら、ナント力正直にソフィアに付き合っているな。なんでだろ？

まあ、試練を踏めば踏んだ数だけ、強靱な人生になると信じて付いていきましょ。

って、何度目かの諦観の境地に達しかけた時……不意にソフィアが立ち止まった。

「ん？ どしたの？」

ソフィアの先を見ると……なんか大きな毛の固まり？ そしてその周囲に人集り。

んゝ なんかの魔獣か精霊の使いかが倒れて、物見の人集りかな？ と、思う間もなくこちらに気づいた人集りがわらわらと囲んできた。

「おう。僧侶様達。貧乏な俺達になんか恵んでくれねえか？」

既に抜刀している輩、斧やら鉈やらをぶら下げている輩。棍棒を持っているのは……三下だろうな……そんなのがアタシ達を取り囲んだ。

「えーと。つまり山賊さん達？」

疲れ気味に問い掛けるアタシに相手は不遜な笑みで応えた。

「おう。僧侶の従者様。従者も連れてなさるんだ。それなりの寺院のそれなりの役職には就いてなさるんだろ？ さっさと出すモノ出しなっ！」

凄む山賊達を一瞥するアタシ。

悪いけど従者じゃないわよ。陣形態とか帯形態の黒魔法が得意な遺跡探検家と防御呪文は完璧な白魔導師一名なんだから。

ん？ さっきと表現が違う？ 気にしなさんな。時と場合で言い方は変わるんだから。

こつちが黒魔術が使えるとは露程にも考えていないヤツらの相手は疲れるからさっさと雷襲陣で終わらせようか、氷襲陣で凍らせたついでに涼もうかと悩んでいると、ソフィアが口を覆っていた聖絹布を取り、深々と挨拶した。

「ありがとうございます」

へ？ なにそれ？

……と思ったのは山賊達も同じようで、ちよつとの間を置いてから凄み直してきた。

「なんだあ？ 感謝するよりも金目の物を置いて……」

「確認しますが……」

山賊達の言葉を遮ったのはソフィア。

僧衣のフードも取って、髪をふわっと広げて、杖を持ち直し、ゆつくりと確認した。

「アナタ方全員で私達を襲っているのですよね？」

額から出ている汗が髪と共に振りまかれたのは……ちよつとというか、かなり色っぽい。

でへーとニヤけた手下達を無視して、山賊の頭目らしき男が脅し直してきた。

「そういうことだ。判ったらさっさと金目の物を……」

1・大猫娘と人形と…… 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

1 大猫娘と人形と…… 2 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

1・大猫娘と人形と…… 2

次の言葉はなかった。

ソフィアの右手が振り上げられると同時に相手は氷の柱となって固まっていた。

「え？」

アタシが驚く間もなく、ソフィアの右手が次々と振り下ろされ……山賊全員があつという間に氷柱となって凍り付いていた。

「ソフィ姉え……それって冰雪鞭？」

白魔導師も黒魔術は使えるんだけど精々、飛礫形態とか鞭形態。

今、ソフィアが使ったのも鞭形態の一つで水系のさらに細かく言うところ氷分類の冰雪鞭……なのは良いとしてもだ。その威力は何よ。アタシの陣形態と大差ないじゃない。

「そうよ。相手の動きも止められるし涼しいでしょ？」

布で汗をぬぐって、微笑むソフィア。

……うむ。そういうのはアタシの役目の筈なんだけだな。

「……つまり、戒律を守るのがツラくなってきたので渡りに船だったと言う訳ね」

ぎくつとした表情でちろつと舌を出して誤魔化し笑いをするソフィア。

……美人だからって騙されないわよ。

「アリア。そんなに鋭く指摘しなくても良いじゃない」

「誰でも判るわよ。そんなこと」

まあ、コイツらを次の町のギルドに引き渡せば路銀の足しにもなるし。ま、いつか。

「そっぴゃ。アレなんだろうね？」

道の先にある毛の固まりを指さして尋ねるアタシにソフィアは真面目な顔に戻って呟いた。

「うん。魔獣にはあんなのはいないと思ったけど……確かめまし

よ」

近付いて確かめると……毛の固まりは猫だった。

いや、猫と言うには有り得ない程の大きさなんだけど見た目は猫魚屋の店先からデカイ魚を盗んで全力ダッシュしたのは良いけど、力尽きてへばって倒れたところでデカイ魚を奪い返されて悔しいけれど立ち上がる気力が湧かなくて倒れ込んでいる。……って言うような感じでへばっているデカイ猫。

判りにくい？ んゝ。ま、兎に角。そういう感じだから、勝手に想像して。

「あら……ひよつして？」

「何？ 知合い？ アイルコンティ又寺院の先輩とか？」

暑さにかまけてちよつとボケてみた。

「そうよ。何で知ってるの？」

をい。ボケをマジ返しするなっ！ って……ホント？

「えーと。魔石を持っている筈なんだけど……持っていないさそう……ということとは」

ソフィアはさっきの盗賊の頭目を凍らせた氷柱に近付くと……杖で顔面を一突き。ぱしつという音と共に綺麗に頭の所だけ氷が砕けた。

「ぐわおっ。ひ、酷え事するじゃねえかつ！ ……僧侶サマ。ほんの出来心なんで……見逃してくださいまし……」

一瞬だけ氣勢が良かったけど、すぐに謙る。

世渡りは上手そうだけど、アタシの嫌いなタイプだな。

「見逃してあげても良いけど、魔石は何処にあるのか教えて下さいます？ さもないと……」

にっこりと笑いながら丁寧に脅すソフィア。

んゝ こういうときは下手に逆らわない方が良いんだけどな。経験的に。

「知らねえ。あ……いや、知りません。いや、ホント。御頭が街道に大猫がいるから捕まえて来いって言われてきただけで……」

「その御頭サマって何処に居られますの？」

山賊はソフィアの問い掛けにちよつとだけ横を向いて口籠もってしまった。

あゝ下手に逆らってしまったな。

ソフィアはにつこりと笑ったまま、額の端を一瞬ヒクつかせて……次の瞬間には右手を振り下ろしていた。

ばしいばしいん

天から雷が落ちてきた。……のではなく、ソフィアが放った電撃の魔法鞭。近くで凍っていた数名も巻き添え喰らって魔氷結が飛び散ったのは幸いかも知れないけど地面で痙攣して転げ回っているのは、やはり不幸な出来事だろう。

「さつさと応えていただけます？ さもないと……」

「ソフィ姉え。応えたくても痺れて応えられないよ。そんなに威力のある電撃鞭を喰らっちゃったら」

あら？ と、きよとんというか「きよとのん」という様な顔にちよつとだけ暑さか風邪っぽい熱の所為かでぼーっとしたのを付け加えたような表情に戻って、ソフィアはアタシを見た。

「でも、すぐに人化の魔石を取り戻さないとヴィオラさんが……」

えーと。アタシの後ろで延びている大猫がヴィオラさんね。たぶん。んで、人化の魔石が無いと……？

「どうなるの？」

「会話できないじゃない」

それだけかいっ！ 死ぬとか苦しみ続けるとかそんなんを考えたいたのに。

「兎に角、人の物を取るのは泥棒。泥棒は悪への入り口。例え万引きでも極刑に処しても然るべき犯罪。判ったらさつさと……」

おい。目の前にいるのは、元々、山賊で強盗を生業としている方々なんだけどな。魔石が云々以前に……

1・大猫娘と人形と…… 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

1 大猫娘と人形と…… 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

1・大猫娘と人形と…… 3

「判った。御頭は村にいる」

痺れが消えかけた頭目は地面に這い蹲ったままやつと応えた。

「その村というのは？」

「そこまでは言えねえ…… ぎやおっ！」

再び、電撃の鞭が…… 数条、振り下ろされて、山賊全員が魔氷結が砕け散ったままに地面で転げ回っている。

ちなみに…… 魔法の鞭というのは実力というか呪力というか法力が高まるに従って一条から数条に形態が変わっていく。まあ無数の鞭となったら陣形態と変わらんのも無理はないけどね。…… って、なんで魔法術の説明してんだろうね。アタシは。

「さつさと言った方が良いわよ。幾ら殺生が禁じられている白魔導師でも『不慮の事故』でアンタ達が命を落としたとしても不思議じゃないわよ」

見かねて、アタシがソフィアと山賊の間に割って入って…… ついでに脅してみた。

実際、鞭形態の術程度で落命するなんて事は滅多にないけどね。でも、このぐらい脅しておかないと先に進みそうにないし。

「いや。やっぱり言えねえ。言ったら村八分だし。村から出されたら死んだも同然……」

と、言いかけて山賊の頭目以下、全員が気絶した。…… 気絶したフリをしているのも数名は確認できるけど、脅し直しても同じ結果にしかならなさそうだ。

「どうする？ ソフィ姉え」

…… と振返ると、ソフィアは自分の袋鞆に杖の先を入れて何か呟いている。

「ん？」

疑問に感じるアタシに気づく様子もなくソフィアの唇は確実にこ

う言っていた。

「御願いね。アエリイ、空から近くの村を捜してみて」

どういう意味かを問い掛ける間もなく、ソフィアは杖を空へと振り上げた。そして……空へと飛んでいったのは……という杖の先を掴んでいたのは……緑っぱい帽子の人形。

4歳祝いに貰う四力の精霊を象った人形の内、風の精霊の人形……
「え？」

驚くアタシに気づいて……ソフィアは『あ……』というような表情で……固まってしまった。

程なくして……空から人形が落ちてきて……視線をアタシに固定したまま、ソフィアが右手で人形を受け取ろうとして……失敗していた。

地面に落ちた人形が頭をさすりながらソフィアを見上げて怒り出した。

『あたたた……酷いやんかソフィア。ちゃんとアタシを受け止めてえな』

頭の中に声が響く。これって？ ……何？

「ソフィ姉え……それって……」

白魔導師と動く人形がセツトになっていると……大抵はこの世で嫌われ者の人形遣いを思い出すけど……

「あぁと。信じて。御願い。私は人形遣いなんかじゃないから。ホントよ。信じて」

取り乱すソフィアというのは初めて見るような気がする。……なんか異様に色っぽいのは反則だと思っただけ。

「ん」。ソフィア姉えが人形遣いなんかじゃないのは判っているけど……ソレは何？」

アタシの問い掛けに応えたのはソフィアではなく……袋鞆からワラワラとでてきた人形達だった。

『ほらぁ。やっぱ、心配すること無かったやん』

『。ソフィアは心配性やから、仕方ないやん。人形遣いと勘違い

されたらどうしよう」って、結局、取越し苦労やんか」

『……案ずるより産むが易しってね』

4つの人形の内、碧い帽子の人形がアタシに近付いてきて……ペ
コリと頭を下げた。

「あ、ども」

『……ワタシはウエンディ。水の精霊の……ミダルって言うんだ
けど、意識の分身みたいなモノ。本体は氷の精霊の城にいるワ』

『アタイはサーラ。本体は炎の精霊やで』

『。ウチはノーラ。土の精霊や』

『アタシはアエリイ。風の精霊というワケや。いたたた』

ん。なんか、ソフィアに隠し子がいてソレを目の当たりにした
感じ。……で、ちよいと思回路が本来のスピードになっていない

……のは、暑さの所為もあるだろう。……という事にしておこう。

……って、混乱しているな。充分……

夢の中で『これは夢だな』と判っているような感じで、アタシは
アタシが混乱しているのが判っているんだけど……どうやってら落
ち着くのがよく判らない。

取り敢えず何か言わないと……

「んで、村はあったの？ え〜と、アエリイで良いんだっけ？」

『ん。流石はソフィアの妹分。判るんが早い。村はあったで。こ
の先で村への入り口への分岐点がある筈や』

「わかった。じゃ、ちよつと行ってくるっ！」

まだ混乱しているような感じでソフィアはくるりと踵を返して……
飛んでいった。

「え？」

いや、表現としての『飛んでいった』のでは無く、文字どおり、
空へと飛んでいった。

「そんな……飛べるなんて」

呟くアタシに人形達が焦って説明し始めた。

『いや、あれは金の竜のおっちゃんに貰った竜髭靴で……』

『この前、瘴気というか魔獣を始末したときに貰ったヤツで……』
『。違うて。竜のおつちゃんが出した試練をクリアしたときに……』
人形達の説明はよく判らないけど、アタシが言いたかったのは別のことだ。

「……飛べるんだったら最初からアエリイを飛ばさなくても良かったじゃない」

『……そだね』 『。確かに』

やはり、呆けた感じで人形が同意した。

それから暫くして……

街道脇の山の中腹で何かが爆発した。

「ソフィ姉えだな」 『そだね』 『間違いない』 ……

可愛そうに』 『。誰が?』 「山賊達に決まっている……よねえ?」

アタシが問い掛けたのは……後ろで気絶したフリをしている山賊さん御一行。

「ああ……」 「こうなったら……仕返しにオマエを……」

何か出来るわけがない。

何故ならば……直後にアタシが放った雷襲陣で全員、痺れたからだ。

ついでに……アエリイが放った電撃とウエンディが放った氷飛礫とノーラが放った石飛礫、おまけにサーラが放った火炎飛礫でメタにされてもいたけど。

「アンタら……強すぎ……」 今度は本当に気絶する前の頭目らしい輩の最後の言葉。

そだね。アタシもそう思う。

1・大猫娘と人形と…… 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

2・宿にて 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

2・宿にて 1

2・宿にて

結局、山賊さん御一行を途中の町のギルドに引き渡したとかなんやらで、目的の町には辿り着けずにちよつと手前の外れ宿……町は大抵、日暮れと共に門を閉めるからね。そんな時に閉め出された旅人用の宿……で一息ついた。

しかし……見渡すと、アタシ、ソフィア、ソフィアの人形4つ、プラス……大猫娘のヴィオラさん。随分と大所帯になったモノだ。今朝まではアタシとソフィアの2人旅だったのにな。とはいえ、その時は人形達は動きを止めてジツとしていただけだから……増えたのはヴィオラさんだけでも言えるな。ふむ？ 合ってる？ なんかまだ混乱しているようで思考回路の結果に自信がない。

そうそう。『思考回路』って単語はソフィアがたまに使うんでアタシも移って使っている。意味判る？ 判るの？ へえゝ 寺院用語らしいんだけどね。違うのかな？

まあ、兎に角。ヴィオラさんは首に人化の魔石のネックレスを下げてソフィアの予備の尼僧服を着て晩御飯を頬張っている。

ネックレスの鎖が切れていたんで、樹綿の紐で繋いでるのは……まあいいとしてだ。

人化した今は……やはり大猫娘。

結構な美人でソフィアより頭一つ背が高く、手足も長くて胸とお尻とかが2割増……いや、サイズとしては5割増か？ 服のサイズが合わなくて胸の谷間とか、腰のくびれとかが惜しげもなく見せ放題になっているんだけど……なんか色気が皆無なのは何故だろうね？

多分、アレだ。健康的すぎて色気が皆無というタイプだな。

「いやあ、マイッタよ。久々に人間界に来たらあの暑さでしょ？ ちよつとクラツとしたついでにコケちゃってさ。その時に人化の魔

石も落としちゃってね。慌てて拾おうとしたら先に山賊の……御頭だっけ？……に拾われてさ。奪い返そうにも暑さでノビちゃって……ほんと助かったよ」

ネコミミとシツポがあってヒゲがないのは良いとしてもだ……なんか故郷方面地方のオバチャンみたいな口調と態度はナントカならんのかな。ソフィアも苦笑いしながら頷くだけだ。

「確認したいんだけど……」

アタシがちよつと醒めた感じで言葉を挟むと……ソフィアはちよつと引きながらアタシの次の言葉を待っている。

そこまで構えんでも良いとは思っただけど……そんなに人形遣いに間違われるのが嫌なのかな？ ま、あんなのが好きなのがこの世にいるとは思えんけど。

「この子達はなんでソフィアにくつついて旅していたの？ それに話す時に変な記号が頭に浮かぶんだけど、ソレは何？」

アタシが指さすのは自分の頭の上と両肩とついでに胸元。

なんでか正体が判ってから、ウエンディはアタシの頭の上でグデグとしてるし、サーラとアエリイが両肩にひつついてるし、ノーラは胸元のポケットを定席位置にしている。

「その子達は……」

ソフィアが言いかけるとヴィオラさんが割って入って説明し始めた。

「その子達はソフィアが寺院を出るときの試練で出会った精霊達のミダル……分身だよ。変な記号が浮かぶのは実際に声で話しているんじゃないって頭の中というか意識に直接話しているから。変な記号ってのは意識が繋がった信号みたいなモノなのさ」

よく判るようなワカランような説明だな。

「試練？ って何したの？」

「永遠の焰、永遠の風、永遠の石、永遠の氷をそれぞれの精霊の世界に一人で行って取ってきたのさ。ソフィアが取ってきたのはワタシとかが団体で行ったときより大きくて質の良いのを貰ってきたん

だよ。ま、あんなだけを取ってこられたら、寺院長もソフィアが旅に出るのを止められないって。ははは。いやあ、しかしアレは凄い大きさだったね」

感心しきりのヴィオラさんについても疑問がある。

「ヴィオラさん？　ちょっと聞きたいんだけど……黒魔術とかは使えないの？」

2・宿にて 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

2・宿にて 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

2・宿にて 2

ん？ というような、きょとした表情で一瞬止まってからヴィオラさんは高笑いしてから応えた。

「かははは…… ワタシはね。黒魔法はからきしダメ。どつちかというと体術……蹴るとか殴るとかだね。まあ一応、黒魔法は飛礫形態ぐらいかな」

「でも使っちゃダメですよ。ヴィオラさんの飛礫形態をこんな所で使ったら……」

「どうなるの？」

ソフィアが止める理由はなんだろう？

「私の飛礫形態が小石程度だとすると、ヴィオラさんの……」

ちよつと言葉を止めて、考えてから……いや、思い出してから言葉が続けた。

「3階建ての宿屋ぐらい……かな？」

待てい。ソフィアの鞭形態自体がアタシの陣形態に匹敵しているんだぞ？

「かははははは……まあ、そんなモノかな？ 火炎飛礫一つで山火事になりかけたこともあるからね」

おい。そんなのアタシの陣形態以前に軍事国家オーヴェマで編成されているという黒魔術師戦闘部隊をも遙かに凌駕しているじゃないかっ！

聖アイルコンティヌ寺院出身者って化け物揃いかいっ！

「はあ……それって寺院の修行の所為？」

「違うわよ。ヴィオラさんは特別。三大修行尼僧って呼ばれていたんだから」

「三大？ って何が？」

「清き光の浄化のネメシア。解毒と施術の鋭きラディア。そして治癒と膨大法術量の巨大なワタシ……という訳さ」

ん。何となくラディアさんだけには違いたくないような気がするのは何故だろう？

「んでさ、ソフィ姉えはなんて呼ばれてたの？」

ソフィアとヴィオラさんは視線を合わせて……噴き出すヴィオラさんをあたわたと止めるソフィア。

ん？ あまり良くない通り名のようなだ。

「ソフィアはね……最初は『だんまりのソフィア』だっけ？ 寺院に来たときはなんにも喋らなかったのさ。その後は……すぐに実力発揮で『強靱のソフィア』とか『頑強のソフィア』で、最終的には『聖なる超絶法力のソフィア』だったよね」

最初のは兎も角……なんにしても凄そうだ。

「ソフィ姉えの『超絶法力』とヴィオラさんの『膨大法術量』って似ているような気がするんだけど？」

「ん。ワタシのは単に一回の法力の量が多いっただけだからね。

ソフィアのは特別。尽きなくて尚かつ強靱だからね」

「？ よく判らないけど……」

「んとねえ。例えるならワタシのは湖の水。幾ら汲んでも尽きることはないけど怖くはないでしょ？ ソフィアのは見渡す崖全体から落ちてくる大瀑布。尽きるどころか圧力で潰されそうになる。そんな感じなのさ。法力の質が私達とは段違いに強靱だしね」

あゝ 何となく判るような気もしなくはない。……かな？

「つまり……ソフィアは法術の効果が人より強くて、ヴィオラさんは強さは普通だけど法力の範囲が大きい……という事？」

「そ。そんな感じ。しかし……ソフィア。あんまり法力使ってないんじゃない？ 法力酔いしかけているみたいだけど？」

ん？ 法力酔い？ 何ソレ？

ヴィオラさんの説明によると……あまり、法力を使ってないと悪酔いしたような風邪を引いたような状態になるらしい。うゝむ。法力があるというのも面倒くさいんだな。

「確かに……あんまり使ってませんけど……まだ、大丈夫ですよ」

力ない感じでソフィアが額の汗をぬぐいながら応える。ヴィオラさんが心配げな視線でソフィアを見て、それからアタシを見てから何かを思い付いたように言い出した。

「そうだ。アリアちゃん。アンタ凄い術、知っていたね。法力振動数は？」

法力振動数？ また判らん単語を……

「振動数って何が？ それにアタシを呼ぶときは呼び捨てで良いわよ。『ちゃん』づけしないで欲しいな」

ちよつと怒ったアタシににんまりと笑って、ヴィオラさんは新しい取り皿……じゃなくて小さい深鉢をソフィアに渡した。

「判ったよ。アリア。んじゃ、ソフィア。霊精を宜しく」

ソフィアは片手で小深鉢を持って……薬指を深鉢の底を指したまま二度三度と振ると……小深鉢に虹色に煌めく透明な液体が満たされた。

「え？ なにそれ？」

「それが霊精。普通の僧侶……そだね。人間界の賢者クラスの人で一滴作り出すのに一晩は掛かるかな？ 法力の源を物質化したモノだよ」

賢者クラスが一晩で一滴が見る間に小鉢に一杯……ソフィアってやっぱり凄いな。

「じゃ……アリア。テーブルに小深鉢を置いたまま両手で包むようにして……目を瞑って……心を落ち着かせてみて」

ソフィアに言われるままに……両手で小深鉢を持って瞑想してみる。

「もういいわよ」

ソフィアに言われて小深鉢を見ると……六角形の波が……これって？

「めずらしい。振動数が6なんて……しかも綺麗な六角形」

2・宿にて 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

2・宿にて 3（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

2・宿にて 3

ふむ。確かに綺麗な正六角形だ。……けど、ソレが何か？

「普通の人は2〜4なんだけどね。振動数は。しかも綺麗な形にならないから法術……白でも黒でもちゃんと形に成り辛いんだけどね。こんなに綺麗なのは初めて見たよ」

感心しているヴィオラさんの説明にソフィアが付け足した。

「普通は綺麗な形にならないのよ。それに6って完全数だから……どんな魔法も使えるわよ」

ふふん。なんか自慢したくなってきたぞ。

「……そだね。だからくつついていると心地良いし」

「○眠たなってくるし」 「楽やし」 「心地ええで」

ひつついていた人形達が眠たそうな声を頭に響かせてまた、目を閉じてひつつき直した。

「どゆこと？」

問うアタシにソフィアは困ったような顔で、ヴィオラさんは笑いを堪えるような顔で応えた。

「その子達は精霊だから……ね」

「そうそう。そうね。アリアの振動数は精霊並みに綺麗だって事だよ。かははは。それにしてもノーラがワタシに引っ付かないのは初めて見たよ」

しっかり笑い出すし。ノーラが昔、ヴィオラさんにくつついていたって事は……ヴィオラさんは土の精霊と仲が良いのかな？ ま、兎に角、アタシが黒魔法が陣形態まで憶えたのは素質だって事ね。「ところで……ヴィオラさん。何しに人間界に来たの？」

アタシの問いにヴィオラさんはちよつとだけ表情を固めて……すぐににっこり笑って応えた。

「一言で言えば婿捜し。寺院から出されちゃってね。故郷に帰ったんはいいいけどさ、まあ、なんか居場所が無くてね。婿取って子供で

も作ろうかなと」

んむ？ 寺院を出た？ ソフィアとは事情が違うのかな？

「寺院を卒業したの？」

「ん」。ちつよと違うかな。新人が多数入ってきたんで、ある程度のレベルに到達したのは出された……という感じかな。まあ、教育担当尼僧として残る手もあったんだけどね。アンタみたいのは国に帰って来たるべき魔王との戦いに備えなさいってさ。でも、魔王が復活するとは限らんし……」

んん？ 魔王が復活しない？ 光の杖を持つ尼僧……つまりソフィアが光の杖を掴めたから魔王が復活するって周りに言われて家族と引き離されて寺院に入れられたのに？

そうそう。言い忘れたけど、ソフィアが旅をしているのは別れさせられた家族を捜すため。引き離されたときに浄化の術で記憶を消されたんで実際に家族と出逢っても、判るかどうかわからないという状態になっているんだけど。それでも、家族を捜す旅をするために寺院を出てきたんだけど……

魔王が復活しないんなら……ソフィアが家族と引き離されることも記憶を消されることもなかったんじゃない？

なんか腹が立つてくる。

「なんで？ 復活しないの？ それならソフィ姉えは……」

別に魔王の復活を期待している訳じゃないからね。ソコ、勘違いしないように。

むっとしているアタシに驚いたように真顔に戻って……ソフィアをちらつと見てからヴィオラさんは説明を続けた。

「ん」。アリアの気持ちも判らなくはないけど……みんな、魔王の復活って言葉というか事柄に捕らわれすぎているような気がするんだよね。実際、光の杖を持つことが出来た人は過去千年間にも何人が居たみたいんだけど……実際、魔王は千年間、復活していないし……」

なにに？ 掴めた人がいた？ つまり……え〜と。……どゆこ

と？

「その掴めた人はどうなったの？」

「判らない。寺院の歴史書にも詳しく書いてなかったしね」
ヴィオラさんにとっても謎らしい。

続けて聞いた話によると……光の杖は年に1回程度は寺院に届けられて、修行していた尼僧達が見つ事が出来るかどうかを試されていたらしい。ちなみに三大修行尼僧でもヴィオラさんは全然ダメ。ラディアさんで数瞬、ネメシアさんで数息程度の間は持つことが出来たらしいけど……

アタシなんかが触ったら……指先だけでも痺れて数息は何も持てなくなるぐらいの威力というか法力があるのさ。この光の杖は。

「多分、寺院の中で持つことが出来たというのは世間には広めずにそのまま寺院関係者の秘密という事になっていたみたいなんだよね」

秘密にしたい相手という……寺院関係者ではないよね？ 魔王関係者に判らないように……という感じだろうか？ でも、なんか引つかるな……

「さて、話はコレでお仕舞。もう遅いから眠りましょ」

と、切り上げて、ヴィオラさんは小深鉢の霊精を一気飲みした。

「ん〜。やっぱソフィアの霊精は純度が違うね。暑さボケした頭と身体に染み渡るよ」

そついや、ヴィオラさんって三大修行尼僧の1人なのになんで山賊に負けてたんだろ？

暑さボケ？ それだけなのかな？ ま、関係ないけど……

2・宿にて 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

3・夢（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

3・夢

3・夢

その夜。夢を見た。

すぐに『ああ、これは夢だな』と思うような夢。

足元がふわふわしているし、一面の野原に金色の花が咲いて虹色に輝いている。花片の色が金色で……その花片に朝露みたいのが付いていて、虹色に光を反射している。

そんな花は見たことないし、空は一面に白くぼおっと……仄かに光っている。

んとね、純白のシート越しに晴れ渡った空をみている感じ。

そして……野原の真ん中で誰か……少女が1人で座っている。

花を摘んで1人で遊んでいる感じ。

楽しそうで……寂しそうな……そんな感じで1人で遊んでいる。

（誰だろう？）

髪は金色。

（ソフィアじゃないし…… ヴィオラさんじゃないし……）

逢ったことはない……ソレだけがはつきりと判る。

（声をかけようかな）

少女の方へとゆっくりと進んで……

……不意に目が醒めた。

いや、苦しくて目が醒めた。

目を開けると……目の前にソフィアの胸元。そして視線のほぼ端までソフィアの胸。

つまりだ、アタシはソフィアの胸の谷間で溺れて……じゃない、押さえつけられて呼吸困難になっていたというわけだ。ソフィアにも癖がある。寝ている間に何かを抱き寄せて、ついでにぎゅっと抱きしめる癖。おかげで、ソフィアと旅している間、大抵は呼吸困難

で目が醒める。

羨ましい？ 呼吸困難になるのが羨ましいなんて変わってるね。人には言わない方が良くよ。そんな嗜好。

んでだ、今晚は御丁寧に後頭部も何かに挟まっている。まあ、消去法と感触的にそれはヴィオラさんだな。視界の端にヴィオラさんの腕がソフィアを抱き寄せているのが判るし……

寺院関係者つて抱きしめるのが共通事項の癖なんだろうか？ それにしても……んゝ身動きが取れないぞ。調子がイマイチなソフィアを起こすのも忍びないし……朝にはまだ早そうだし……

……と、躊躇していたらソフィアが寝言を零した。

「信じて……私は……人形遣いなんかじゃ……ないから。信じて」んゝ。昼間のあの時、アタシはそんなに変な顔をしていたのかな……

信じてるよ。……と寝言に声で応えるのはなんだから……背中に手を回してばんぼんと叩いて序でにさすってみた。

見上げると……少しだけ安心したような顔になって、すやすやと寝息を立てていく。

見ているコツチが安心するような寝顔。年上だけど……なんか可愛いな。

ふと、寝間着から開けたソフィアの右肩の傷痕と鎖骨の間の呪紋様のようなアザが目に入った。

アタシと出会う前に何処かで受けた傷痕。アザの方はいずれ消えるとしても傷痕は消えないよね。アタシはその傷痕に手を当てて……治療の魔法を心の中で唱えてみた。

ばおっと手がほんの少しだけ……微かに仄かに光る。ま、ソフィアほどの白魔導師にアタシの術が効くとは思えないけど……ちよつとでも傷痕が小さくなるかもね。いいじゃない。髪の毛の幅程度でも小さくなれば。アタシの術でも……いつかは傷痕が消えるかも知れないし。

そんなことをしていたら……アタシもいつのまにか夢の中へと戻

っ
て
い
っ
た。

3・夢（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

4・ノギの町へと（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

4・ノギの町へと

4・ノギの町へと

翌朝。

同じ宿から同じ目的地、ノギの町へと行く荷馬車があつたので、乗せて貰つて揺られている。乗る前にソフィアは五角形のサイコロを手に持つて戒律とか規律とかを口籠もっていたけどヴィオラさんの「んじゃ、ワタシが『ノギの町までの護衛を依頼します』って事で」という一言で決まつた。依頼を実行中とか、緊急事態対応中は規律とか戒律は関係ないことになるらしい。「しかたありませんね」と不承不承な感じだったけど……ま、そこは敢えて突っ込まずに置きましょう。調子悪そうだから、あんまり歩きたくは無いはずだ。実際、サイコロの結果の一つは『踵歩行』というつま先と踵を付けてながら歩くという……つまり一歩が靴の長さしかないという極めて移動速度が遅い戒律だったし。

ちなみにだ。アタシ達の目的はノギの町近くにあるという古代遺跡。その遺跡に在るであろう金銀財宝を探し当てるため。んで、ヴィオラさんの目的は……昨夜聞いたとおり、婿捜し。

「ノギの町で武術大会があるらしいんだよ。御先祖さんと同じ名前の町だから……良いコト在るかも。ま、伝承の聖宝の槍というか大長巻とかだかが失われるぐらいの御先祖さんだから御利益は怪しいけどね」

その優勝者若しくは上位成績者で、独り身なのを捕まえる計画らしい。

確かに、ヴィオラさんほどの美貌とプロポーションとアイルコンティヌ寺院出身者という経歴からすれば落ちない男は、恋人が居るか、既婚者か、戒律に厳しい僧侶ぐらいだろう。

いや、恋人が居たつて、既婚者だつて、僧侶だつて、落ちてしまつかも知れない。

「もし……そうなたらどうするの？」

「かははは。面倒を起こす気はないから、そういうのはコッチからお断り」

ふーん。やっぱり寺院出身者だけあって真面目だな。

「……それよりさ」

悪戯つ子っぽい目でアタシを見て、ソフィアに気づかれないように小声で言った。

「ちゃんと白魔法とかの法術、教えてあげようか？ 治癒の魔法とか……」

んんんっ！ ひよっとして……昨夜の見てた？

「かはははっ！ 折角、振動数が正六角形なんだから、憶えておいても損はないと思うよ？」

くうっ……所謂一つの褒め殺しかいっ！

……って、ふと……視線を感じて振り向くと……ソフィアがジトつとした目でアタシとヴィオラさんを見ている。

ソフィアには出逢ってから色々と法術の手ほどきを受けているけど、なんか変なんだよね。治癒系のは、まあそれなりなんだけど、攻撃系のはやたらとパワーアップしたのが出てくる。元々、途中をすっ飛ばして陣形態とか帯形態なんかが得意なんだけど、飛礫形態や鞭形態、矢形態も……なんか暴走したのが出てくるんだよね。槍形態なんか巧く形にならないし。でも、ソフィアを置いて他の人に教わってもね。更に暴走したらどうしようもなくなるし……

「んんん……。時間があつたら宜しく」

「あゝ。そだね。時間があつたらね。そうそう。ソフィア、アンタの右肩に傷跡があるよね。ワタシが癒そうか？」

「結構です。って、法力振動数が2のヴィオラさんじゃ私の振動数に合わないじゃないですか。無理に術をかけて貰ったら……法力量が多すぎて筋肉が弾け飛ぶかも知れないし」

なんか怖いことを言っているけど……ヴィオラさんが反論しないで頭をかいているところを見ると……事実っぽいな。

「ソフィアの法力振動数って幾つなの？」

話の方向を逸らそうとしれつと聞いてみた。

「私の振動数は1。浄化の術……というかこの杖の振動数が1らしいのよ」

「そういうこと。振動数が完全な1か7じゃないと持てないらしいよ。その杖は」

ふん。確かに杖の小口は七角形だし。……その辺の関係かな？

側面は四角じゃなくて三角形というのは……関係ないか。

まあ、そんな他愛もないことを言い合いながら……昼前にノギの町に着いていた。

4・ノギの町へと（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

5・遭遇（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

5・遭遇

5・遭遇

ノギの町は川を遙か下に見る断崖の上に在った。崖自体は段丘で一番上の段は砂だらけだけどその下は畑とか森らしく緑に覆われている。町へと続く道の両側も乾燥地帯の割には森なんだけど……森の中から町が段丘の上に突き出しているような……そんな町。町に着いてみると……流石に武術大会だっけ？……が在るらしく、人が多くて賑わっている。聞けば、3年ぶりだそう。以前は毎年開催していたんだけど、段々と廃れていたのが、近頃、軍事国家オーヴェマの版図が近くに來たんで慌てて開催……みたいな感じらしい。まあ、こんなのは傭兵とかの実力診断みたいなモノだし。

オーヴェマもこの地方の攻略には手間取っているみたいで、近くのレストランなんか一度は政略したのはいいけど、その後は傀儡政権が実効支配に失敗して、古の都市国家の復活……！という感じでアチコチの町が独立宣言しているし。んで、オーヴェマの主力軍勢自体は別の地方の軍事政略に躍起でコツチには『いつでも戦略出来るから勝手にしていざ』てな感じで高見を決め込んでいる……らしい。

まあ戦乱の中の平和みたい……単にお祭りっぽい雰囲気。そんな喧噪の中、ヴィオラさんはアチコツチの店やら何やらを忙しく覗いている。アタシとソフィアはそんなヴィオラさんとはぐれないようにギルドのある宿に向かって3人で歩いていると……

ふと、ソフィアが立ち止まった。

「どしたの？」

はぐれないように手を繋いでいるアタシも立ち止まらざるを得ない。……ので、ソフィアの視線の先を探ってみると……

人が忙しそうに通過ぎていく大通りの中に……1人の少女が微笑みながら立っていた。

金髪で白い服……フォーマルドレスというか礼式服みたいな簡素ながらも仕立ての良さそうな服を着て……そういう服には全く似合わない、ひねた十字架みたいな杖？……いや、鞘に収まっている歪んだ剣みたいなのを持って……コッチに向かって小さく手を振っている。

で……だ……

アタシもソフィアが立ち止まった理由の一つはすぐに判った。

身体が半透明……つまりは単純に言って……幽霊。少なくとも霊体に間違いないっ！

……同じ？

いや。なんとも、昨日といい、今日といい、精神的に衝撃的なことが多すぎるんで……昨日の暑さボケかな？ いや、そんなことは関係ないっ！

兎に角、真っ昼間の街角のしかも大勢の人がいる大通りに……幽霊？

随分と大胆な幽霊さんだ。

向こうがゆっくり近付いてくると……何故か、ソフィアは後ずさりし始めた。

「え……なんで？ そんな……ダメ。近付いちゃ……消えてしまう……」

なんのことだろ？ と、悩むアタシを余所にソフィアの後ろから不意にちよつとだけ見慣れた顔がひょこりと出てきた。

「ソフィア、見つけたよ。上質な紫銀の鎖。コレで魔石をちゃんとしたネックレスに……って、どしたの？」

ヴィオラさんはすぐにソフィアの異変に気づき……その視線を追って……幽霊さんに気がついた。

「え……ネメシア……なんで？」

驚いたあまり……紫銀の鎖を落としているし。

とはいえ……ネメシア？ ……え〜と。何処かで聞いたな。……ん〜と。

(……清き光の浄化のネメシア。解毒と施術の鋭きラディア……)
そうだ。昨夜聞いた聖アイルコンティ又寺院の三大修行尼僧……
って、おい。その……

「ネメシア？　さん？」

既にアタシのすぐ横まで近付いた幽霊さんに声をかけてしまった。

幽霊はアタシの方を見て、微笑みが満面の笑みと変わって、小首を傾げた。そして唇が小さく動いた。アタシの読唇術が確かならばその動きは……『久しぶりね』……なんだけど？

「何処かでお逢いしましたっけ？」

と思わず問い掛けてしまったアタシに、幽霊さんはちょっとだけ戸惑った表情になって……困った顔のまま微笑んでいる。……のかな？

「アリア……逢ったことあるの？　あ、ダメ。近付いちゃ。浄化してしまいますっ！」

幽霊さんはソフィアの方へと近付いていくんだけどソフィアは片手で杖を背に隠し、ヴィオラさんをもう一方の手で制止しながらまだ後ずさりしている。

そか。

ソフィアの基本魔法は浄化。浄化の魔法は除霊とかの時に使う魔法。ソフィアとしては幽霊さんに近付きたいんだけど、近付くと……除霊してしまうから近付けない。……そういうことだな。

なんか……幽霊に気圧されている白魔導師って感じで……間抜けっぽい光景だ。

超強力な白魔導師二人を気圧している幽霊のネメシアさんは腰に手を当てて立ち止まり……『何言ってるんよ、貴女達』みたいなゼスチャーをして……ふと、気づいた感じでヴィオラさんが落とした紫銀の鎖を拾い上げ……振り返ってにつこりと笑いながら、手に持っていた剣みたいなのに巻き付けていった。

『良いモノ拾った』みたいな感じで……

ん。ここで気にする必要はないんだろうけど……なんで幽霊なのにもノが持てるんだろ？

巻き付け終わって……アタシを見て……『私の基本魔法を思い出すようにあの二人に言ってくれる？』と唇が動いた時……不意に後ろで大きな音がした。

「馬鹿野郎っ！ なんにもアタシのことを思い出せないなんてどういっつもりだいっ！」

罵声と共に通りに転げ出てきたのは……薄汚れた僧服を身に纏った青白い男。

そして、その男を蹴飛ばしたらしいのは……ギルドの入り口に仁王立ちしている……金髪で右が紅鋼玉、左が碧鋼玉みたいな綺麗な瞳の剣術師。中に鎖を仕込んでいるらしいそれなりに重そうな樹綿のローブに傭兵の様な肩鎧と腰鎧、腰に2本の幅の広い剣を下げて腕組みして……左の顔にギザギザの三条の傷が額から頬にかけてあるけどかなりの美女だった。序でに言えば……腕組みしているから判ったんだけど引き締まっているけどかなりのプロポーションだな。どうでも良いか、これは。

5・遭遇（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

6 ・ 奇妙な集まり（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

6・奇妙な集まり

6・奇妙な集まり

ギルドの食堂で長テーブルの端に着いているのは……紫銀の鎖を巻き付けた剣を持っているネメシアさん。その隣にアタシ。アタシの隣はソフィアの人形達、ただし予備の袋鞆の中。ネメシアさんの向こう側にソフィア。ソフィアの隣にヴィオラさん。……で、ヴィオラさんの隣に美人剣術師。その隣というかネメシアさんの反対側の席で小さくなっている薄汚れた感じの青白い男。青白い男とアタシの間にはまだ数人座れるぐらいの席は空いて居るんだけど……まあ、誰も座りには来ないよねえ。

ネメシアさんは半透明の幽霊だし。ヴィオラさんはぐちゃぐちゃに泣いているし、ソフィアはヴィオラさんを宥めるのに手一杯だし、ヴィオラさんの隣の美人剣術師は『殺すぞ』オーラを目一杯放っているし、青白い男は『私に話しかけると不幸になりますよ』オーラをソレなりに放っているし、人形達と見ればなんか袋鞆の中で身構えて、青白い男を警戒しているし……

アタシはアタシで『何がどうしてどうなったらこうなるの？』オーラを自分で放っているのがよく判るし……

実際、何故にこうなって居るんだろ？

「なんで……ぐし……アンタが……死んじゃうんだよ……ネメシアあ……アンタ……あんなに強かったじゃない……三大尼僧って呼ばれてたけど……アンタは別格で……ぐし……抜群で……ぐし……ワタシが足元にも及ばないぐらい……ぐし……強かったのに……ぐし……」

泣かれている本人のネメシア（幽霊）さんは……見るからにのほんとしていて。『そうは言っても死んじやったんだから仕方ないじゃないの』みたいな感じで。

「ネメシアさん……なにか、ヴィオラさんに応えてあげて下さいま

……きゃあっ！」

ソフィアの奇声に何事かと見れば、ネメシアさんが二人を見ている。……ただだよな？

「ネメシアっ！ わ、判ったから。目を閉じてっ！」

ヴィオラさんとソフィアが怯えているというか怖がっている？

何故に？ どんな目で睨んでいるんだろと廻り見ようとしたら……コツチを振り返ってにつこりと笑っている。『二人とも失礼よね？』と言わんばかりの笑顔なんだけど……そういえばいつも目を閉じている……というか長い睫毛プラス常にニコ目なんで瞳は見えないな。

どんな瞳なんだろ？

しかし……除霊を仕事のひとつとしている白魔導師の前でこんなに平然としている幽霊って……史上初なんじゃないの？ ……しかも除霊の効果があるという浄化の法力を帯びている光の杖の横で……ね。

浄化の法力を帯びている杖の横でも平気なのは……ネメシアさんの生前の法力振動数が1で尚かつ基本魔法が浄化だったからだそう。よく判らんけど。

まあ、そんなことは置いておいてだ。美人剣術師と青白い男はなんなんだろう？

「……えーと。すみませんけど……取り敢えず、御名前を教えてくださいませんか？」

誰も尋ねる雰囲気がないので、アタシが美人剣術師に話しかけてみた。

「アタシは……エアリエス。ギルドじゃ双鋼玉眼のエアリエスで通っている。コツチの青白いのはグレイ。アタシの命の恩人の……人形遣いさ」

ざわっと……全員が毛羽立った。いや、食堂にいた全員がざわついて……そそくさと距離を置いて座り直している。……んだけど、アタシ達は席を立つわけにもテーブルを移るわけにもいかずに……

そのまま座っているしかなかった。

人形遣い？ 初めて見た。

確かに……ソフィアが人形遣いと間違われるのがもの凄く嫌なのがよく判るくらい闇っばいオーラを放っている……んだけど、なんか戸惑っている感じはなんだろう？ 自分が何者かを理解できずに……いきなり陸に上がったのに呼吸できて大丈夫なことに戸惑っている魚みたいな感じ……の様な表情をしているような気がするんだけど……気のせいかな？

兎に角、この世で嫌われ者の人形遣いが命の恩人？ 随分と波瀾万丈な人生のようだ。

しかも、さつきは蹴飛ばしていたし。

それにしても命の恩人を蹴飛ばすというのは……どゆこと？

「で、アンタ達は？ その幽霊の知合いなんだろう？」

美人剣士のエアリエスさんが睨んでいるのは……幽霊のネメシアさん。

んゝまるつきり知らないと言うことではないんだけど……知合いというのもちよっと違う気がする。とはいえ、説明はしておこう。

「アタシはアリア。遺跡探検家。この町には近くにあるという遺跡を捜しに……で、アタシと一緒に旅しているのが……杖を持っている白魔導師のソフィア。ソフィアの知合いで昨日から同行しているのが……貴女とソフィアの間にいるヴィオラさん。そして、ソフィアとヴィオラさんの……えゝと。同じ寺院で修行していた……らしい人の幽霊が……ネメシアさん……でいいんだよね？」

ネメシアさんは剣を抱え持ったまま、アタシに向き直って『よく判っているわね』みたいな感じで小さく拍手している。随分と呑気な幽霊だ。

ソフィアが持っている杖が伝説の『光の杖』というのも、ソフィアとヴィオラさんとネメシアさんが誰も見たことがないという伝説の聖アイルコンティ又寺院出身というのも、袋鞆の中の人形達が四力の精霊の……ミダルだっけ？ とにかく、動くというのも……面

倒くさいから説明省略。タダでさえ、そういうことを言ったら落ちてくまで時間が掛かるんだから。こんなややこしい状況でもつとややこしくする必要もないでしょ？　だよな？

「それで……ネメシアさんとそちらの関係は？」

と、問うアタシに…… 瞋をキツと上げて…… 序でに腰に下げている2本の剣の内の一本をすらっと抜き、その切っ先でネメシアさんを指して言い放った。

「その幽霊が持っているのがアタシの剣っ！　そして、その剣はコイツが死ぬ間際に封印呪をかけてあるっ！　そのコイツを生き返らせたいのがその幽霊なんだってさっ！」

はひ？

えーと。ちょっと待って。整理するから。

それにしてもやたらにギザギザがついた剣だな。いや、それはどうでもいいや。

6 ・ 奇妙な集まり（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

7 魔剣と人形遣い 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

7・魔剣と人形遣い 1

7・魔剣と人形遣い

話は聞くだけ聞いて……それぞれ自分の部屋に戻っていった。

と、言っても、アタシとソフィアとヴィオラさんで一部屋取ったから、そこに入っただけで、幽霊のネメシアさんもついてきたけど……まあ、幽霊だから宿代も取られんだろうから何処にいても良いだろうし。エアリエスさんはこのギルドというか宿に傭兵……じやなくて警護要員として雇われているらしいので用意されているという部屋に戻って……人形遣いのグレイさんは？ まあ、いいか。

んで、昼食は部屋で取ることにしたのだが……ま、なんか食欲がないのは、アタシもソフィアもヴィオラさんも同じようで……部屋のテーブルには手が着いていない八条麦のパンと紫カビの堅チーズと大蜜蜂の黒蜂蜜。典型的な菜食メニューだけどそれは尼僧ということとで宿の方で気を回してくれたのだろう。

そうそう。ヴィオラさんとネメシアさんは外に出て行った。なんか、ネメシアさんに連れられてヴィオラさんが連れ出されていた感じでもあるんだけど……まあ、今居るのはソフィアとアタシの二人きり。あ、人形達は相も変わらずアタシに引っ付いているけどね。で、ソフィアもなんか呆けている。アタシも気が乗らない。それというのも……剣術師さんの話が凄すぎた所為だろう。

剣術師のエアリエスさんの小さい頃の記憶はなくて、気がついて知らないお婆さんと傭兵みたいな仕事をしていて……その内、お婆さんとも別れて……この辺ははつきりとは言わなかったんだけど、多分、仕事のトラブルか、何処かの戦に巻き込まれてお婆さんが亡くなった感じだ……一人でいろんな仕事をしていたら、とある事で軍勢に取り囲まれたときに……何故に囲まれたのかもはっきりとは言わなかったけど、多分コレも仕事のトラブルだろう……人形遣い

のグレイが助けてくれたのはいいとして……その際にグレイは亡くなってしまったと。んで、亡くなるときに剣に封印呪をかけられて人を殺めることはできなくなり、ついでに『復活する』と言われて……それを信じて待つていたら……幽霊をつれて顕れて、しかも記憶の一部、忘れていて（しかもエアリエスさんに関することは殆ど忘れたようだ）更にはその幽霊の支配下というか手下になっていた……ということだ。

判った？ アタシはなんかまだ判らない。というか釈然としていない。

何故に釈然としていないのかもよく判らないけど……兎に角、納得していない。

何故だろう？ こんな感じ、前にもあったな……

「ちょっと良いかい？」

不意に……ドアがノックされ、エアリエスさんが尋ねてきた。

どうぞと部屋に招くと……ドアの外で廊下に座っているのは……

グレイさん？ エアリエスさんだけが中に入ってドアが閉められた。なんか変な呪紋様の木の箱を肩に背負っている。

「グレイさんは？」 一応、気になって確認する。

「ああ。良いんだってさ。やっぱり、脱籍したから白魔導師関係は苦手みたいだね」

椅子に腰掛け、箱を下ろしてアタシとソフィアの顔と……壁に立てかけてある杖をゆつくりと見てから……確認してきた。

「あの泣き虫の大猫娘と……幽霊は？」

「ん。なんか、用事があるみたいで出て行っただ。ネメシアさんに何か用事？」

なんか馴れ馴れしいぞ。アタシ。初対面に近いのに……まあ、あれだけ波瀾万丈な身の上話を聞いたせいかもしれないけど……

アタシの言葉にふっと微笑んで、ちょっとだけ安心した感じで『

そう』と小さく応えた。

エアリエスさんの右の紅い方の瞳は……見てみると何というか少しずつ苛立つてくるのは何故だろうと思いつながらも碧い方の瞳は見ていて安心してくるのも……何故だろうね。傷があるけど左の顔の方が好きだな。傷は……見てみると心苦しくなってくるけど、右の瞳ほどじゃない。

……何を言っているんだ？ アタシは。

「用事があるのは……アンタ達。まあ大した話ではないんだけど……」

もう一度、アタシとソフィアを見て……戸惑う感じで続きを言った。

「一緒に……」

「……一緒に？」

口を閉じて……なんか頭痛が始まったような感じになって……言い切った。

「旅してくれないか？」

なんで？ というか、昨日から同行人が増える一方で、今更2、3人増えてもどうでも良い感じなんだけど……でも、なんで？

「エアリエスさんと？ ですか？」

なんか、ソフィアも構わないという感じなんだけど……念の為、確認している。という感じ。

「いや、アタシじゃなくて……あの幽霊と」

はあ？ 幽霊をアタシ達に押しつける……という事かな？

「あの幽霊が持っている剣はね……」

言葉を切って……ソフィアを見て、それから改めて杖を見て……目を閉じてから……続けた。

「魔剣なんだ。アタシにしか抜けない……あらゆるモノを切り刻むことができる魔剣。幾多の血を、穢れを吸わせてしまった魔剣。

……だから、一緒に旅して……何処かの……誰も辿り着けないような場所に隠すか……破壊してくれないか？」

魔剣？ あの剣が？ ええい。また、ややこしくなってきたっ！

7・魔剣と人形遣い 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

7・魔剣と人形遣い 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

7・魔剣と人形遣い 2

「でも……あの剣には 그레이さんが封印呪をかけてあるのでしょ？
魔を封じられているのでしたら……」

んむ。やっぱりこういう事は専門家に任せるべきだな。ソフィアは白魔導師でこういう事の専門家だからして。

「いや。問題は…… 그레이が変わってしまったということ……らしいんだ」

エアリエスさんは額に手をあててゆっくりと思い出すように言葉を続けた。

「アイツは…… 그레이は人形遣い。人形遣いの弱点は……」
ソフィアをじっと見る。

「……アンタも知っているんだろうけど、人形遣いの弱点は『浄化』の術。実際、アタシの目の前で……」

瞳を閉じて……暫く黙ってから、続けた。

「……けれど、その時に自分自身で浄化の術を……応用した術を使ってアタシを救って、そしてあの剣に封印呪をかけた。ソコまでは良いんだ……良いらしいんだけど……」

エアリエスさんが言っているのは多分、 그레이さんの説明なんだろうな。自分で言っていることを自分自身ではまだ理解していない感じだからね。

「問題は……生き返らせたのがあの幽霊。いや、あの幽霊の基本魔法が浄化ということらしい」

ん。なるほど。

「つまり、弱点だった浄化の術を死の間際に使ったのは良いとして……生き返った法力自体が浄化の術なのが問題ということ？」

アタシの問い掛けにエアリエスさんが戸惑いながら頷く。したり顔でアタシは微笑んだ。……けど、合ってるらしいのはいいとして言ったことには全く自信がない。

「どういう事？ アリア」

ソフィアに問い掛けられてアタシは自分の頭の中を整理しながら説明した。

「 그레이さんの弱点は浄化。それが判っていたから浄化の術自体を使うことは出来なかった。浄化の術を知っていたけどね。でも、死ぬのが判っているときには、弱点なんぞを気にする必要もないから浄化の術……の応用術を使ってエアリエスを救って、序でに魔剣に封印呪をかけた。これも浄化の術を使ってね。それで復活してみたら……自分自身が浄化の術で復活されていたと。つまり……」
え〜と。ソコまでは良いんだよね。

「つまり……弱点だったのが弱点じゃなくなっているということが問題……なんじゃない？」

……だよね？

「つまり飛べないニワトリが飛べるようになってしまったというか、魚が陸の上で普通に呼吸できるようになって『あれ？』というようにな……感じなんじゃない？」

自信ないけど……さっき見た感じとかの総合的判断でそういうことだと……そう考えて良いんだよね？

……と、アタシが自分自身の説明に納得しようとしているけど、ソフィアもエアリエスさんも『なるほど』みたいな顔をしているから良いことにしておこう。

「ん。多分そういうことだね。この木の箱も……」

床に置いた木の箱を指さしてエアリエスさんは説明を続けた。

「アイツの持ち物。死ぬときにアイツから預かったんだけど、アタシが開けようとしても開かないんだ。さっき聞いたら 그레이の法力の……固有振動数とかで鍵をかけてあるらしいんだけど……」

「……いま、 그레이さんが開けようとしても法力の振動数が変わってしまっているから開けられないんでしょ？」

……と、憶測で言い切ってみた。

「そう。流石だね」 エアリエスさんがにつこりと笑って感心して

くれた。

懐かしい晴々とした笑顔だ。……ん？『懐かしい』？なんで？
「そうなんですか？」

アタシの疑問に気づくはずもなくソフィアはそつと指で箱の呪紋
様を触ってみる。……と、

ばちっ！

小さな火花が散ったような音を放って、ソフィアの指を弾いた。

……呪紋様が？それとも箱の封印呪？

「箱は古いけど……呪紋様はかなりの効果を発する品ですね。しかも、鍵がかかった状態のまま保持している……しかも表面を霊精でコーティングしてあるから……霊精が尽きるまではこのままですね」

霊精で？霊精って法力の源って言うていたよね？昨夜。

「つまり、箱自体が法術を発揮中って事？だよな？」

尋ねるアタシにソフィアが振り向き、につこりと笑って頷いた。

エアリエスさんは「なるほど」という様な顔をしてから「さすがだね」みたいな顔でアタシを感心している。

ふふん。なんか魔法術のことが判ってきたぞ。……たぶんソフ

ィア達の億分の一ぐらいだろうけど。

「……それで、あの剣にかけてある封印呪も今、どうなっているのやら。そして……どうなるのか判らないんだ」

んむ。掛けた本人が戸惑うぐらい別人になってしまっているようなモノなんだから……そういうことだよな。

「どんな封印呪が掛けてあるんですか？」

7・魔剣と人形遣い 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

7・魔剣と人形遣い 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

7・魔剣と人形遣い 3

「元々は魂を吸い取るという魔剣。だけど封印呪の効果としては……あの剣で斬った人は光を浴びると必ず生き返って……ついでにアタシに対して恐怖を抱くらしい。斬られる前の数日ぐらいの記憶を失ってね。実際……その効果は確認している。いつまで封印呪の効果が続くか判らなかつたから……ここ暫くは抜いてもいなかつたからどうなっているのか判らないけどね」

ソフィアは難しい顔をして考え込んでいる。複雑な法術なのかな？
「光の術……治癒の術が基本のようですけど……かなり複雑に変形させた術ですね。変形方式が人形遣い特有なモノなのかも……」

ソフィアははつきりとは言わないけど……多分、封印呪は斬られた相手の魂を糧としているような……そんな感じなんだろうな。

「でも確かなのは……」

訴える様な目でエアリエスさんを見てからソフィアが言った。

「……魔剣であるならば所有者に対しても封印呪の効果が何かしらあるはずです。そして封印呪を解除したときも……」

ソフィアが気にしているのは……エアリエスさんの事なんだろうな。悪い人じゃ無さそうだし、実際、魔剣とかの事を話してくれたから素直な人なんだろう。つまり善人だよな。……そういう人が何で魔剣なんかを持っているのかは……疑問だけど。

「……破壊するという行為がエアリエスさんにどういう結果をもたらすのか……予想できません。何処かに隠したとしても誰かがその魔剣を見つけないとも限りません。そして見つけられて使ったときにも……」

うーん。封印するというのは難儀なこと……なんだな。

「……すみません。どうしたらいいのか、暫く考えさせてください」
ぺこりと頭を下げるソフィアをエアリエスさんは「しかたないね」
みたいな感じて静かに見ていた。

「ん。白魔導師になったアンタがそういうんじゃ、アタシに出来ることは何もないね。頼んだよ」

ん？　なんか変な言い回しだな。いや、言い回しは変じゃないのか？

けど、何か引つかかるな……。いや、何が引つかかるんだ？　アタシは？

「じゃ、明日から武術大会だ。その警護とかで忙しいから……。ヒマになるのは10日後ぐらい。だから……。それまでは頼むよ」

「宿代の方は安くするようにしておくから」と言い残し、箱を担いでエアリエスさんは出て行った。まあ、それまではここにいてくれという意味なんだろうな。

「ふう」と深く息を吐いてソフィアは考えていた。

「難しいよね？　人が掛けた封印呪なんて」とアタシの問い掛けにソフィアは小さく首を振って否定した。

「難しいのは封印呪自体じゃなくて魔剣の破壊。あの人に影響のない破壊の方法なんて……。それに……」

戸惑いが隠せないような目でアタシを見て聞いてきた。

「どうしてエアリエスさんは……。あんな人形遣いなんかと……」

なんか悔しそうだ。そして……。悲しそうだ。

「人形遣いだけど……。エアリエスさんを助けたりしてるんだから悪い人では無さそうだよ？」

「……。そうじゃなくて」

なんか凄く苦しげな表情だ。

「……。そうじゃなくて、なにか……。理由は判らないけど……。あの人が……。あの人の何かが嫌な感じがする……。できれば……」

口の中で『近くにいて欲しくない』というような言葉を呑み込んだ感じでソフィアは両手で頭を抱えた。

「……。いけない。白魔導師なんだから、誰かを嫌っていたりしたら……。ダメなんだ」

ソフィアは白魔導師であり続けようとしている。

それは本当の家族にあつたときに判つて貰うための唯一のサインだから。でも、白魔導師であること自体は家族と別れる原因でもある。その辺の矛盾と……いや、それ以上の何かがソフィアに嫌悪感を抱かせているんだろうか。

「仕方ないよ。誰でも虫の好かないというか……波長の合わない人はいるって」

アタシの言葉に少しだけ楽になったような感じで、ソフィアは顔を上げた。

「でも、白魔導師は……万人を受け入れないと……法力を失つてしまふ」

戒律かなんかなんだろうね。その理屈の根拠は。

「関係ないって。だって、ソフィアは……アコライト、修行中の見習い僧なんだから。完全じゃなくても誰も責めたりしないよ。それに法力は……少しぐらい無くなつても『超絶法力』には違いないよ」

アタシの言葉に……やっと安心したようににっこりと笑った。

「ありがとう。アリア。本当にありがとう」

むぎゅつと抱きしめられた。……ええいつ。また呼吸困難になつてしまった。……けど、まあいいや。暫く見ていなかったような飛びきりの笑顔だったし。

……でも、ちよいと力が強すぎるぞ。マジに呼吸ができな……

「ソフィア。帰ったよ」……って、何してんの？」

と、ドアを勢いよく開けてヴィオラさん達が帰ってきた。

助かった。もう少しで気絶するところだった。

7・魔剣と人形遣い 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

8 ・必要な……モノ？（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

8・必要な……モノ？

8・必要な……モノ？

ヴィオラさんが買ってきたのは新しい紫銀の鎖と丈夫そうな僧衣……じゃなくてなんだその服は？

「これは戦闘用僧衣。肩口とか胴回りに余裕があつて、腰、膝の動きが邪魔されない法衣。ま、ワタシのサイズがあるか不安だったけど、武術大会のおかげか、ちゃんと在ったよ」

んじゃなくて、何故にその服を？

「ひよつとして……武術大会に出るの？」

アタシの問い掛けに……ヴィオラさんはにっこりと笑つて応えた。「そ。さつき、この部屋を借りるときに一緒に申請してきたのさ。

実際に手合わせしないとな。実力があつたとしてもワタシに勝てるくらいじゃないと。婿の基準は厳しいのさ。かははは」

泣いてた大猫娘がもう笑つてる。

というか……普通に武術大会に優勝できるような人が相手だとしても……聖アイルコンティ又寺院出身の実力者に勝てるのか？ ソフィアが桁外れに強いんだから、ヴィオラさんだつてそれなりに桁違い程度には強いはずだ。

どうなんだろうと、ソフィアを見ると微笑んでいるけど『どうしましょ？』みたいな感じだし、ネメシアさんは首を左右に振つて呆れている。

……やっぱり、余裕で優勝してしまいそうだな。

ふと、手に違和感を感じると……ネメシアさんがアタシの手を持つて『外に行きましょ』みたいな感じでドアを指さしている。

「あ……ソフィア。外に行つてもいい？」

外に出てみると……ネメシアさんは片手で剣を抱いて、もう片手でアタシの手を持って先へと進んでいく。アタシの頭とかにはソフ

イアの人形達が引つ付いている。護衛みたいなモノなんだろうけど、ソフィアも心配性だな。アタシだって一人で世界を旅していたんだから、破落戸の2、3人……って、改めて通りを見ると一騎当千のような顔をした輩がアチコチで殺気をこれでもかと放っている。熊のような『怪力です』と言わんばかりの巨漢やら、三白眼で『今まで殺った人間の数は数えたことがあります』みたいな薄気味悪い剣士とか。

ん。確かに武術大会が終わるまでは無駄な争いは避けた方が良さそうだな。

武術大会が無くても無用な争いは避けた方が良いという常識的な意見は却下。

そのぐらいの気構えがないと、すぐにつけ込まれる世界なんだから。

で、ネメシアさんがアタシを連れて行ったのは……古道具屋。

古すぎて効果が不明な盾やら武器やら防具やら杖やら……そんなのが『誰にも買われないので数年はここにいますよ』みたいな感じで埃を被っている。

大丈夫か？ この店。

ネメシアさん

幽霊を見ても動ぜずに入り口付近で店の主人は居眠りというか微睡みに戻っていくし。

と、ネメシアさんがすいっと奥に入って……棚の上の陶器を指さした。

につこりと笑う笑顔の意味は……『コレを買って頂戴』なんだろうな。想像するに……ネメシアさんはさっきもヴィオラさんに買い物ねだりに連れ出したんだけどヴィオラさんは自分用の買い物で頭が一杯で聞いて貰えなかったんでアタシを連れ出したと。……そんなところだろうね。

「判った。それだけで良いんだよね？」と、一般慣用句的に言ったのがいけなかった。

『あら？ それじゃ……』みたいな感じで、アレやコレやと……

アタシの財布の都合もあるんで……3つほどで勘弁して貰ったけど、結局、財布の底が見えかけるぐらい買わされてしまった。高いぞっ！この店っ！……ま、そんなんだから、埃かぶってても商売になっているんだろうね。

将来、自分の店を持ったときの参考にさせて貰おう。

宿に帰って、品物をテーブルに並べ、仕方なしに溜息混じりで埃を払い、樹綿の布で磨いてみる。

ん。なんか変な呪紋様が刻まれている取っ手が4つ付いている陶器のコップ？ 同じ様な呪紋様の陶器の……笛かな？ もう一つは……金属だか陶器なんだかよく判らない球形の……鈴かな？

「アリア。何買ってきたんだい？」

「ネメシアさんに聞いてよ。アタシも知らないんだから」

と、ネメシアさんを見るとアタシが磨いた陶器のコップを嬉しそうに手にとって、ソフィアに差し出した。

ソフィアがきよとのんとした顔で暫く見ていたけどネメシアさんの唇が僅かに動いたのを見てアタシに「なんと言っているの？」みたいな顔で助けを求めてきた。

「えーとね。『霊精を御願いね』って言ってたみたいだけど」

もう一度、きよとのんとした顔でネメシアさんを見てからソフィアはコップを手にとった。

「ネメシアさんのお望みでしたら構いませんけど……」

コップを手に取り……何故かじつと見ている。

「あら。これってムーマ文明時代の儀式用聖杯じゃないですか。アリア。流石ね。遺跡探検家というのは伊達じゃないわね」

やっと判ったの？ って、それはネメシアさんが……あれ？ ちよい待ち。ムーマ文明の儀礼用聖杯って……

「もの凄い骨董品じゃないっ！」

「そうよ。知らないで買ってきたの？ これ、好事家だったら金貨100枚は……きゃあっ」

ソフィアが声を上げて引いたのは……ネメシアさんが睨んだだけだよね？ アタシは真横というかやや斜め後方にいたんでネメシアさんの表情はよく判らなかつたけど。

「わ、判りました。霊精ですよね」

コップを指先に持ち、薬指を中に入れて二度三度と振ると……縁一杯までの虹色に煌めく透明な液体が満たされた。……手品みたいだな。間違いなくネタがある訳じゃないんだけど。

そしてコップをネメシアさんに渡すと『悪いわね。ありがと』と言わんばかりの笑顔で受け取って……一気に飲み干した。

『ぶはあっ』と満足げな顔で微笑むと……もう一度、コップをソフィアに差し出した。

『お代わり頂戴』だね。間違いなく。少しネメシアさんの身体の透明度が下がっているのは……霊精の効果なのかな？

結局、七杯ほど霊精を飲み干すと、八杯目の霊精を指にとって魔剣に巻き付けた紫銀の鎖を磨き始めた。

「何しているんだろうね？」

とソフィアに聞いてみても困った顔で首を小さく振るだけ。ソフィアに判らないんじゃないアタシに判るはずもない。

8・必要な……モノ？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

9 ・その夜の夢（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

9・その夜の夢

9・その夜の夢

その夜。見た夢は……やはり昨日の夢の続きだった。

金色の花が咲き乱れている草原。歩いていくと……金髪の少女が摘んだ花で冠を作っていた。

『あら。今日は来ないかと思っていた』

（なんで？ アタシの夢なんだから見ようが見まいがアタシの勝手でしょ？）

『……ふふっ。ここはアナタの夢の中じゃないわよ。まあ、普通は夢でしかこれないけどね』

屈託無く笑う少女。ふと真顔に戻り……アタシの顔を覗き込む。

『どしたの？ 変な顔しているよ』

その瞳は……綺麗な金色。艶やかな黒い睫毛によく似合っている。（ネメシアさん？ だよな？）

につこりと笑う。よく見ると金髪も黒髪が混ざって……濃い金髪に仕上がっている感じだ。

『そだよ？ なんか変？』

（いや、ソフィ姉えとかがネメシアさんの瞳を見ると驚いている感じだから……どんな瞳なんだろうと……）

『普通でしょ？ まったくソフィアとかは驚き過ぎなのよ』

（そかな？ 滅多に驚かないんだけど……）

『ま、良いじゃない。それより遊びましょ』

それから……花摘みしたり、摘んだ花でネックレスとかティアラとかクラウンとかを作ったり……追い駆けっこしたりして遊んだ。

ふと気づくと……草原の端に突き刺さっているのは銀の鎖が巻き付いた十字架のような剣。

エアリエスさんの……魔剣……だね。

『どしたの？』

（あの剣……どうして持っているの？）

剣を見て、悲しそうな顔になって……アタシに笑いかけて応えた。
『あの剣はね……』

……と、目が醒めた。

ソフィアに抱きつかれていたわけではなく、ヴィオラさんに押しつぶされたわけでもなく……単に二人の間で暑くて目が醒めた。いや、何か音がした？ しなかった？

「……あじい」

ともあれ暑い。毛布を剥いで起きあがってみる。

夏が間近だというのにこの町の夜は寒いぐらいに涼しい。夜の冷気で身体を冷やす。

部屋の片隅にソフィアの光の杖が窓からの月明かりでぼうつと淡く光っている。魔王を討つという伝説の杖。

その反対側の部屋の隅の椅子に……あれ？ 魔剣というかネメシアさんがいない。

「ん？ 何処に？ ンをわっ」

見渡しているアタシをソフィアの腕が毛布の中へと引きずり込んだ。

「アリア……寒いわよ」

見ると……やっぱり寝ている。寝言だな。もう一度、腕から逃れて起きようかと考えているアタシの上にネメシアさんの腕が降ってきた。

「んぎゃ」

動けない。いや、無理に動けば動くことはできるのだが、二人とも寝ているし、起こしてまで起きるほどの気力もない。

二人ともアタシの反応に気づくこともなく……アタシも夢の中へと戻っていった。

9 ・その夜の夢（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

10.とある詩い（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

10・とある諍い

10・とある諍い

翌朝、目覚めるとネメシアさんはちゃんと椅子に腰掛けて剣を持っていた。なんか……疲れているような感じだったけどソフィアがつくった霊精を7杯ほど飲んでからは元の『のほほん』とした感じの笑顔に戻った。しかし……なんで剣を持っても何ともないんだろう？ 白魔導師だったら食事用のナイフだって持てなくて難儀するというのに。実際、ソフィアだってヴィオラさんだつてなるべくナイフを使わずにフォークとか……東の方の国で使っているという『ハシ』とかいう道具で食事している。ソフィアなんか最近ではフォークだって使うのに躊躇っていて、聖絹布の手袋越しで無いと握めなくなっている。……これは『法力酔い』とかいう病気のせいかも知れないけど……

幽霊になると白魔導師の戒律とかは関係なくなるのかな？

でだ、ヴィオラさんは武術大会に申請しに行つて……ソフィアはこの町の武器屋探し。ソフィアが別れさせられた家族つて武器屋をしているらしい。顔も思い出せないけど、姉と妹がいるのは確か。そして姉は史上最年少で武術大会に優勝。妹は黒魔術が得意……で、周り近所に迷惑をかけていたのも確からしいので、家族構成とかから判るんじゃないとたどり着く街々で尋ね歩いている。ちなみにソフィア自身も姉が史上最年少で優勝した時に子供の部で優勝していたらしいけど……そういうことなら、顔が思い出せなくてもすぐに判るだろう。ソフィアが判らなくても相手は判るはずだからね。

さて……アタシは留守番していても仕方ないので……護衛のソフィアの人形を頭とかにひっつけて、この町の近くにあるという遺跡の手がかり探し。序でに次の遺跡の手がかり探し。ここで遺跡が見つからなかったり、大したお宝がなければ次の遺跡のお宝に頼るしかないからね。この頃、大した収穫がないのでソフィアの財布に頼

りつきりだし。ちつとはいいい宝を見つけないとね。

……で、骨董の目利きが期待できそうなネメシアさんにも同行願っている。

最初は、戸惑っていたけど今は嬉しそうにアチコチの店を覗いては品定め。昨日の店のは……ちょっと高いので、この町を出るときに財布と相談して買えばいいだろうと考えて違う店を回っている。

「へんだなあ」

何が変わかというのだ。誰も遺跡の事なんて知らないというのだ。

まあ、気づかれない遺跡というのは結構あるけど、入り口とかの手がかりはそれなりにある筈なんだけど……

「精霊の門なんて誰も知らないというのは変だよ。ネメシアさん」
問い掛けられたネメシアさんも戸惑っている感じた。

前に見つけた絵地図に書かれている古文字によるとだ、この町の近くに『精霊の門』という洞窟があるらしい。この地図に記述されているムーマ文明儀礼文様とかいう文字をソフィアに教わっているけど……まだ単語しかわからない。ともあれ、地図に書いてあるのは……

「……『幻は古の岩』『鍵を紋様へ』『新しき光へ』『古き光より』
『3つの試練』『重なる響』『沈黙か契約』『黒き水晶の矢、忌々しき矢を……』
……なんだけどなあ……文章になりそうではないし……
……画の方しかあてにならないんだよね」

『幻は古の岩』と『水晶の矢、云々』という文だけ付け足して書かれているようにも見えるんだけど……元の画としては洞窟の入り口に浮彫りの柱が左右に建っている。ということは遺跡ということは知らなくても洞窟とか、壊れた石柱とかの話はそれなりにある筈なんだけど……

「武術大会で余所者が多いしなあ」

尋ねた相手がこの町の人だという確率自体が半分以下じゃ効率が悪すぎる。店の人達もかき入れ時とばかりにアタシの話には乗ってもくれないし……

「うーん。武術大会が終わるまで待った方が良いかな」

『そうね。その方が良いかもね』と仕方なさ気な笑顔でネメシアさんが応えてくれた時……人集りの向こうがなんか騒がしい。

「なんだろね？」 尋ねてみたってネメシアさんに判るはずもない。人を掻き分け、騒ぎの中へと入っていくと……何のことは無い。ぶつかつたとか足を踏んだとかで喧嘩になりかけているだけ。そんなのは良くある話なのだが……なんか一方が変な格好。

厳つい大男が千斤斧を二つ鎖で繋いだのを首から提げているのは……まあ良くある格好だとしてもだ、もう一方は……盾を両肩と二の腕に付けている。つまり4つ。そんな格好の人は今まで見たこともない。その人の横にいた関係者らしき女の人が心配げな顔で離れていった。

さて……確認したからさつさと退散。

ネメシアさんが何か言いたげだったけど、諍いに巻き込まれるのはまっぴらゴメンだ。それに勝敗なんて見た目で判る。

どっちが勝つかって？

決まっている。余裕がある方。つまりは盾の人。離れて見守っている女の人は盾の人の連れだろうけど、巫女さんみたいな格好しているって事は白魔導師かその類だろうし。サポートがあるということとはそれだけで負ける確率は低くなる。それを置いておいたとしても盾の人の表情には余裕がある。厳つい方の顔には相手の実力を探っているような心許なさがあり有りと浮かんでいたし。

で……アタシ達が入集りを離れたら後ろで鈍い音。ちらつと振り返ると厳つい方が空中に浮かんでいた。瞬後に地面に落ちる音。ふうん。殴り飛ばすというか殴り上げるなんてやっぱりかなりの実力だな。その後は人々のざわめきしか聞こえてこないから、一発で終わり。実力者同士の戦いなんて一瞬で終わるもんだなと改めて感心してしまった。

宿に戻ると……何故かソフィアがヴィオラさんを怒っていた。

「どうしてそんなことになったんですっ！」

「ゴメンよ。ワタシも知らなくてさ。ちよつとした間違いだよ。ゴメン。ホント。ワタシが何とか勝ち続けるから棄権して……」

「どしたの？」

割って入ったアタシの顔をソフィアは『ちよつと黙ってて』みたいな怒った顔から『絶対に乗ってこないでよ』みたいな顔を経て『……無理かな』となり『怪我だけはしないでよね』みたいな心配顔になっていた。

ヴィオラさんはと見てみれば『案外、いけそうだね』みたいな悪戯っ子みたいな顔でアタシを見ていたけど、ソフィアのジト目睨み攻撃に気づいて小さくなっていく。

アタシとネメシアさんは顔を見合わせて『きよとのん』とした顔のまま。

「……で。何がどしたの？」

10・とある諍い（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

11・ちょっと待て（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

11・ちよつと待て

11・ちよつと待て

え〜と。つまりだ。

昨日、ヴィオラさんが宿帳に宿泊者の名前を書いたつもりがそれは武術大会の申請書で、大会の申請しに行ったら「既に申し込んでありますよ?」と言われて間違いが発覚したと。キャンセルしようとしたら「ならば未納の申込金の金貨10枚をお支払い下さい」と言われたと。ヴィオラさんの手持ちでは当然足りなく、アタシだつてそんな大金持っていない。……ソフィアだつたら持っていそうだけど、金貨20枚なんてギルドに預けてある方から下ろさない無理なのは目に見えているし「預け金ではお断りいたします。ここは現金じゃないと」と言われてヴィオラさんは帰ってくるしかなかったらしい。

話は変わるといつか、関係しているけどギルドにはお金を預けることができる。現金を持ち歩いていたら危ないからね。ま、預けると言うよりはギルドが仲介した仕事をしたときに、報酬を後払いにするのが本当だけだね。ん? 利子? 何それ? お菓子の種類? 利子なんて言葉……ああ、金貨しの用語ね。そんなのは預かり金には付かないよ。

兎に角、手持ちに金貨20枚なんて無い。ヴィオラさんは参加するつもりだったから良いとしても、アタシとソフィアは参加するつもりなんか毛頭無い。

「兎に角さ。ワタシが6回以上、勝てばそれで金貨30枚になるから……」

一応、賞金はあるらしく、1回勝てば金貨5枚だそうなの。

……随分と阿漕な運営だ。参加費だけでボロ儲けだな。

「棄権したらそのときに参加費を取られるんだから、勝ち続けるなんて関係ないじゃないですか。私とアリアの戦いまでにヴィオラさ

んが6回も戦えないじゃないですか」

はい。ごもつとも。

ヴィオラさんも反論できなくて……仔猫のように小さくなっている。

「ネメシアさん……悪いけど、いいよね？」

アタシはネメシアさんに同意を求めたのは……昨日買った骨董品コップで金貨100枚ならば笛みたいのとか、鈴みたいのもそれなりには売れるはずだ。ネメシアさんはアタシの言いたいことがすぐに判ったみたいで『いいわよ』とばかりに満面の笑みを返してくれた。

「なに？ どうしたの？」

まだ飲み込めないソフィアと小さくなっているヴィオラさんを宿に残して、アタシとネメシアさんは品を手に骨董屋へと駆けていった。

「……はあ。足元みられた」

溜息混じりに呟くしかない。

結局、売れなかった。というか売らなかった。

念のため言つとくけど、買った店になんか持っていけないよ。それこそ買った値段より低い値でしか取ってくれないからね。

しかし……安かったなあ。最初は笛と鈴を出し、反応が良くないので残すつもりだったコップをも出したんだけど……出てきた値段は買ったときの値段より低い。武術大会モードで聞いてもくれないという感じた。

「だったら店を開けてないで見物に行けばいいのに」

……という愚痴も無理だ。開催は明日から、それまでは売れるモノは売ってしまおうという方針らしい。何故かという……どっちが勝つかというギャンブルが催されるらしい。そのための手持ちの資金が欲しい。それだけで開けているんだよ。買い取りなんかまっ

ぴらゴメンだ。……という事らしいんだよね。

ならば売る必要はない。少なくとも違う町に行けばそれなりの値段で売れそうなんだから。

「はぁ……参加するしかないか」

心配なのは……参加する事じゃない。ソフィアの怒りが収まらないことだ。

結局、その夜はソフィアの怒りを宥めるのに手一杯で……夢は見なかった。

翌日。闘技場の横にいた。

何やら複雑怪奇な呪紋が側面に刻まれた石床の闘技場。闘技場は4つ在って、4つの真ん中にこれまた見たこともない呪紋が刻まれた石柱が1本、斜めに立っている。石柱の上の方に水晶みたいのがあるんだけど……まあ、高そうな宝石の類では無さそうだ。なんかくすんで灰色っぽく変色している感じだし……

ちなみにこの町は東西南北に大きめの通りが走っていて、その交差点が八角形の広場。闘技場はその広場に東西南北の方向に一つずつ在る。石床の高さはアタシの背よりちょっと低いぐらい。普段は……演説会場とかなのかも知れないね。

で、ヴィオラさんとソフィアはアタシとは別の闘技場の横。御丁寧にも3人同時に別々の闘技場で戦闘開始……ということになっていた。ちなみにネメシアさんはアタシの横にいるけど誰も気にもとめていない。ここ数日……じゃないな昨日、歩き回っていた所為で幽霊であるネメシアさんの事は周知の事実となっている……らしい。んで、ネメシアさんは闘技場の側面に描かれた呪紋を恐る恐る触っては慌てて指を引っ込めている。……幽霊除けの効果でもあるんだろうか？

ちなみにソフィアの人形達は……アタシの横の袋鞆の中。「いざ

という時にね」とソフィアの心配により持つていくことを強制させられたのさ。人形というか精霊のミダルの力を借りなくても大丈夫だけどね。ま、戦力は少ないよりは多い方が良いでしょう。

しかし……なるほど。ギルドの支配人兼宿屋の主人が武術大会の運営責任者か。宿帳のつもりで申込書が置いてあったとしても自然だし、ヴィオラさんが間違えて書いたとしても自然だなと。

……そうか？　などと自分に突っ込んででも仕方ないし。とは言え、どうしようか。

棄権するのは簡単だけど、なんか面白くないし。そうは言っても戦うのはねえ……

何故ってアタシの得意なのは黒魔術。しかも無差別攻撃呪文である陣形態とか帯形態とか。術の対象範囲が広すぎてこんな狭い闘技場じゃ見物人達にも被害が及んでしまふ。勝ったはいいいけど治療費とかで大赤字になりそうだ。

さて、どうしようかな。

……などと悩んでいると、支配人が闘技場に登って演説を始めた。「さて、お集まりの紳士と淑女の皆様……」

お決まりの演説は基本的に右から左へと聞き流して、周りを見るまあ……血が見たそうな顔やら勝ち負けの札を賭けた相手の勝利だけを願っている顔やら……紳士と淑女の集まりにはとても見えないな。

「では第一闘技場」 対するは怪力の尼僧」 ヴィオラ」 相対するは」

フルネームで言わないのは当然として、怪力ねえ……多分、当たっているだろうけど。

「第二闘技場」 対するは疾風のソフィア」 相対するは」
疾風ねえ。

確かに風のように空を飛んだりするけど。そんな事は知らないだろうから適当に付けたんだろうね。

「第三闘技場」

呼ばれて登場したのは昨日、盾の人に一発殴られて倒されていた
厳つい千斤斧の人と似たような厳つい大男。背に5、6本もの長大
剣を背負っているのは……なんか笑える。んで……

「審判は、双鋼玉眼のエアリエス」

ん、エアリエスさんが審判ね。

巻き込まれても大丈夫だな。……多分。腰にちゃんと帯刀してい
るし……

さて……アタシがいる東の方の闘技場の番だな。

「第四闘技場、対するは……」　ちらつとアタシを見て……何と
いうかを悩んでいる……

「……今大会一のダークホース。ミステリアス・アリア」

……言うちに事欠いてそれかい。

ま、いいさ。確かにダークホースだろう。参加最年少は間違いな
さそうだし。覚悟を決めて闘技場に登りますかね。

「相対するは、鉄壁の防御、無剣のギザキ」

んん？

相手は昨日、厳つい千斤斧の人を一発で殴り倒した……あの4つ
の盾の人だ。無剣ということは……つまりは相手を殴り倒すという
訳ね。

ん、だったら戦い方も無難に済ませそうだな。

「さて、ルールは皆様、御承知でしょうか。さっさと始めま
す」

急に品格が無くなったぞ。支配人のアナウンス。……いや？　元
から無かったか。

「では……」　支配人の右手が高々と上げられて……

「ちょい待ちっ！」

止めたのは……他ならぬアタシの大声。ちょっとだけ思い付いた
のさ。

11・ちょっと待て（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

12・勝ちと負け 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

12・勝ちと負け 1

12・勝ちと負け

「な、何なんだ？」

吃驚した顔からしかめっ面になった支配人に向かってびしっと人差し指を指してアタシは確認した。

「一つ確認したいんだけど……」

「だから何をだ？」

そんなに先を急ぎなさんな。ちよつとだけ周りを見渡してみると全部の闘技場で試合が始まらずに止まっている。ん。それで良し。

「さつさと言ってくれないか？ 次の試合も控えているんだから」

「確認したいのはアタシが魔法を使って周りに被害がおよんだ時、弁償するのはアタシ？ それともソッチ？」

取り敢えず、外堀を埋めておかないとね。心おきなく戦えないし。「そんなことなら大丈夫だ。この闘技場の側面の呪紋は中から外へ、更には外から中への魔法効果を防ぐようにできている。序でに言うとかだ。審判役が闘技場から降りない限り、戦う人間以外は誰も闘技場にかかることができないという効果もある。勿論、君の連れの幽霊もだ。……どういう理屈かは私も知らんから説明できんがね」

「そんな責任逃れみたいなこと言つて。魔法効果がどうなるか判らないじゃないの？」

「絶対に外に効果が及ぶことはない。重ねて言うが、絶対にだっ！」

「んじゃ、効果が及んだ時はソッチで責任とって貰えるって事で良いのね？」

むつとした顔になってやや感情が高ぶっているのを抑えたような声で支配人は応えた。

「ああ。それで構わん。で、それだけか？」

「勝敗の決着方法をもう一回教えて」

やれやれと言った顔で支配人は説明してくれた。意外といい人か

も。

「勝敗は相手が戦闘不能となるか、降参するまで。闘技場の外に出た場合も降参若しくは戦闘放棄と見なされて負けとなる。魔術も使い放題。ただし、障壁の術だけは使用禁止。勝負が付かなくなるかな。コレで良いか？」

なるほど。闘技場が上がってから言うのも何だけどシンプルナルールだな。さて……

「も一つ確認」「何だっ？　コレで最後だぞ。さっさと言えっ！」
「アレって勝敗を掛けているんだよね？」

アタシが指さす先は札売り屋。

普段は御守りとか荷札用の木札を売っていきそうな屋台が勝敗の札を売っている。

「アア。そうだが？　それがどうした？」

「アタシも賭けて良いかな？」

支配人は「何を今更」みたいなことを言いかけたようだけど、アタシを説得するのは時間の無駄と決めつたようで顔を背けて、掌で指し示した。

「買いたければどうぞ。ただし、君の勝負に関しては相手の札は買えないぞ」

「そんなモノ買わないわよ。ありがとね。ゴメンね。ちょっとだけ待ってて」

アタシは盾の人に断ってから札売り屋の方へと駆け寄った。

「お嬢ちゃん。どの札を買うんだい？」

人が良さげだけど一癖在りそうなおっちゃんに普段より一層、無邪気な笑顔を装って尋ねた。

「アタシが勝つのかって何倍になっているの？」

「悪いが誰もお嬢ちゃんの勝利に掛けていない。つまりは……一枚買ったなら百倍は保証する」

ふうん。節穴の掛け屋さんだな。

「んで、アッチとソッチは？」

何気なく聞いたという感じでソフィアとヴィオラさんのを聞いてみる。

「第一闘技場は尼僧の勝ちが5倍、相手の勝ちが場合によっては3倍、第二闘技場の尼僧は10倍、相手は場合によっては5倍だ」

間違いない。限りなく見る目がない。「場合によっては」という言葉の意味は……あまり平穩無事なことを前提としていないだろうから深追いはしない。

兎に角、見る目がないのは……ま、都合が良い。

「んじゃ、アタシの勝ちに一番大きい札を2枚、第一闘技場の尼僧の札を10枚、第二闘技場の尼僧の札を……20枚。宜しくっ」

「ぎやははは。お嬢ちゃん、そんなに掛けて大丈夫か？ 全部で金貨3枚と銀貨8枚だが特別だ。金貨3枚に負けとくよ」

全て負け札だと判断しているのだろう。大甘だ。

「ありがとね。じゃ札を頂戴」

ソフィアから「相手が強そうだったら棄権してね」と預かっていた金貨10枚の中から3枚を出し、換わりに札を受け取って闘技場の下に置いておいた袋鞆の中に……いや？

「あ、そうそう。道具は使っても良いんだよね？ この鞆の中のは？」

袋鞆を持って闘技場が上がって確認する。

「アア。構わん。道具を使わんことにすると剣もダメとなってしまうからな。で？ もう良いのか？」

「ありがと。もう良いわよ」

と言いながらも、アタシは袋の中の人形達と小声で確認していた。

『……オッケー。やれるで』「頼んだわよ」

さて……と。袋鞆を軽々と片手で担いで右手に年を集中させてと

……

「ではっ！ 始めっ！」

開始の合図と共にアタシは気合いと共に術を放った。

「土粉陣っ！」 闘技場一杯に土煙が巻き上がる。ま、目眩ましだ

ね。陣形態の中では一番地味な効果しかでないヤツだ。けれども、仕上げを御覧じろってね。

土煙でアタシも相手は見えないけど……闘技場の端々で呪紋が効力を発揮しているらしく青白い光と共に土煙を中へと弾いている。ふん。大した呪紋だね。お陰で闘技場の形が判って自分の位置も判る。

「大した法術使いのようだが……目眩ましかけだけでは勝てないぞ」

盾の人の声だ。まあ、お陰で相手の位置が……うわおっ！

盾の人はアタシの帽子を見つけていたらしく、襟首を片手で掴んで摘み上げた。

「さて、手荒なことはしたくないんでね。退場願うよ」

と、闘技場の端に立って外へと腕を伸ばし……

「掛かったわね。砂飛礫っ！」

ソフィアから『巨人の足蹴り並み』と評価を賜った無駄に威力のある砂飛礫が盾の人の背中当たって、摘み上げていたアタシの帽子と上着諸共、闘技場の外へと転げ落ちた。

……序でに、闘技場の土煙と見物客をも砂だらけにして吹き飛ばしてしまっただけ。

なんかいつもより威力があるぞ？ ま、闘技で気負っていた所為かもね。

「え？ ええっ！？」

盾の人は起き上がりながら……闘技場の上にいるアタシを見て、自分が摘み上げていた上着と袋鞆を見て事情が判ったようだ。吹き飛ばされた見物人共々目を丸くしていたのはちよっただけ笑えただ。

「やられた。力持ちなんだな？ お嬢ちゃん」

アタシが片手で持ち上げたのを見て袋鞆が軽いと思ったのが罠の始まり。ま、実際、その時は軽かったけどね。土の精霊のミダルであるノーラに頼んで、袋鞆ごと重くして貰ったのさ。土煙の中で帽子と上着を括り付けたときにね。

中着姿のままアタシは支配人に確認した。

「で、アタシの勝ちって事で良いんだよね？」

まだ呆気にとられている支配人はやっと気づいたかのように見開いていた目を……もう二度三度とぱちぱちしてから普通の顔に戻って宣言した。

「第四闘技場　勝者　ミステリアス・アリア」

をい。その称号は止めなさい。ま、いいか。勝ったし。

12・勝ちと負け 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

1 2・勝ちと負け 2 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

12・勝ちと敗け 2

「アリアっ！ 早く上着を着てっ！ はしたないわよっ」 と、お節介者げな声を掛けるのはソフィアに決まっている。別に見られても構わないデザインなんだけどな。ま、仰せの通りに闘技場に上がって袋袍とかを届けてくれた盾の人から上着を受け取って、着ながらソフィアを見ると……

案の定、軽く相手をあしらっている。というか片手の指先で杖を回して相手の攻撃を総て防いでいる。その相手はと改めて見れば両手でなければ持てないような長くて重そう長剣を一生懸命振るっているんだけど……凄すぎないか？ 相手の両手の力がソフィアの片手の指先なんだよ？

もう片手が何していたかと言えば……アタシに声を掛けたときは口の横、そして今は胸を撫で下ろすのに使っている。

あの……ソフィア？ アナタは今、戦闘中なんですか？

呆れるほどに余裕有り過ぎ。あんなんじゃないや竜でも避けて隠れるんじゃないか？ 次は「ドラゴンバスター・ソフィアああああ」と支配人が言いそうだぞ。

「ソフィ姉え。さっさと片付けようよ」

アタシの声にソフィアは「きよとのん」とした顔になって、相手を思い出したように見て、

「そうだった。戦闘中だった」みたいな感じでちろりっ舌を出す。余裕有り過ぎて嫌みだぞ。それ。

と、「ぎゃいん」と金属音が響いて、どした？ と見ると相手がソフィアの杖を空へと弾き飛ばしてた。

「余裕見せ過ぎなんだよ。アンタはっ！ コレでオレの……」
勝利を確信したらしくニヤツと笑ってからソフィアに斬りかかってきた。

「……負けですね」

落ち着いた声でソフィアがしれつと言ったのと同時に相手が場外へと吹き飛んでいた。誰もが単にソフィアが突き飛ばしたと見ているんだろうな。でも実は違う。杖が飛ばされると同時に指先に作られた宝珠が効果を発揮しただけだね。多分、作ったのは風の飛礫。ガスト・ウィンとかいう法術で相手は南の通りの先まで飛ばされて……数回転がってやつと止まって……のびている。

相手が、地面で失神して大の字に伸びた時と同時に落ちてきた杖を受け止めて、またもや指先でくるくると回してから、闘技場をとんと叩いて、審判に尋ねた。

「私の勝ちということで宜しいでしょうか？」

確認するまでもなく勝ちなんだけど、審判以下、全員が呆気にとられて勝敗のことを忘れていた。……そんな感じた。そりゃそうだろう。結局、最初から最後までソフィアは片手しか……正確には片手の指先しか使っていなかったんだから。

「勝者っ！ 疾風のソフィアっああっ！」

んゝ。取り敢えず勝ったから良いか。称号も……結果としては合っているかな。

「……凄い」

アタシの横で盾の人が呟いた。やつと判ったの？ って、ソフィアを見たのは初めてか。この人は。

「土飛礫であれだけ威力があるのは初めて見た」

違うわよ。アタシが使ったのは砂飛礫。って、視線の先はアタシを見ていなくてソフィアを見ている。土飛礫？ さっきソフィアが使った術のこと？ 風系の術じゃなくて土系の術だったのか……と
いうか、術を使ったのが判るなんて……ふうん。やっぱり、かなり
の実力者なんだね。

「流石ね。ちゃんと見ているなんて」と、誉めておこう。

「これでも戦場暮らしは長かったんでね」

さわやかに笑う。んゝ。ヴィオラさんの婿に推薦しておこうか？
なんて思ったけど止めておこう。何故かと言えば……

「ギザキッ！ 何で負けるのよっ！」

盾の人の連れらしい人……巫女姿の少女が後ろで怒鳴っている。どう見ても恋人みたいな感じだ。ヴィオラさんは「面倒なのは遠慮する」っていつていたからなあ。

そうだ。ヴィオラさんは？ と、見てみれば……楽しんでいた。いや、戦闘なんだから楽しんでいるというのは不謹慎かなとも思うんだけど……やっぱり楽しんでいる。

相手はちよいと短めの剣を両手に持って殴るというか切っ先で息も継がずに突いているんだけど……ヴィオラさんが総て手で受け止めている。

手で剣を？ 剣が持てない白魔導師なのに？ って、その前に素手で切っ先を？

信じられないけど何回見直しても掌で鋭い剣の切っ先を受け止めている。

「ほう……指先で切っ先を受け止めるとは……」

指先？ んん。んむ？ 確かによおしく見れば、長い指……親指と人差し指でとか、中指と薬指の間とか、果てには親指と小指でとか……兎に角、指先で挟んで切っ先を受け止めている。で、相手はそのまま奪い取れるのを防ぐために、素早く引いて突き直す。……という状況なんだな。

「文字どおりの百戦錬磨だな。実戦で修練していなければ彼程の余裕は出てくるまい」

盾の人は感心しきり。でもヴィオラさんは寺院で修行していたんだろ？ さら、そんなに実戦自体はないだろう……て、ことは寺院の修行自体が実戦なみの内容を実践していたんだろ？ ……心底、入りたくない寺院だ。

で、呆れつつ感心しつつ戦いを眺めていると……相手の息が切れてきた。まあ、あれだけの手数を繰り返してたら、納得だな。「ん」。これしきで息が上がっていたんじゃないダメだね。アンタは失格」

「何が失格だっ！ そっちは防御だけで攻撃してねえだろうがっ！
悔しかったらこ……」

「攻撃して来いっ！」って続けて言いたかったんだろうけど、次の言葉は聞こえない。何故かというところ……ヴィオラさんの前蹴り一閃で西通りの先へと転げて消えていった。……消滅した訳じゃなくて転げて巻き上げた土煙で見えなくなったただけだけど。

「速くもないし、持続力もない。なにより根本的に強くないんじゃないワタシの婿には到底なれないね。ま、『防御は最良の攻撃』って言葉も知らないようじゃ学も無さそうだし。どっかの寺院で修行して出直しな」

……あの。もし？

コレはヴィオラさんの婿選び大会じゃなくて武術大会なんですけど。

ま、順当に勝っているから良いか。と、溜息混じりに安心したアタシに誰かの声と……ソフィアとヴィオラさんの声が飛んできた。
「伏せろっ！」 「アリアっ！ 危ないっ！」 「避けてっ！」

ん？ と、事態が飲み込めていないアタシが何気に横を見ると……
長大剣が唸りを上げて飛んでくるっ！

12・勝ちと負け 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

1 2・勝ちと負け 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

12・勝ちと負け 3

ん？ と、事態が飲み込めていないアタシが何気に横を見ると……長大剣が唸りを上げて飛んでくるっ！

直後に……がいんと鈍い音と共に剣は弾かれ、アタシがいた闘技場に転げていた。それは……

「……ありがとう」

盾の人が無言のままに弾いてくれたからだ。盾の人……ギザキさんだっけ？ ……は、にこつと笑い返して「気にするな。戦友」みたいな感じで親指を立てている。

助けて貰って言うのも何だけど……さわやかすぎて嫌味なんですけど。

「貴様らっ！ 正気かつ？」

エアリエスさんの鋭い声が響く。何事が起きているのかと改めて見れば……戦っている二人は明らかに変だ。

視線が虚ろだし、戦う相手が何処にいるのかもはっきり認識していないような……

「ひよつとして……狂っている？」

「ああ、明らかに中毒症状だ」

ギザキさんの話によるとだ……戦いの時に恐怖心を払うため薬物に頼る輩は多いそう。で、そういうのは本質的に心が弱い……単純に意志が弱いので中毒になりやすい。そして中毒になると薬を摂らなくても同じ状況……つまりはこういう武術大会とかでも中毒の発作状態となるらしい。

「実際に戦う前に少量服用したのが発作の引鉄かも知れない。いずれにしても二人とも失格だろう。が……押え止めるのは面倒だ」

そりゃそうだよ。二人とも屈強な熊のような体格。持っているのは重長な武器。二人を押え止めるのは……

大会運営側は何をしているのと見れば……支配人以下、全員が冷淡に眺めている。観客はと見れば……なんか薄気味悪い笑いを浮かべながら見ている。

「え……？」

気味悪がつているアタシにギザキさんが視線を第三闘技場に向けたまま応えてくれた。

「気にするな。闘技を見る客なんてそんなモノだ」

……やっぱり、この人はいろんな戦いとかを経験していたんだろ
うな。目眩しそうなぐらいの頼もしさだ。

しかし、誰も手助けがないと……審判のエアリエスさんだけで対処できるんだろうか……

……と心配していたら、狂ったまま戦っている二人の様子が変わ
り始めた。

「……ん？ 女？」 「ああ……女の匂いがする」

狂ったままの視線を有りもしない方向へとぐるぐる回し投げて……

……二人ともエアリエスさんを同時に睨み付けた。

「女だ」 「ああ、女だ」 「兄弟、ここは一つ……」 「……あ

あ停戦して」

狂っている。狂ったままの二人がエアリエスさんに向かって来た
っ！

「エアリエスさんっ！ 逃げてっ！」

溜らずアタシが悲鳴に近い声を上げてしまった。けど……

エアリエスさんは……向かってくる二人を気にもせずにアタシを
ちよっただけ振り返って……にこっと笑った。

「前を見てっ！ って……あれ？」

次の瞬間、鈍い金属音が響くと同時に二人の動きは止まっている。
何故かというと、素早く抜いた2本の剣で千斤斧と長大剣を受け止
めたからだ。思いつきり両手で振り下ろされていたのに……

「凄っ……」

熊みたいな輩が両手で振り下ろした武器の勢いを片手で持つギザ

ギザの剣で受けたんだよ。しかも同時にふたつ。

「彼女も戦い慣れしているな。ソードブレイカーの使い方を知っている」

「そーどぶれーかー？ エアリエスさんが振るっているギザギザの幅広い剣のこと？」

「剣の根本の突起で相手の武器の先を……しかも受ける瞬間に引き流して受け止めた。弾かれないように力を入れながらね。彼程の使い手はそうはいない」

と解説を聞いている間に狂った二人は両手で武器を持つのを止め、片手で武器越しにエアリエスさんを押さえつけながら、それぞれ空いた片手でもう一つの武器、千斤斧と長大剣を持ち、一気に振り下ろした。

刹那っ！

エアリエスさんはソードブレイカーで受けていた武器を弾き飛ばすと、振り下ろされた武器を……くるりと体を躲しながら受け……熊のような二人の腕はお互いに巻き付けられて……鈍い音が闘技場に響いた。

「ぎゃああああああ」 濁った悲鳴を喚き散らすのはは熊のような輩達。

「折れた？」思わず呟くアタシ。

「ああ。肱の前後、つまりは腕と上腕が両方折れたな。大したモノだ」

二人は腕を絡ませ合ったまま闘技場の石床に転がったまま呻いている。と、エアリエスさんは素早く二人の背後に回って剣の面で首の付け根を打ちつけて気絶させた。

「双方、闘技不適格にて、失格っ！」

ざわめく会場を余所にエアリエスさんは「心配してくれてありがとう」とみたいな顔でアタシを見てから、さっさと闘技場を降りていった。

「なるほど。ああいう使い方もあるのか」

って、何を感じているんだろ？ ギザキさんは。

「何のこと？」取り敢えず、聞いて欲しそうだから尋ねてみる。

「彼女が使っていた両刃の剣だと峰打ちができないとばかり思っていたのだけだね。なるほど。面で打てば同じ効果が期待できるな。」

うむ。百戦錬磨……いや、億千錬磨の使い手かも知れんなあ。」

感心しきり。しかし、なんでこの人がアタシの横に居続けるのだろうか……って、理由は一つしかない。

「ギザキっ！ 何してんのっ！ さっさと闘技場から降りて、私に説明しなさいっ！ 負けた理由をっ！」

連れの巫女の人にどうやって説明しようかと悩む時間が欲しかっただけだな。

ギザキさんは審判役の支配人と共に闘技場を降りていき、アタシは……ふと……誰かの視線を感じて……きよるきよると見渡した。

で、見つけたのは、人形遣いの 그레이さん。第四闘技場と第三闘技場の間の隙間に潜んでいた。

「何してんの？」と視線で問うアタシに 그레이さんは「いや、何も。ははは。では、失礼しますよ」と小さな声で返してそそくさと退散したのは……

「アリア。大丈夫？ 怪我しなかった？」とソフィアとヴィオラさんが駆けつけてきた所為だな。

「大丈夫だよ」と応えながら……さっきの「伏せろっ！」て声はギザキさんの声じゃなかったことをぼんやりと判別していた。ということ…… 그레이さんだったのかな？

1 2・勝ちと負け 3 (後書き)

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

13・それぞれの名 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

13・それぞれの名 1

13・それぞれの名

「しっかし大儲けだね。感心したよ」

ヴィオラさんに誉められてアタシもニコニコしている。結局、払い戻しは金貨で45枚。でも、札屋のおっちゃんが涙目だったので40枚に負けておいたんで、差し引き37枚の儲け。で、アタシとソフィアは即座に以後の試合を棄権。勝利者賞としての各々5枚ほど受け取れたから、全体としては32枚が手持ちにプラスとして残った。それを全部、これまでの宿賃とかで借りていたのがあるからソフィアに返そうとしたんだけど、ソフィアは受け取らなかった。でも、あんまり持つていても危険なので……実際、今日の試合で負けたのがまだそこらにウロウロしているし……5枚ほどアタシの手持ちとして残し、後はソフィアが預かるということで一挙落着。序でに今夜はみんなで大盤振る舞いの夕食会……と。

でも、何故か菜食主義者っぽい食事が出てきたので、追加で跳兎の姿焼きとか三つ角鹿の腿肉のローストとかを頼んで、みんなですついている。実際、ソフィアも菜食宣誓してないそうだし、ヴィオラさんは基本的に元が大猫娘だから肉が好物、ネメシアさんは幽霊だからソフィアの霊精を美味しそうに飲んでいるだけだけど、エリエスさんと 그레이さんは僧籍とは関係ないから菜食とは関係ないし、アタシだってローストした一角牛のシヨルダー・ロインなんかが大好物……なんだけど、滅多にないし、高値だからあまり付けない。実際、この宿にもなかったし……って、なんの話だ？

兎に角、みんなでわいわいがやがやと晩餐会。

그레이さんはソフィアに睨まれるせいか遠慮したがっていたけど……今も端っこで小さくなっているんだけど……まあ、実際、今もちらちらとソフィアはジト目で睨んだりしているけど……剣が飛んできたときに 그레이さんが最初に注意してくれたと言うことでソ

ファイアも同意してくれたんで同席している。本当に 그레이さんだっ
たかどうかは…… アタシも自信ないけどね。

エアリエスさんが時折、「何でアンタがアタシの剣を後生大事と
言わんばかりに持っているのさ？」とネメシアさんをジト目で睨み、
ネメシアさんはネメシアさんで「何よ。これはアタシが持っている
のが一番なのよっ！」って感じでニコ目で睨み返していたりするけ
ど……ま、概ね平穩無事な雰囲気だ。

なんにせよ、こんなに大勢で食事するのって楽しいね。

「楽しそうだな」

不意に後ろで声がしたんで振り返ると……盾4つの人、ギザキサ
ンが立っていた。その後ろに連れらしき巫女姿の少女。

「同席しても構わんかな？」

どうぞどうぞとアタシの横の席が空いていたんで薦めたら、ソコ
に座ったのは巫女姿の少女。なんかアタシを軽く睨んでるし。ま、
それは勝負にアタシが勝った所為だろう。気にせずにおいて、ギザ
キさんはその隣、 그레이さんの横に座った。

「ん。誰かと思ったら……」

ん？ ギザキさんと 그레이さんは知合い？

「え〜と。何方でしたっけ？」と思い出せない 그레이さん。そか、
死んでから生き返った時に記憶はそれなりに無くしていたんだっけ。
今でもエアリエスさんとの記憶も全部を思い出してはいないそうだ
し……

「ほら。あのマゼル公国での戦乱……あ、いや、そうか」

ギザキさんは……なんか深読みした感じで追求するのを止めてい
る。何があったのかは知らないけど、その遠慮は勘違いだな。間違
いなく。

「で、紹介して貰える？」と、ギザキさんにアタシの隣の少女のこ
とを目で合図する。ギザキさんは一瞬、戸惑っていたけど「あつ。

そうか」という感じで得心し、紹介しようかと声を出しかけたとき
に少女が突然、割って入った。

「私はノイエ。ノイエ……え〜と。ノイエ・ワネル。こちらのギザキ……ギザキ・ワルトの……」

戸惑ったのは……多分、フルネームで言いかけたのを押し止めたから。どうやら旅慣れしていなさそうだな。

旅初心者のノイエさんはちらつとアタシとギザキを流し見てから言い切った。

「ギザキの婚約者よ」

ふ〜ん。やっぱりねって感じなんだけど、ソフィアとヴィオラさんとネメシアさんは少なからず驚いたようで……って、なんで驚いているの？ 婚約者ってそんなに珍しかったかな。

「貴女の御名前は？ もう一度、言って貰えます」

ソフィアが吃驚眼のままで聞き返しているし。

「ノイエ……ワネルですけど？ 何か？」

ノイエさん……同じ歳ぐらいだから「さん」付けは要らないかも知れないのだが、念のため付けておこう……は、さっきまでの警戒1割、怒り2割、さっさと帰りたい7割という雰囲気から、戸惑い3割、強がり2割、やっぱり帰りたい5割ぐらいの雰囲気になって、ちよつと引きながら応えていた。

「ひよつとして……ノエア・ノト・ワネルさんの妹さん？」

その名前は誰？ って、え〜と。つまり……多分、ソフィアとヴィオラさんとネメシアさんの雰囲気からして、その今出てきた名前のノエアさんって……聖アイルコンティ又寺院関係者だな。

なんか世間って狭いな〜

13・それぞれの名 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

13・それぞれの名 2 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

13・それぞれの名 2

いや、誰も見たことのないという聖アイルコンティ又寺院関係者がこんなにいるとは思わなかったぞ。本当に。

「そう……ですけど、姉を知っているんですか？」

「同じ寺院で修行していたのよ。そっかぁー ノエアの妹さんねー」
「目元というか目鼻立ちは似ているねー」

やっぱりね。ソフィアとヴィオラさんとネメシアさんはわいきやわ騒いで手が付けられない感じに喜んでいる。アタシとエアリエスさんはちよいについて行けなくて、笑顔のままで困っているしかできなかつたけど。

「で、お姉さんは？ 元気？」

「姉は無事に嫁ぎました。ギザキの尽力で……城が壊れてしまいましたが……」

えーと。『無事に』？ 『城が壊れた』？ なんか話が複雑っぽい表現だなとちょっとだけアタシが悩み出したときにヴィオラさんがソフィアに目配せしてから話を繋げた。

「そうかい。んじゃワタシも早く婿を見つけて……」 「え？ 婿探しですか？」

ノイエさんも再び始まったわいきやわの輪に入って騒ぎ始めた。女3人で姦しいとは言いつけど、確かにそうだね。って、アタシも女だけだ。

アタシとか、エアリエスさんみたいにお淑やかなものもいるんだからね。

……凄腕の剣士と無差別攻撃黒魔法使いの何処がお淑やかなんだろうって思わなかったよね？ ソコ。思わなかったら即座にかつ速やかに、若しくは迅速かつ瞬時に思いなさい。それが世間を巧く渡るコツなんだからね。……同じ表現を何故に繋げる？ そういう細かいことは気にしないように。

「え〜と。なんか用があるんじゃないかなかったの？」

わいきゃわの騒ぎは放っておいて、ギザキさんに確認する。わざわざ来た以上は用があるはずだ。

「用って言うほどじゃないんだが、一応、礼を言っておこうと思っ
てね」

ん？ 何のことだ？ 負けたのが良かったってコト？

「君達が棄権してくれた御陰で、敗者復活戦が明日、行われること
になった。これで払った参加費も回収できそうだ」

なるほど。そういうコトね。

「問題は……復活戦が一对一じゃなくて乱闘って事よ」

ノイエさんがわいきゃわの話を止めてこっちの話に割ってきた。

ま、心配なんだろうね。

「大丈夫。アタシに負けたって恥じゃないわよ。アタシが強すぎる
だけなんだから」

ちよつと威張ってみる。ま、ソフィアとかヴィオラさんとかエア
リエスさんとかに比べたら……アタシが最弱だけどね。

「まぐれで勝ったからっていい気にならないでよ。ギザキの方が強
いことは間違いないんだから」

およ？ 随分と強気だな。まさか魔獣とかと戦って勝ったなんて
言い出さないだろうな。

「まあまあ。それで礼を言っておこうと。ついでにここに宿を変え
たから……」

んむ？ ギルド直営の宿なんて値が高い方なんだけどな。でも警
備とかが良いからソフィアとアタシは専ら利用しているけど……

そんなに資金があるのなら参加費なんか……って金貨10枚の方
が重要か。でも、なんで？

「それまた何故に？」

「なんか幽霊とか人形遣いとかの騒ぎで……他の宿が満杯なのさ。
オレ達が泊っていた宿も満杯になってね」

満杯になっても先に泊っていたのなら問題ないだろうに。

「まさか……追い出された？」

「安値で泊っていた先客は違約金を払って追い出しても良いぐらいに高騰した。ってことさ。闘技参加者は優先権があったのだが、負けたので失効した。……そんなところさ」

それでこの宿に……？ あ、幽霊と人形遣いとかでこの宿はキャンセル続きという訳か……

「まあ……幽霊は君との試合の時に見て、問題ないと判ったし。人形遣いが誰か判らないので不安ではあったが……昔の知合いなので個人的には問題ない」

ふうん。ギザキさんほどの陰が無さそうな人が信頼できるほどなのか。グレイさんを見直したぞ。……少しだけ。どれぐらいかという髪の毛の幅ぐらいだけ。

「グレイとは戦場で何回も？」

何故か嬉しそうなエアリエスさんが尋ねてきた。ん？ 命の恩人が誇らしいというのも納得……できるようなできないような疑問を禁じ得ないような……

「ん。何回もというほどではないが、少なくとも信用できる。人形遣いだが、間違ったことはしない事だけは確かだ。このオレが保証する」

人形遣いになったこと自体が人として間違いなのでは？ という疑問が激しく湧いてくるのだが。何にしても人形遣いを保証する人なんて初めて見たぞ。大丈夫か？ この人。

まあ、アタシがこれほどの疑問を持つのもこの町に来るまでアタシも人形遣いを見たこともなかったんで想像がふくらみすぎているからかもしれないけど。

ふと見れば……言われたエアリエスさんが異常なまでに嬉しそうな事の方も激しく疑問が湧いてくる。他のことには気づかれないように平静を装っていたけど……瞳の輝きが違うからバレバレだよ。でも、隣のヴィオラさんとかソフィアも気づいていないようだけど。まあ、斜め正面にいたアタシだけが気づいたことなのかもね。

んで、改めてソフィアはと見れば「何言ってるの。この人？ 大丈夫？」みたいな軽めのジト目でギザキさんを睨んでいる。 그레이さんを睨む時ほどではないんだけどね。

で、睨んでいるのに気づいたノイエさんがソフィアを不信の目で睨み返している。

13・それぞれの名 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

13・それぞれの名 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

13．それぞれの名 3

水面下で場が白けつつあるのを感じてアタシが声を出した。

「あ、ごめんなさい。アタシ達のことを紹介していなかったね。アタシは知っているだろうけどアリア・ファルド。本業は遺跡探検家。向こうの杖の隣にいるのがアタシと一緒に旅をしているソフィア・フレイア。見て判るとおり白魔導師。ソフィアの隣が同じく白魔導師のヴィオラさん。数日前から一緒に旅している。アタシの隣の幽霊がネメシアさん。……もう判っているんだろけど、ソフィアとヴィオラさんとアナタの姉様と同じ寺院の出身の縁。で、ヴィオラさんの隣が……ネメシアさんの知合いでエアリエスさん。剣術家ね。で、エアリエスさんの隣が……ギザキさんの知合いでもある人形遣いの 그레이さん」

ふう。なんか疲れるぞ。この説明は。幽霊とか人形遣いを説明するなんて……

「ちよつと確認したいんだけど……」 ノイエさんが返してきた。

「私達がフル……え」と。セカンドネームまで申し述べましたのに、ファーストネームだけの紹介とは……失礼じゃありません？」

あ……指摘は確かだけど……一気に場が白けてしまった。表面化してしまったというのが正確だろうけど。

溜らずヴィオラさんが白けた雰囲気割って入る。

「アリアとソフィアは名乗っているから良いね？ ワタシはヴィオラ・ノラネ。そっちの幽霊はネメシア・ノラゼ。ワタシとネメシアは遠い親戚なのさ。で……」

ヴィオラさんが隣のエアリエスさんに視線を投げる。そういえば、エアリエスさんの名前は通り名しか知らないな。 그레이さんは……まあ、どうでもいいや。

「アタシは……」 エアリエスさんは……なんか悲しげな苦しげな表情だ。

「ごめん。通り名しかないんだ。グレイ、アンタは？」

「え」と。人形遣いになるときに捨てたので……今は『グレイ』という名しか有りませんね」

ははは……と、力なく笑いながらグレイさんは頭をかく。まあ、笑うしかないよね。そんな事情じゃ。

ノイエさんが『むっ』と不機嫌になるのを無視してエアリエさんがソフィアの方を見て……尋ねた。

「そういえば……以前、コイツに私の名には『否定』と『過去』というスペルが入っているって言われたんだけど……そいつを除いたら何が残るんだい？」

尋ねられたソフィアは……きよとのんとした顔になってから、目を閉じて空中にエアリエさんの名のスペルを描いて……何故かその間、グレイさんがなんか慌てていたけどなんで？ まあいいや。そんなこんなでソフィアは目を開けてからにつこりと笑った。

「残るのは女神の名前ですね」

どんな名前？ と、注目しているのはアタシ以下、寺院『無』関係者だけ。寺院関係者のヴィオラさんとネメシアさんは既に判っていたように微笑んでいる。

「何が残っているんだい？ 焦らさないで教えてくれないか」

エアリエさんはなんか安心したようにソフィアの答を待っている。

なんか……従姉妹というか姉妹みたいな感じだな。ま、姉妹じゃないのは分かり切っているんだけど。

この世界、長女は「ア」で終わる名前。次女は「エ」、以下、「イ」、「ウ」、「オ」かそれぞれに類する言葉で終わるのが基本原則。

従って、ソフィア、ヴィオラ、ネメシアそしてアタシの名であるアリアは長女の名前だとすぐに判る。同じ理由でノイエは次女、そのお姉さんのノエアは当然、長女。エアリエスって名は感覚的には四女という事になって、当然ながら、長女の名であるソフィアの姉

にはならない。って、そういえばソフィアが捜している家族って……
たしか、ソフィアが捨て子だったのを養女として迎えてくれたんだっただ。だったら……でも、エアリエスさんが長女じゃない以上は関係ないな。

ところで、残った女神の名前って何？

「残るのは『イリス』。虹の女神の名前です」

エアリエスさんはなんか嬉しそうだ。傭兵生活ではあまり良いことがなかったのかな？

グレイさんが何故かほっとしていたけど……なんで？

「でも……通り名しかないのは不便じゃありません？」

「そうか？ ……そうだね。確かに不便かも……」

ソフィアに言われてエアリエスさんはちよつと考えてから……ソフィアに頼んだ。

「そうだ。アンタは白魔導師になったんだから、アタシに名前を付けてくれないか？ 厚かましいようで申し訳ないけど……こうして出逢ったという縁で頼まれてくれないか？」

なんか変な言葉の言い回しをしなかった？ とアタシは思ったけど、頼まれたソフィアは、もの凄く「きよとのよん」というような顔になってから……悩み始めた。

「あ……いや。迷惑だったら良いんだよ……」

「あ……いえ。突然だったので吃驚して……」

なんかの詩を朗読しているというか歌劇みたいな台詞の遣り取りだなと思っただのはアタシだけではなかったようで、ヴィオラさん以下、全員がエアリエスさんとソフィアに注目している。

「ちよつと考えさせてください。……フル・ネームをここで言うのも何ですから」

確かにそりゃそうだとアタシ以下全員が笑い出した。

ノイエさんだけあまり笑ってなかったけど。まあ、自分の指摘が他の事へ流れて胡散霧消したのがちよつと面白くなかったんだろうな。

13・それぞれの名 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

14・夜の旅 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

14・夜の旅 1

14・夜の旅

その夜。

寝る前のソフィアの様子がちよつと変だったので……アタシは構えながら寝たふりをしていた。

案の定、夜更け過ぎ……二つ月が満月となって天頂に懸りかけ、窓からの月明かりが入らなくなった頃。ソフィアが起きて……アタシとヴィオラさんを起こさないようにベッドを抜けて……杖を持ち部屋の外へと出て行った。

今までも出逢ってからこの町に来る旅の途中でソフィアは時々、夜中に起き出して何処かに行っている。朝までには戻ってくるんだけど……何処で何をしているのが判らなくて……不安なんだ。うん。多分、不安なだけなんだ。

アタシはそそくさとベッドを出て、着替えて袋鞆を担いでソフィアの後を追う。

通りの先……町はずれ近くに辿り着くとソフィアは小さく呪紋を唱え……手に小さな光の珠を作った。

（なんだろうね？）

袋鞆の中の人形達に話しかける。

（○ウィスプやないかな？）

（なにそれ？）

（何かを捜すときに使うヤツや。道先案内人みたいなヤツ）

（ふうん。何かを捜すの？）

（なんやろね？）

（……今は捜すモノなんて無いと思う）

「聞こえているわよ。隠れてないで出てらっしゃい」

不意にソフィアに声をかけられてアタシは物陰から出て、照れ隠しに頭を掻いた。

「……何処へ行くの？」 不安を声にして尋ねる。

「隠すつもりはなかったんだけど……」

ソフィアは杖を見つめて……目を閉じてから、呟く。

声は聞こえなかったけど……唇は『あまり見せたくはなかったの』と動いていた。

「ソフィ姉え……あのね」

アタシはちよつとだけ……怒ったような悲しいような声で……ソフィアを睨んだ。

「アタシの心配してくれるのは良いんだけど、アタシにもソフィ姉えの心配させてよね。時々、夜中にいなくなるのって……もの凄く不安なんだから。荷物があるから帰ってくるんだと判っているけど……それでも、一声ぐらいかけてくれても良いんじゃない？」

ソフィアはアタシが怒り声で言い始めたことに吃驚したみたいで……目を丸くしてじつと見ている。

「兎に角ね。勝手にどっか行かないでよ。約束したじゃないっ。一緒に旅するってっ！」

それにしても……どうしてアタシは怒っているんだろう？

ソフィアは吃驚した顔から……何かが……何か心の問えが一つ消えたような安心したような戸惑ったままの微笑みでアタシに謝ってくれた。

「ゴメンね。じゃ、一緒に行こう」

ソフィアは片手に持っていた光の珠を空中に放り投げた。

「ひゃあああああ」

思わず声を出さずにはいられなかった。ソフィアに抱きかかえられて空を飛んでいる。高い山を越えて、草原を越えて、湖を越えて飛んでいく。

アタシ達の前に飛んでいく光る珠、ウィスプを追いかけて飛んでいく。アタシが抱える袋鞆の中の人形達もなんか驚いている。

『。こんなに長く飛ぶんは初めてや』

「長く？」

『いつもは……って以前はすぐにどっかに頭をぶつけて終わってたからなあ』

「アエリイ？ あんまり昔のことを……」

『んでも、竜髭靴を貰ってからは大丈夫。んでもこないに飛ぶのは初めてやね』

「まあね……ノエアの城が壊れたって事は……一大事だからね」

「そうなの？」 ちよっとだけ振り返ってみると……いつになく真剣な表情だった。

「そう。あの城は……魔王との戦いの時に重要な場所……になるはずだから」

よくは判らないけど……ソフィアは魔王との戦いに真剣なんだなと改めて思った。

「着いたわ。あれが城……」

先を飛んでいたウィスプが……くると周りながら降りていったのは岩山に囲まれた森の中の巨岩だった。

ソフィアはその岩には降りずに、周りの岩山のちよっとだけ広い平場に降りた。

「ふうん。なんか盛大に壊れているわね」

平場から見下ろすと……二つ月の満月に照らされて。眼下の深い森に岩の固まりが壊れたままに浮かび上がっている。

「さてと……」

ソフィアは何か呪文を口の中で唱え……もう一度、光の珠を作った。

14・夜の旅 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

14・夜の旅 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

14・夜の旅 2

「ウイスプ？」

さっきの行き先案内用光の珠を思い出して、思わず口に出る。

「違うわよ」

ソフィアは微笑みながら振り返った。

「これは……警告用兼確認用の……言わばサーチ・ライト」

両手で光の珠を掴むと、何かしら念を籠めるように光の珠に呟く。そして、両手を森へと開くと……両手から飛び散る無数の光の珠。光の珠達は凄い速さで森の中へと飛び行き……森の中をアチコチへと飛び回っている。そして……奇声と共に何か……いろんな動物たちが森から逃げていくのが……遠すぎるのと月明かりでは見えなかったけど、雰囲気で判った。

やがて、光の珠は森の中心で集まり……空へと廻りながら飛び上がり、霧のように消えていった。

「ふうん。形は判ったし、動物たちも逃げたようだから……」

ソフィアは改めて両手に念を集めて……両手から光が湧き出した。そしてその光を両手で抱きしめるように集め……見る間に両手の中に巨大な光の珠を作り上げた。虹色のような紫色のような綺麗な光の珠。それを両手で縮めて……片手で持てるようになると……振り返ってアタシに忠告した。

「ちょっと後ろを向いていて。この術……時元修復の術の光はあまり……生き物とか……特に目に良くないから……」

真剣な顔から本当に危ないんだなと理解して、アタシは素直に森に背を向ける。

後ろでソフィアが光の珠を森に投げ入れると……後ろで紫色の光が爆発した。

いや、爆発したのではなく紫色の光が凄まじい勢いで飛び交っているのが背を向けていても判る。やがて……光はゆっくりと穏やか

な光へと変わり……ぼんやりと消えていった。

「もう良いの？」 「もう良いわよ」

振り返って、森を見ると……凜と立つ岩城が深い森の中に二つ月の光に照らされて聳え立っていた。

「ひゃああああ……」 感嘆しか声にならない。

漆黒の深い森に白く光る岩の城。古代から聳え立っていて誰一人として寄せ付けないような……そんな雰囲気のある岩城が復活していた。……だよね？ さっきまで無かったんだから。アタシ達がいる広場から岩城までの石橋……空中回廊のような石橋も復活して……巖かに佇んで二つ月の光を反射している。

「凄い……」

「そうよね。これだけの城があんな残骸になっていたんだから……凄まじい戦いだっただのね」

あの……ちよつと話が食い違っているんですけど。アタシが驚いたのはソフィアの術。ソフィアが感じているのは城を壊した戦いの規模。凄いのは……まあ、そうなんだろうな。これだけの城をさっきの残骸へと変える戦いは……

そしてその戦いにギザキさんがいて……無事にノエアさんを輿入れさせたのであれば……ギザキさんもかなりの凄腕……なんだろうな。ノイエさんが威張る訳だ。

しかし……これだけの術を使って何ともないんだらうか？ と、ソフィアを見ればなんかすつきりとした顔をしている。んゝむ。『法力酔いしかけている』とかヴィオラさんが言っていたから、溜っていた法力を盛大に放出してすつきりした。……というところなのかな？

「さあ、帰りま……あら。これは……」

アタシの方を振り返ったソフィアが見ているのはアタシの後ろの岩壁。何事？ と振り返って見れば……岩壁が窪んでいて廻りに刻まれた巖かな雰囲気のある呪紋様。岩城と石橋の反射光で照らされて……浮かび上がっていた。

「これって……」

「旅人の門……これだけの物が残っていたなんて……」

岩壁の窪みは十数歩も行けば行き止まりなんだけど……呪紋様が漂わせている雰囲気はこの窪み自体に意味があると……厳かに語っているようだ。

「ありがとうございます」

「ぎゃあっ！？……どなた？」

不意に、後ろから声をかけられて二人で悲鳴を上げてしまった。振り返ってみると……年老いた執事のようなおじさん……というか、おじいさんが立っていた。変なのは執事の格好なんだけど腰に細い長剣を下げていること……だけかな？ 何にしてもなんか変な雰囲気、御老人だ。

「光の杖の尼僧様でしょう？ 聖アイルコンティ又寺院に居られる

……」

老執事さんはアタシの疑惑の眼など気にもせず、静かに微笑みながら……ソフィアの方をじっと見つめている。

「は、はい。確かに寺院にはおりましたが……どちらさまでしょうか？」

「おお。コレは失礼を。私めはこのノ・トワ城の移し身、言うなれば……名はトワザとでも申しましょうか」

城の移し身？ 化身って事？ 少なくとも……人間ではないということだな。

「わざわざお越し頂き、さらには修復していただき感謝の念に堪えません。礼と言うわけではありませぬが、どうかコレを……」

手に捧げ持つのは古めかしい綺麗な宝物箱。

「いえ、そんな大層な品を受け取るわけには……聖光城となる城を修復するのは光の定めに従う者の義務。魔王との戦いに不可欠な場所なので……義務を遂行して礼を受け取るわけにはいきません。お下げくださいませ」

困り顔で、でも凜とした態度でソフィアは断った。実際、ソフィ

アは結構というか、かなり頑固だから自分で決めたことは滅多に変えない。

二度三度と老執事さんの申し出を丁寧に通って、それでも埒が明かないのでアタシが提案した。

「ソフィ姉え。中を見て確認してから……断るか受け取るかを決めても良いんじゃない？　なんか事情がありそうだし……」

14・夜の旅 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

14・夜の旅 3（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

14・夜の旅 3

ちらりと老執事さんを見る。『その申し入れ。感謝の念に堪えません』みたいな視線でアタシを見ているのは……なんかこそばゆい。『そう？ まあ、中を検めるだけであれば……』

ソフィアは箱を受け取り……蓋に手をかけると……蓋は指先が触れただけで開き……中の品を見せてくれた。

「え？ これは……？」

ソフィアが驚くのは無理はない。その箱の中に入っていたのは……
「槍とかの石突きだ……ね」

アタシも古道具屋の娘だ。こういう品は見慣れている。でも、ただの石突きではない。金と銀を溶かし合わせたような……全体としては白銀色なんだけど、表面に金で象眼が刻まれていて……その象眼も聖紋……神具とか寺院の奥の宝物殿の扉とかにありそうな聖なる紋様に見える。更には側面に三つ？ 見ようによつては、六つか七つの何かを差込むような溝があるのが不思議。でも……そんな構造の石突きなんて見たことはない。

……それにしても神々しいというか、あんまりじっと見てられない輝きだ。

「これって何か伝説の？」

アタシが尋ねると老執事さんは微笑みながら頷いた。

「確かに。この城に伝わる聖宝、光の鎖剣は……今はギザキ殿が所持しておりますが、これは光の杖を持つ尼僧が顕れたときにお渡しするように伝えられ、代々、引き継いで来た結果書簡。コレが何かは……私めにも判りませんし、伝わってはおりませぬが……この書簡箱は確かにお渡しするように伝えられたモノ。どうかお納めを……」

結果書簡？ え〜と……

「結果書簡って……エアリエスさんが持っていたあの呪紋様の箱み

「たいなモノ？」

尋ねるアタシにソフィアは微笑みながら応えてくれた。

「相手を限定した……法術効果を籠めた書簡のことよ。予め決めた相手しか開けることはできないのよ」

ふうん。世の中には便利な……いや、あんまり便利じゃないか。中が判らないんじゃない、というモノかが判らなくなるし……

ソフィアは箱の蓋を閉め、老執事に手渡した。

「残念ですが……どう使って良いのかが判りません。私がこの品の使い方が判るときまでお預かり願えませんか」

「そうですね……そういうことならば、このトワザ・ノ・トザ、一命に変えましても御護りいたします。いやあ、修復された身で言うのも何ですが、聖宝もない今、少し手持ち無沙汰でして。何か用事というか役目がないかと少しばかり心寂しいところでありました。では確かに」

なんか急に碎けたぞ。この老執事さん。

それは兎も角、まあ、無事に事が済んだな。ふう。面倒くさくなりそうだったのが、収まって良かったなとアタシはふうと息を吐いたとき……足元で何かが小さく鳴いた。

「ん？ な、何コレ？」

見れば……跳栗鼠？ 後ろ足が長くて、前足と後ろ足の間に皮膚がある栗鼠の団体が……紫色の林檎とかを持ってアタシ達を見上げている。

「おお、これはお嬢様が手懐けておられた跳栗鼠達ですな。お嬢様達と何処かでお逢いに？」

えーと。この話の流れからして……

「お嬢様って……ノイエさんのこと？」

「おお。そうですね。名を知っておられると言うことはすれ違っただけということではありますまい？ 居場所を御存知ならば、跳栗鼠たちの願いを聞き届けてはくれませぬか。序でながらこの爺の願いをも……」

既に夜明け近く。夜の闇が深い紫を経て明るい朱に変わりかけていた。

その朱の中をアタシはソフィアに抱きかかえられ、そしてアタシは袋鞆の中の人形達と……跳栗鼠達の届け物である紫林檎とか棘葡萄とかの実を山ほど入った袋鞆を抱えて……ノギの町へと急いでいた。

「ソフィ姉え……まだ？　もう腕が……」
「もう少しよ。頑張って」

心配してくれるのは……跳栗鼠たちの土産物が重い所為だ。最初は苦にならなかったけど……時間と共に石を抱えているのかと思えるほどに重く感じるようになっていた。

「着いたわよ」

「あゝもうダメえっ！」

ソフィアが町はずれにふわりと降りたと同時にアタシは袋鞆をどさつと地面に投げてしまった。あゝもつと、ゆっくりと下ろしたかったけど腕の力が保たなかった。

「……潰れてないよね」

と、ソフィアを振り返るけど……苦笑いが返ってくるだけ。投げたのはアタシなんだから仕方ない。

ま、そんなこんなでソフィアとの一夜の旅は終わった。

アタシはなんだか……安心した所為か、急に睡魔が襲ってきた。

「おはよう」

ノイエさん達の部屋をノックして……シヨボシヨボの眼で挨拶する。

「何よっ！　こんなに朝早く……げっ」

ノイエさんが引いたのは……まあ仕方ない。シヨボ眼で睡魔と格闘中の顔なんてゾンビと良い勝負だろう。

「はい。跳栗鼠達からの差し入れ。あと老執事……ノトザさんだっけ？……からの手紙。ちゃんと渡したわよ。んじゃ、おやすみ」予備の袋鞆ごと果物と手紙を渡して、アタシは背を向けた。後ろでなんかノイエさんとギザキさんが騒いでいたけど、役目は終了。さっさと部屋に戻って寝直そう。

部屋に戻ると……ソフィアが欠伸を噛み締めながらネメシアさんに霊精を振る舞っていた。

ヴィオラさんはなんだかにやにや笑ってるし……

「おはよう。ネメシアさん。ヴィオラさん。ソフィアは……寝るの？」

「ん。ちよつと疲れたから……私も昼まで……ギザキさんの復活戦が昼から始まるからそれまでには起きないとね」

「だよね。んじゃネメシアさん。ヴィオラさん。おやすみ」

なんかネメシアさんは呆れているような顔していたけど、いいでしょ。たまには、こんな事も。

アタシとソフィアはそのまま、ベッドに潜り込んで布団を被った。ん。なんか心地よい疲れ。久しぶりだな。

こんなに寝るのが心地良いのは……

14・夜の旅 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

15・その朝の夢と…… 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

15・その朝の夢と…… 1

15・その朝の夢と……

やっぱり夢を見た。

夢の中でもアタシは疲れて懈かったけど…… ネメシアさんはニコニコ笑っていた。

（なんか嬉しそうだね）

『そりゃ、そうよ。ノ・トワ城を直してきたんでしょ？』

（そだよ。ソフィアってやっぱり凄いなあ）

『当然。光の杖の継承者なんだから、それぐらい朝飯前よ。あ……ところで朝御飯はどうするの？』

（後で食べるから……でも、起きたら昼だね）

『疲れているから食べられるかもね。両方』

（んゝ 肥りそうだな）

『大丈夫。まだ育ち盛りなんだから……肥るとか気にしなくても』

（そかな？）

『そだよ。気にしない』

（……ねえネメシアさん）

『なあに？』

（なんで幽霊のままでいられるの？）

きやはははと軽やかな声で笑う。

『死んで……霊界というか冥界の入り口に行ってみたらね。みんな大騒ぎ。何でかという……私は浄化の術が基本魔法。それで、幽霊になっても浄化の術を帯びているのよね。その術が冥界の入り口を護っている方々……というか冥界の住民には毒らしいのよ。それ出来るなっというわれてね。仕方なしにこっちに戻ってきた。……そんな所よ』

（浄化の術って凄いだね）

『そうよ。大抵の毒とか、呪いとかはこの術で消し去ることができ

るわよ』

（そういえば……ネメシアさんって寺院の修行尼僧筆頭だったんだよね？）

『そうよ。何？ 藪から棒に……』

（いろんな術、使えるの？）

『そりゃ使えたわよ。でも……もう無理だな。使ったら消えちゃうかも……』

（ダメだよ。消えちゃ）

『ん。ありがと。今はソフィアの霊精があるから大丈夫。消えないよ』

（……あれ？ 霊精があるから？）

『どしたの？』

（ということは……今、何かしているの？）

『しているわよ。この剣の……』

……と、急に目が醒めた。

何だ？ と目を開けると……ノーラ達が顔を覆っていた。

「……おい。何してのさ？」

寝ながら声をかけると……ノーラは眠そうに目を開けて……懈そうな声を出した。

『。ん？ もう昼だから先に行くねってソフィアから伝言頼まれてえ……えええっ！』

急に起きたモノだから顔に引っ付いていたノーラが壁まで飛んでいった。アエリイ、ウェンディ、サーラはぼたぼたと頭から落ちてくる。

見ると……ネメシアさんが気怠そうな雰囲気椅子で休んでいる。ヴィオラさんもソフィアも居ない。窓から差込む日射しの角度からして……昼過ぎだっ！

アタシは身支度もそこそこに人形達を袋袍に詰め込んで口に朝御飯だか昼御飯だかの残りの蜂蜜サンドを啜えたまま、ぼやくと寝惚

けているようなネメシアさんの手を取って袋鞆を担いで闘技場へと急いだ。

って、何で急ぐ必要が？

駈けながらも悩んだけど……まあいいや。ギザキさんの試合が不安だからと言うことにしておこう。なんか夢の続きを見たいような気もするけど……どんな夢を見ていたっけ？ ん〜。ま、それより今は闘技場だ。ギザキさんが実際、どれだけ強いのか見てみたいし……

そう。ギザキさんの実力が知りたいんだ。あんな城が壊れるような戦いでノイエのお姉さんであるノエアさんを無事に興入れさせたという実力が……

15・その朝の夢と…… 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

15・その朝の夢と…… 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

闘技場に辿り着くと丁度ギザキさんが呼ばれて登場した所。運が
良いぞ。

「はあはあはあ……間に合った……はあはあ……はあ？」

息を整えながら闘技場を見ると……全員、ギザキさんを睨んでいる。
えーと、……ざっと数えて7、8人？随分と……詰め込んだ
モノだな。斜向いのの闘技場でも7、8人が居るから……別にこっ
ちに多く詰めこんだという訳では無さそうだな……

「あら？起きたの？」

振り向かなくてもその声はソフィアだ。アタシは視線を闘技場に
向けたまま尋ねた。

「ソフィ姉え……ギザキさん……勝てるかな？」まだ息が切れて
いるから途切れがちになる。

「大丈夫。傭兵として幾つもの戦場で戦い生き延びてきましたから
って……さっき言ってたから……」

ソフィアもちよつと心配なんだろう。言葉の端にそんな感じが顯
れている。

「大丈夫さ。さっき、軽く手合わせしたけど、昨日アタシが相手し
たヤツより数段上だね。心配には及ばないって」

ヴィオラさんの声が後ろで響く。見れば……真剣な面持ちだ。ヴ
イオラさんも判っているんだな。多勢に無勢というのが如何に不利
かということが……

改めて見渡せば……エアリエスさんは闘技場の横で腕を組んで鋭
い視線のまま、闘技場の様子を監視している。場外審判という所か
な？ たった一人が勝ち残る方式だから……場内審判は要らないの
だろう。エアリエスさんの近くにノイエさん。ノイエさんは両手を
握りしめて祈るように見つめている。……やっぱり心配なんだろう
な。ギザキさんの実力を一番知っているのはノイエさん……じゃな

くて 그레이さん？　かな？　さて、그레이さんは？　と捜してみる
と……

「あ……あんな所に」

札売り屋の横で腕を組んで立っている。

さては……ギザキさんの札でも買ったのかな？　うゝむ。抜け目
がないというか……なんというか……

「始めっ！」

合図と共に全員が一斉に……なんて事には流石にならない。全員
がそれなりに戦場なんかで戦い慣れしているんだろう。こういうの
は最初に戦いだしたのが不利。戦っている間に死角から襲われるし、
体力も削られる。一番有利なのは、最後まで戦いに加わらなかった
時宜に恵まれた人。その幸運を掴むために誰もが様子見になる。そ
して……誰かが我慢できずに闘いだしたときに一気に形勢が流れて
いく。予測不可能な結果に向かって……

……などと考えていたら、斜向いの闘技場で戦いが始まりだした。
一気に乱闘になって……数人が闘技場から落とされ、残るは……3
人。あゝ長引くぞ。三竦み状態つてのは、実力が伯仲していると特
に長引く。

で、視線を元に戻すと……こつちではまだ何も始まっては居ない。
全員がギザキさんを睨んで、動かない。つまり……全員がギザキサ
ンが実力で一番だと考えているということだ。最初にギザキさんを
落としたいんだけど、先頭に立つ気はない。だからといって、ギザ
キさん以外のを落としたら、対ギザキさんとの戦闘時に援軍が少な
くなり、落とされる可能性が高くなる……そんな思いが逡巡してい
るんだろう。

「さて……そつちから来ないならこつちから行くぞ」

ギザキさんは腕組みをしたまま闘技場への中央へと進んでいく。

あゝ　本当に余裕在りすぎて嫌みなんですけど……

でも、中央に進むのは定跡だな。何より全員から同じ方向から攻
められることが無くなる。一番つまらない押し出し負けという結果

にはなりにくい。けど死角から攻められやすくなっただけ……
「はっ」と、やや斜め後ろの死角に入っただけの長剣を振り翳して襲ってきた。

「遅い」と言わんかのように、盾でも受けずにくるりと体を入れ替えて避けると背後になった輩が突きかかってくる。その突きを舞うように躲すと肩の盾で身を当てる。と……一瞬にして場外まで吹き飛んだ。

「野郎っ！」

直後に2、3人が背後から襲ってくる。が、腕の盾で横殴りに刃物を殴り躲して、更に後ろから最初の輩が突き刺してくるのくるりと躲して盾で殴る……のを相手も盾で受けたけど、威力が違う。盾ごと吹き飛んで、闘技場の床に転がった。その間にギザキさんは先に飛びかかってきた3人の真横に回り込み、腕の盾で殴る……というか身を当てる。拳術家が使った発勁とかいう技に近い殴り方。速度で殴るんじゃなくて近距離から相手を吹き飛ばすような殴り方だ。3人まとめて吹き飛んで……一番外の1人が場外に転げ落ちた。残る二人も床に転がり……直撃を受けたのが腕か胸を痛めたようでそのまま転げ回っている。

あつという間に……ギザキさんの優勢だ。残るのは5人。今、手合わせして闘技場に残っている3人は次の手に躊躇するだろう。もう敵ではない。

様子を見ていた2人が……にやりと笑う。

「ふうむ。少しはできそうだな？」

「弱虫が何か言ったか？」

すかさずギザキさんが氣勢を挫く言い返し……いや、攻撃を煽っているんだな。案の定、怒りを速度に変えるかのように大男が両腕の太剣を振り回しながら襲い来る。そして、その大男の背後に隠れたもう一人が細長い剣で突き掛からんと狙いを定めながら冷静にギザキさんを睨み……襲ってきた。無駄の無さそうな戦法。仲間だろうか？ でも……そんなのもギザキさんには兎戯に等しいのだろう。

慌てずにすすつとステップを踏んで大男の両剣を躲し、飛び込むと胴体に一発……いや、瞬時に数発。後ろの男は大男が邪魔で突きかかれずに……最後にギザキさんが肩の盾で当てた発勁で……大男ごと床へと吹き飛ばされた。

数息の間に……闘技場に立っているのはギザキさんだけ。

床に転がっているのが5人、既に落とされたのは2人。そして立ち上がった一人……さっき3人がかりで襲ってきたうちの一人が立ち上がり襲い来ようとしたところに瞬時に進み寄ると……数発の拳と肩の盾での発勁で瞬時に外へと弾かれた。

残るは4人。

15・その朝の夢と…… 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

15・その朝の夢と…… 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

15・その朝の夢と…… 3

一人は腕を抱えて転げ回っているし…… 実質的に3人。その3人が目配せして…… ゆっくりとギザキさんを取り囲むと…… 同時に飛びかかってきたっ！

…… けど、同じだね。

ギザキさんの唇が「芸がない」と動いていたけど、同感。一番動きが読みやすい大男の脇へと体を躲し、大男の剣の一つを盾で跳ね上げ…… 最初に床に転げさせられた輩の剣を別の盾で横に跳ね飛ばす。さつき大男の陰から突きかかろうとしていた輩は横に跳ねられた剣に邪魔されて突き切れていない。…… 当然、届かない。その間に大男の脇腹に発勁を当て、飛ばすと横に跳ね飛ばした剣の男の背後に回って、一撃。気絶した男に覆い被されて細長い剣の男も床へと崩れ落ちた。

「あつけない…… これで……」

「終わりだっ」

さつきまで腕を抱えて転げ回っていた男が…… いつの間にかギザキさんの背後に回っていて剣を突き刺したっ！

…… ように見えたけど。判っていたのだろうね。振り返りもせず半歩横に動いて、肱を…… いや腕の盾の端で脇腹に一発。気絶して崩れ落ちる男。突き刺したように見えたのはギザキさんの動きが速すぎて、躲したのが判らなかったからだ。

「…… おまえがな」気絶した男を一顧だにせず、動ける相手を冷ややかに見つめている。

残るは…… 細長い剣の男だけ。後の3人は気絶して床にのびている。

「…… で、どうする？」

覆い被さっていた気絶した男を払い除けて立ち上がった細長い剣の男は、剣を構えて…… ちゃんと剣を手から落として、肩をすくめ

た。戦意喪失……と思ったら、大男がギザキさんの足首に剣を一閃つ！ 空へと飛び上がったギザキさんに素早く床に落とした細長い剣を拾い……というのは無理。剣を掴んだ手をギザキさんが踏みつけたから。……しかも両足で。

「ぎゃああああ」 あゝあ。指の骨が折れたかな？

「あ、すまん。大丈夫か？」と頭を下げるギザキさんの後ろから襲い来る大男っ！ ……には後ろ蹴りを一閃。しかも膝に……

「ぐおおおっ」 膝を抱えて転げ回る大男。んゝ。確かにそこは痛い。さて、手を踏みつけられた男はと確認すれば既に頭を抱えて転げ回っている。後ろ蹴りを繰り返した時の反動でギザキさんの頭突きが入っていた。……のは単なる偶然のようで、ギザキさんも頭を片手で押さえている。

「痛たたた……」 ギザキさんはかなり痛いようでしやがみ込んでしまった。無防備だな。

でも、見渡しても……その隙をついてくる相手は誰もいない。

大男は膝の痛さのあまり闘技場への下へと転げ落ち……たのは、ワザとだな。実力が判って勝てないと踏んでの演技だろう。細長い剣の男もそれを見てからか、わざわざと床半分も転げて落ちていた。床に転がっているのは正真正銘に気絶している二人。……気絶したフリかも知れないけど。

兎に角、立っているのはギザキさんだけ。頭を押さえて立ち上がったのはちよつと間抜けっぽいけど。

「勝者っ 無剣のギザキ」

支配人がなんか嫌そうにギザキさんの勝利を宣言した。

ふう。ちよつとだけ心配したけど、実力発揮。順当勝ちだ。

おおつと、斜向いの方でも観客がざわめいたので、見てみれば……残った一人が最後の相手の大男を闘技場への外へと放り投げ……こつちに投げられたっ！

慌てて逃げて……避けたけど、転んでしまった。

「あ痛たたた……た？」

転んだまま振り返ってみると、人集りがぼっかり空いた中に投げられた男と……ネメシアさん？　なんで、そんな所に？　って、アタシがいた場所にそのままぼやっと立っていただけだな。きっと。ソフィアとヴィオラさんは逃げた群衆に押されて、アタシとは反対側にいる。

「ネメシアさん、逃げてっ」

咄嗟に叫ぶ。ネメシアさんは術が使えないんだ。……なんで？

使えないの？　いや、兎に角、そうだろうと思う。幽霊なんだし。

投げられた大男は二度三度と頭を振って、意識を確かめると廻りを見渡す。血走った目で……ふと、ネメシアさんが持っていた剣……

……エアリエスさんの剣を目にとめると、力尽くで奪い取った。

「てめえっ！　落とすだけならまだしも投げるとは傭兵の風上にも置けねえ。叩き斬ってやるっ！」

「あ……」

驚いたのはアタシだけじゃない。その場にいた全員が息を呑んだ。幽霊であるネメシアさんが持っていた剣。何かを知らない他の人達にとっても薄気味悪い縁があると信じて疑わない剣。エアリエスさんから謂れを聞いているアタシとソフィアは判っている。

それは真正正銘の魔剣。

手に取った人間がどうなるのか、抜いたらどうなるのか判らない剣をネメシアさんから奪い取って……今、正に抜こうと柄と鞘に手をかけて力任せに抜こうとして……抜けなかった。

鞘から柄にかけて巻き付けられた紫銀の鎖が眩く輝き……　って、

瞬後にソフィアの杖が大男の鳩尾に、ヴィオラさんの正拳が喉元に……　おまけに背後から 그레이さんが背骨に頭突き、活殺とか言う心臓の背中側に鳥嘴拳、腰椎に掌底が、更にはエアリエスさんが剣を鞘のまま頸椎を撃ちつけ……　朽ち木が倒れるように大男は地面に崩れ落ちた。 그레이さんがソフィア達の目に止まらぬように、ささと人集りの中へと姿を消したのが……　なんか可笑しい。アタシの位置からは何をしたのかバレバレだったからね。

ネメシアさんが「ダメでしょ？ 人の物に手を出しちゃ」みたいな感じで地面の小石というか砂粒みたいのを大男の眉間にぺしって投げていたけど……まあ、駄目押しだね。

「ネメシアさん大丈夫？」

慌てて駆けつけるとネメシアさんは剣を拾い上げ……にっこりと笑ってくれた。

なんか……ちょっと疲れている感じだったけど……

「ネメシア。大丈夫かい？ なんか元気ないけど……」

「アリア。ネメシアさんを連れて宿で休んでいてくれる？ 調子悪そうだし……」

エアリエスさんも心配そうに……睨んでいる？

「アంత。アタシの剣を奪い取ったんなら、誰にも渡さないで欲しいね。いい？ 二度と誰にも獲られるんじゃないっ！ 誓いなさいっ！」

……そこまで幽霊に怒らないでも。って、『誓いなさい』？ どつかで聞いたような……変な感じのする言葉……じゃないよね。一般言語だよな？ ……でもなんか変な感じの言葉だな。

言われたネメシアさんは……何か言いたげだったけど、視線を落として……トボトボと宿の方へと歩いていった。

「んじゃ、休んでるね。ソフィア……ネメシアさんに靈精を飲ませた方が良くんじゃない？」

「そうだね。じゃ、ヴィオラさん、ちょっと待っててくださいね」「ワタシのことなら心配無用。次の試合もささと勝ち残ってみせるさ。んじゃ、行つといいで」

ヴィオラさんに見送られてアタシとソフィアはネメシアさんの後を追う。ヴィオラさんの横でエアリエスさんが「言い過ぎたかな？ みたいな感じで後悔しているような」なんだい。ちつとは言い返しなさいよっ」って怒っているような……そんな感じだった。

宿に帰って、ソフィアがエアリエスさんの事を思い出して怒り出したネメシアさんに7杯ほど靈精を飲ませて、ソフィアは闘技場へ

ととんぼ返り。聞けば、闘技で傷ついた方々を治療しているらしい。そういえば昨日も誰彼と無く治療していたな。「白魔導師としての義務ですから」とか言っ。アタシと一緒にほぼ徹夜であんな凄い術を使っ、そかも夜通し飛び続けたようなモノなのに元気だな。か弱い乙女のアタシは睡魔に襲われるままにベッドへと潜り込んだ。ネメシアさんも椅子で休んでいる。

…… か弱い乙女っという所に引つかからなかったよね？ ソコ。単なる確認だから言い訳は聞かないでおくけど。

しかし…… 今は平穩無事な平和だな

こんな時がいつまでも続いていたらいいのに……
寝直したときに見た夢は…… 忘れてしまった。

15・その朝の夢と…… 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

16・混迷と困惑と 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

16・混沌と困惑と 1

16・混沌と困惑と

その夜は皆でギザキさんの敗者復活戦生き残りと続けて行われた二回戦勝ち上がり、ヴィオラさんの順当な二回戦突破祝賀食事会。

因みにだ。昼に 그레이さんが賭けていたのは当然ながらギザキさん。但し、その資金は……昔、ギザキさんに借りていた借金相当分のこと。従って、配当金の金貨15枚はギザキさんのモノ。150倍だったというのに札一枚、つまりは銀貨4枚しか賭けていないなんてね。欲が無さ過ぎるな。

席に着いてから、ギザキさんが「果物を届けてくれてありがとう。ところで、あの手紙は何処で預かった？」とか聞いてきたけど、ソフィアがちよつと意味在りげな目配せしたので適当に誤魔化しておいた。旅の途中でとある小さな宿のギルドで「盾4つの人を見たら渡してくれ」と頼まれたとか何とか。ノイエさんが怪しげな感じで睨んできたけど……まあ、ソフィアが隠したいのであれば、アタシも知らんフリするだけだ。「結界処理してあるからアタシ達も中を見ていないし、もし、複数の書簡をいろんな人に渡していたとしても中を読むのは貴方達だけでしょ？」とかね。

なんでソフィアが城を直したことをかを隠したいのかは……よく判らないけど、たぶん直しに行くのをアタシに隠しておきたかったのと同じ理由だろう……って、何だろうね？

「でも……なんですぐに渡してくれなかったの？ アナタと闘ったときの……その直後でも良かったんじゃない？ それに跳栗鼠達から……とか言ってなかった？」

うぐつ。鋭いな。ノイエさんは……。いや、今晚の確認でアタシと同一歳と判ったから、今からは呼び捨てで、ノイエは鋭い。流石に独学だけで呪符師となっただけはある。正式には選礼式で白の石……じゃなくて『白魔導師』の札を引いたから白魔導師になり

たかったみたいだけど、白魔術を教えてくれる人も書物もなかった
ので、独学でなれた呪符師になったということらしい。

選礼式というのはこの世界で職業を決める儀式のこと。大抵は7
つの色違いの石を袋に入れて引き当てた石の色で決めるんだけどね。
札を引いて決めるなんて……ノ・トワ城の因習なのかな。

でも……城が全壊するような戦いがあつたとはいえ、城に住んで
いたのなら白魔術を教えてくれる白魔導師の一人や百人ぐらいは良
そうなモノだが……なんかその辺は言いたく無さそうな雰囲気を撒
き散らしていたので聞かずにおこつ。

「まあ……ね。その時は忘れたから、果物とかをお詫びの印に……
朝市の行商人から手に入れて持って行つたんじゃないの。跳栗鼠達
とかから果物を届けられたりしていたんじゃない？ 届ける相手がど
んな人なのかを情報として聞いていただけよ。まあ、あんまり追求
しないで赦してよ。忘れていたのを思い出したんだから」

赦せ。跳栗鼠達。貴方達の好意の品を誤魔化しの材料にしてしま
つた。

「まあまあ。もう終わりにしよう。城が直つたという知らせは悪い
知らせじゃないんだし」

流石にギザキさんは物わかりが良い。城が直つたなんて良いこと
でしょ。直したのはソフィアだけ。

そのソフィアをノイエはジトつと睨んでいる。何が気に入らない
んだか。もう一つ、ジトつとした視線が飛び交っているのが何とも
……ねえ。

もう一つのジト眼はエアリエスさん。やっぱり、ネメシアさんが
剣を奪い取られたのが気に入らないようで、ちらちらとジト目で見
ている。そしてネメシアさんもジトつとした眼……は開けていない
けど、「何よ。抜かれなかつたんだから良いんじゃないっ！」みた
いな雰囲気エアリエスさんのジト眼を反射している。

うゝむ。なんか御飯が美味しくないぞ。

「確認したいんだけど」

不意に……且つ徐ろにノイエが声を出した。何事？ と全員が顔を向ける。

「その杖って……光の杖？」

ノイエが指さしたのはソフィアの杖。確かにそれは光の杖なんだけど……今居るのは食堂。

他の人もいるし……なんと説明しようかと考えていると……ノイエが誰も応えないので一人で先を続けてしまった。

「信じられない。光の杖を持っている尼僧を気取っているなんて……寺院出身というのも怪しいわ。何処で私の姉様の話を聞いたの？」え〜と。ちよつと待て。何が信じられないんだ？

「杖がどうしたのさ？ なんでそんなに怒っているの？」

アタシの問い掛けにノイエはギト眼睨みで返してくれた。

「知らないの？ 光の杖の尼僧は聖アイルコンティ又寺院で修行中……魔王が復活したときに寺院と共に私の城、ノ・トワ城に訪れる筈。旅をしているなんて信じられない。しかもこんな所で闘技に出たなんて……」

そこで言葉を句切って……アタシを改めて睨み直した。

「そういえばアナタはあの人の連れだったわね？ 何を企んでいるの？ 光の杖の尼僧を気取って誰を騙そうとしているのよっ？」

あ〜。なるほど。自分の知識と現実との差異に対応することができなくて……戸惑っているのを誤魔化して……アタシ達にぶつけてきたと。そんな所だな。これだから世間知らずのお嬢様というヤツは……と、嘆いても進まないから嘆きは脇に置いておこう。

しかし……ん〜。説明する事自体は簡単だけど、どう説明しても納得しそうにもないな……

ちらつとギザキさんを見ると慌てているけどノイエが言い出したことへの知識は……皆無のようだし……説得は出来そうにもないな。同じ寺院出身のネメシアさんは……もの凄く不愉快そうなんだけど、幽霊だから声は出ないし。ヴィオラさんとは見ればどうやって説明しようかと考えているような「そんなレベルの疑問って今更どうし

て？」と戸惑っているような。ソフィアはと見ても疑われている当事者なのだからソフィアが何をどう説明しても信じてくれそうにもない。説明して信じて貰えなくても別に何かを失う訳でも得する訳でもないから……今までは「では、さようなら」で済ませていたんだろうけど……一応、魔王出現時の対策関係者だから疑われたままでは良くは無さそうだと考えているような。

「じゃ、アンタはソフィアが光の杖の尼僧を語って何していると思うのさ？」

と割って入って返したのはエアリエスさん。世間を一人で渡りきってきただけはあるな。

「そ……それは」と口籠もるノイエ。そりゃそうだ。疑問を口に出しても先の事は考えていなかっただろうからね。口籠もるしかないな。

「だったら、無闇に人を疑わない事だね。信じろと言っているんじゃない。疑う必要はないと言っているんだ。少なくとも形になっていないのならば心に仕舞って、形になるまで言葉にしない事。不必要に敵を作りたくなければね」

口に料理を運びながら、最後はギロリとノイエを睨んで会話を締めた。

流石、言葉に重みがある。根拠不明だったけど。

「さて、白けてしまった。アタシはコレで退散するよ。ソフィア、気にする事はない。アタシはアンタを信じているから。ね？」

につこりと笑う。

値千金だな。場の仕切と切り上げ方とフォローは。

そして、夕食会はそれでお仕舞。三々五々に部屋へと戻って休む事にした。

16・混迷と困惑と 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

16・混迷と困惑と 2 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

16・混乱と困惑と 2

「ソフィア。いいのかい？ 疑われたままで……」

部屋に戻ってからヴィオラさんがソフィアに確認した。

「昨夜のノエアさんのことで信じて貰っていたとばかり……でも、疑われるのは……確かにそうですね。寺院の知識が在れば、私がここにいる筈がないというのは正論ですから」

ソフィアは家族を捜すために寺院を出てきたんだ。試練を乗り越えて、周囲を納得させて……でも、それが寺院の規範と違うということだけはアタシにも判る。

「ノイエが正論と事実の差異に納得できないお嬢様という事だけでしょ？ 気にしなくてもいいわよ。きつと……あまり甘やかしても仕方ないと思う」

アタシのフォローは……あんまり効いてないな。エアリエスさんの言葉の方がソフィアの心を落ち着かせているはずだ。

……結構、長く旅しているのに。情けないな。アタシは……

ネメシアさんもアタシの言葉に頷いてくれたけど……ソフィアの方を心配げに見ている。

そうなんだよね。ソフィア自身は何も疑われるようなことはしていないんだ。

していないのに疑われる事への対処なんて……

その時、ドアを誰かがノックした。

「はい。すみませんよ」

と、入り口に立っていたのは……珍しい。 그레이さんだ。

「あれ？ 그레이さん。どうしたの？」と応えながら、視界の端でソフィアの様子を確認すると……さっきまでの思案投首状態からジト眼睨み迎撃態勢へと瞬時に変更していた。

「用があるのは私ではありません。こちらのお二人です」

部屋に入らず、ひらりと手を向けるのは……ギザキさんとノイエお嬢様。

「……百聞は一見にしかず。また、体験に勝る説明はありません」
ん？ 何を言おうとしているのさ？

「お二人がソフィアさんの杖を……触ってみたいそうなのでお連れいたしました」

あ……なるほどね。

ソフィアの杖は……ドアの反対側の壁に立てかけてある。

「そういうことならどうぞ……でも、ギザキさん。火傷しても明日の戦いは……大丈夫？」

「ん？ まあ、掌ならば使わないから……大丈夫だと思うが……」

ソフィアに眼で合図し、二人をどうぞと中に入れて、杖の前へと促した。グレイさんは……やっぱり中に入らず、入り口の……陰で見守っている。

ソフィアは杖を持ち上げ、ゆったりと両手で水平に捧げ持った。

「どうぞ。確かめてくださいな」

ギザキさんとノイエは銀白色に輝く細長い光の杖を目の当たりにして……杖が漂わせている雰囲気になよ々と飲まれたように二人で目で合図してから同時に指先を伸ばして……触れた。

「きゃあっつ！」 「うおわちっ！」

まるで弾かれたかのように慌てて指先を引っ込める。というか床にへたり込んだ。

「……少なくともソフィ姉えの杖は本物だと認めてくれますよね？」
アタシはニヤリ笑いを封じ込めずに、表に出しながら二人の顔を覗き込むようにして確認した。

「あ、ああ。剣の類ならばノイエが持てないのは当然としても……オレが持てないというのは有り得ない……凄まじい法力が封じ込められている杖としか……」

そうそう。ノイエさんは選礼式で白の札を引いた以上は白魔導師。

若しくはそれに準ずる職業。白魔導師は剣というか刃物は一切持てない。無剣だけど剣術師であろうギザキさんがノイエさんが持てないモノを持つことが出来ないという事は……

「……凄い法力。聖紋が刻まれているのに……表面に凹凸がない」そう。光の杖って凹凸がないのに聖紋が表面に浮かんでいるんだよね。

「で？ その前に言うべきコトがあると思うんだけど？」

あゝ 我ながらアタシって結構、意地悪だなと思う。

……あのね。アタシの言葉にすぐ同意しないように。

「判ったわよ。……先程はすみませんでした」

ペコリと頭を下げるノイエ。んゝ素直だな。まるでアタシのようだ。

……疑った目で見ない。ソコ。

「いえ。確かに寺院の規範では……」と言いつつしかけたソフィアの前に意味ありげに笑いながらヴィオラさんが割って入ってきて誤魔化した。

「色々と世間にも寺院が極秘に介入しなきゃならないコトがあるって……ノエアから聞いてなかった？」

あらら。悪い大猫娘だな。ヴィオラさんは。

「あ……」っと小さな声を手で押さえて……改めてアタシとかネメシアさんを見て納得したように頷いた。

「……判りました。そうでなければ幽霊を成仏させていないとか、人形を操る黒魔法使いとかと一緒にいるとかしませんよね」

おゝい。何を勘違いしてアタシを怪しい黒魔法使いだなんて失礼なことをあつさり……

ま、いいや。人形達がソフィアの持ち物というかソフィア関係精霊の分身であるミダルとかを説明し直したりしたら無意味に混乱しそうだ。でも、アタシが操っている訳じゃないんだけど……

「ま、そういうことで。んじゃ、宜しくね」

勘違いは後で、追々訂正するとして、今晚はコレで終わらせとき

ましょ。勘違いであることだけは確認させることができたし……
二人はソフィアに改めて謝罪して、自分たちの部屋へと帰っていった。

ドアを閉めるときのギザキさんとグレイさんの様子からして……
グレイさんの発案なんだろうな。二人の訪問は。

兎に角、これで今夜はぐっすり眠れそうだ。

16・混迷と困惑と 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

17・夢の中で 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

17・夢の中で 1

17・夢の中で

その夜の夢。

金色の花が虹色に輝く草原で、大の字に寝そべっていると。ネメシアさんが覗き込んできた。

『随分、寛いでいるわね』

（そりやそうだよ。なんか……やっと落ち着いた感じだから）

『そう。あのね……今度ね、人形達も連れてきてくれない？』

（んん？ そりや構わないけど……連れてこれるの？）

『さあ？ でもアナタにとっては夢の中なんだから出来るんじゃない？』

（そか。あれ？ 前に『夢じゃない』って言ってなかった？）

『そう？ でも、気にしないで良いわよ』

（ん？ そんなモノなのかな？）

『そう。ここはアナタの夢。そういうことで良いじゃない』

屈託無く笑う。その笑顔が……なんか幼く感じられて……儚い感じで、アタシは起きあがると……ぎゅっと抱きしめてしまった。

『どしたの？』

（何処かに行かないでね）

『行かないよ。だって……ここはアナタの夢なんですよ？ いつでも逢えるわよ。きつと……』

意味深だな……

『そうそう。ノーラの腕の生地が薄くなっているから、そろそろ直してね。アエリイはお腹の辺り。ウェンディは……まあ、まだ大丈夫かな。おしゃまさんだから。でも、サーラはおきちゃんさんだから……全体的に危ないわよ』

（そなの？）

『そう。ソフィアったら他のことは一生懸命だけど、自分のコトと

かになるとずばらだから……ね。気をつけないとすぐにどつかに飛んで行っちゃうから……』

（寺院でもそうだったの？）

『そうよ。他の子が炎の精霊の召還に失敗して……精霊の炎の宝珠に包まれそうになったときも……宝珠を杖で叩き落としてね。「ちよつと失敗したからってそこまで苛めることはないでしょ？ 文句があるなら私にかかってきなさいっ！」ってね。本体の精霊を叩きのめしてしまったのよね。そしたら……部下を攻撃されたんで上役の精霊が出てきて……ま、喧嘩して勝ったから良いようなモノで……負けていたらどうなっていたやら』

（ひえええ……怒らせたら怖いんだね。なんか……想像つくけど……想像以上だな）

『じゃなかったら、その喧嘩した相手……精霊の上役が炎の精霊王の怒りに触れて……原初の精霊炎に呑み込まれそうになったのを助けたりしないって』

（あれ？ ひよつとして……それって）

『そう。それがサーラ。当時は精鋭の突撃隊長だったかな？ 今は炎の精霊界の突撃軍司令官……平たく言って將軍のハズよ』

（つまり……炎の精霊の將軍に勝ったの？）

『違うわよ。ソフィアが勝ったのは炎の精霊王。だからサーラが命を救われたんじゃない』

（あ……そうか。え？ つまり、精霊の將軍クラスに勝って、さらに精霊王にも勝った？）

『そ。人のことになると手がつけられないぐらいに強くなるんだから』

はあ……やっぱり、史上最強の御節介焼きだな。

『それからは……試験とかで一人で他の精霊王の所にも出かけて……難題やら揉め事やら……御節介焼いては闘う羽目になって、尽く勝ち続けてきたはずだけどね……』

（凄い……） 改めて感じるけど凄すぎる。

『各精霊界から「あの者を寄越すときは事前に連絡するように。さもなければ人間界から精霊界への攻撃とみなす」ってね。』歩く最終兵器』という渾名も……使いの精霊が漏らしていたわ』

（はははは……） 笑うしかないな。それ。

『まあ、そうじゃなきゃ、そんなこんなで助けられた精霊が自主的にミダルとなつてソフィアの人形に宿ったりしないわ。宿っているのは総て各精霊界の実力者。並みの召還術師が召還できる精霊達なんて、サーラ達を見ただけで途端に平伏すわよ』

……ソフィア一人で魔王にも軽く勝てそうな気がしてきた。

（凄いね。「凄すぎる」という言葉が軽く感じるくらい……）

『そうね。史上最強の光の杖の継承者ね。間違いない』

（ネメシアさん達も……光の杖の継承者候補として寺院に行ったんだよね？ 確か……）

『そ。ヴィオラは8歳過ぎから、ノイエのお姉さんのノエアは12歳だったかな……私なんか4歳の時から寺院に入れられたのよ。酷いと思わない？ まだ遊びたい盛りだったのに……』

（え？ そんなに早くに？）

『そうよ。4歳の時に……誕生日に四力の精霊の人形が貰えるって聞いていたから……楽しみにしていたのに……寺院に入れられちゃった……』

（どうして？）

『この眼の所為よ』

改めて見てみるけど……綺麗な金色というだけだ。……そういや、ソフィアとヴィオラさんは……怯えていたけど。

（その眼がどうしたの？）

『御先祖さん……私とヴィオラの共通の先祖様なんだけど、その御先祖さんの「生まれ変わりに間違いない。その眼が証拠だっ！」なんて親戚中から……生まれたときから騒がれていたらしいんだけど……私の知らないところでね。それで寺院に入れられるのが決まったらしいわ。まったく……せめて誕生日の祝いを済ませてからにし

て欲しかったわよ』

あれ？ ひよつとして……

（……ということは、人形は？）

『貰ってないわ。だからソフィアが羨ましくて……』

（そうなんだ……）

『ソフィアは……あの人形は育ててくれた家族じゃなくて……ソフィアを捨てたお母さんの形見らしいけど……大事な人形を黙って貸してくれた。それで私もなんか……ソフィアを妹みたいに感じてね。私を知ってることは全部教えたわよ。』

あれ？ ネメシアさんって……今は私よりも小さいぐらいの少女みたいなんだけど……幽霊の時でも、ソフィアよりは若く見えるんだけどな。

（ネメシアさんの方が歳上だったんだ？）

『そうよ？ これでもヴィオラよりも歳上よ。ま、ヴィオラとは半年ぐらいしか変わらないけどね』

17・夢の中で 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

17・夢の中で 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

17・夢の中で 2

（ヴィオラさんも……いや、年相応かな？ 見た目は）

『ヴィオラも……祝い返しの翌日に寺院に入れられたんだったかな？ 私が4歳で入ったんだから……同じ御先祖さんの生まれ変わりかも知れないんだから入りなさいって言われてね』

（ん？ 眼は金色じゃないよね？ ちょっと金色っぽいけど……）

『ヴィオラは牙とか爪が鋭いのよね。赤ん坊の時に鋼の鎧を爪研ぎに使ってボロボロにしたんだって』

（げ……） そんな仔猫がいたら絶対に飼いたくないぞ。

『まあ、成長するに従ってね、鋭さに磨きがかかって……岩とかでも簡単に撫で切っちゃうのよね。あの子ぐらいよ。白魔導師なのに爪先でどんな剣でも受け止められるのは……』

あゝ 闘技場で相手の切っ先を受けていたのは爪先だったのか。

道理で白魔導師なのに剣を受け止められるのかと……え？

（つ、爪先で？）

『そうよ。掌とか指先で受け止めたら火傷しちゃうじゃない。白魔導師なんだから』

そりゃ、そうなんですけど。剣の威力を受けるコトが出来ると言うことは……爪先自体が剣に匹敵する切れ味というか……強度を持っているということ……だよね？ ……爪切りはどうしているんだろ？と下らない疑問が湧いてくるけど……放っておこう。

（凄い切れ味なのね）

『ん。でも、白魔導師だとあんまりそれを発揮する場面がないのよね』

そりゃそうだよな。

（ヴィオラさんが寺院に入ったのは……一瞬、怪力とかかなと思っただけだ）

『ん』 力は関係ないわね。寺院に入るのは……法力が凄いか法

術の覚えが早いとか……そんな子が集められるのよ。……大抵は、
本人がそういう資格……というか法力があることを自覚しないうち
にね』

自覚しない……つまり？

（進んで入る子って居ないの？）

『居ないわよ。私が知っている限り……あ。ラディアは希望してい
たって言うていたけどね。大抵は入って直ぐに帰りがあって……泣
いているわね』

寺院って……楽しく無さそうだと思っていたけど、本当に楽しく
無さそうなところだな。

（ソフィアは最初は喋らなかつたって……ヴィオラさんが言ってい
たけど……）

『そうね。でも私とは同室だったから……私が人形が羨ましいって
言ったら……黙って貸してくれた。それから打ち解けたわよ。少
なくとも私とは……』

（ふうん。そうなんだ……）

『他の子達とだって……さっきの精霊との喧嘩の一件からは……打
ち解けていたわ。指導尼僧様達からは「他の修行尼僧達が甘えてし
まいます。手助けするのは自重なさいませ」って言われてたけど……
……事ある毎に手助けしていたわね。それで、ある時からは寺院より
は精霊界での修行とかを主にしていたけどね。その精霊達からも疎
まれたモノだから……こうして寺院を出て旅をすることを赦されて
いるのよ。ソフィアは』

（はあゝ　なんか、凄すぎて……ついて行けないなあ）

『気にしない。アナタも大したモノよ。陣形態なんて高位法術を憶
えて使いこなせているなんて……』

そう？　いやゝ。実はアタシもそうじゃないかと……

（自慢して良い？）

『良いわよ。ソフィアとかに法術の使い方方の基礎を習ったら……撃
形態とか獄形態も使えるようになるわ。私が保証する』

（そ、そなの？） たはははは。誉められるのって慣れないなあ。
『でも……使っちゃダメよ。法力が無くなって……倒れちゃうから』
おーい。どっちなのさ。

（そんなに疲れるの？）

『そうね。撃形態なら1日に1回程度なら使えるかもね。何度も使えるのは……ソフィアか……少なくともヴィオラ並みに法力量がな
いと……』

（そんなに……）

……と、目が醒めた。

ソフィアに抱きつかれたか……と見れば確かに目の前に形の良い
デカいのが2つ、寝間着を押し上げているけど……抱きしめられて
はいない。背後に目の前のより更にデカいのがあるけど……後ろか
ら抱きしめられているわけでもない。

「あれ？」

何か音がした？ しなかった？

起きあがり部屋を見渡して……ソフィアの杖はある。ネメシアさ
んとエアリエスさんの剣は無いけど……それは、いつもだっけ？

夏ちよい前の夜の冷気が部屋に漂っているけど……寒いというほ
どではない。

そつと寢床を抜け出して……窓から外をしてみる。別に外で音が
したわけでは……ないな。

窓の下は大通り。闘技場から南へと延びる通りだ。勿論、通りに
は誰もいない。

窓を開けて……南を見してみる。通りの先は……町はずれに小さな
広場。その先は崖。ちょうど、二つ月が通りの先の崖上の上空に浮
かんでいる。

紅い月と蒼い月の明かりが通りを照らし……首を振って闘技場の
方を見ると……闘技場が紫色に輝いて……あれ？

闘技場の真ん中に立っている柱の上が黒く陰って……その先の通

りが見えない。そして……闘技場の所に誰か……大男？ 誰だ？

あれは……エアリエスさんの……というかネメシアさんが持っている剣を奪った大男？ 何をしているん……

「きやあっ」 不意に後ろから抱きしめられて小さく声を上げてしまった。

「アリア。風邪引いちゃうわよ。さっ寝ましょ」

ソフィアがアタシを抱きかかえて窓を閉めて寝床へと強制連行。

ベッドの所でヴィオラさんも寝惚け眼で出迎えている。って、ソフィアっ！ 変なところを触ってるってばっ！

きやうっ！ っと、ソフィアとヴィオラさんに挟まれてアタシは夢の中。

その後に見た夢は……忘れてしまった。

17・夢の中で 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

18・情報 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

18・情報 1

18・情報

「おはよ〜」 寝惚けた声で挨拶するのはアタシ。

起き上がってみるとソフィアは既に外出着に着替えて、ネメシアさんに霊精を振る舞っている。テーブルの上には朝食が……アタシの分だけが残っている。

「ん〜？ ヴイオラさんは？」

「朝練とか言って出て行っただわよ。今日の試合は午前と午後の二試合だから」

……ということは決勝が近いのかなと臆気に思いながら……テーブルに着き、ふと見ると……

「あれ？ ネメシアさん。大丈夫？」

なんか随分とやつれて幽霊っぽくなっている。あれ？ 元から幽霊か？ でも随分と元気がない。

「そうなのよね。大丈夫なんですか？」

アタシとソフィアの問い掛けに小さく微笑んで……『大丈夫。大丈夫だから』みたいに手を振った。

アタシとソフィアは顔を見合わせて……どうしようかと思案投首。実際、ソフィアだって幽霊の健康診断なんてしたことがないはずだし、どうやったら元気になるのかも判らないはずだ。

「ソフィ姉え……霊精の予備を用意しておこうか？」

霊精を飲むと元気になるのだけど……朝と夕の二回じゃ足りないのかも知れない。

「そうね。でも、入れ物が……」

宿のティーポットとかだと……朝食が終わると中身ごと持って行かれそうだし……

「んじゃ、アタシが買ってくるよ。その骨董品を売っていた店で手頃なのがありそうだったし」

「それじゃ、御願いな。私はヴィオラさんのトコについて……昼前に一度戻ってくるから」と言い残して……ソフィアは出て行った。出掛けにネメシアさんに「何をしているか判りませんが……無理はしないでくださいな」と言い残して。

アタシは蜂蜜とパンを頼張ってから出かける支度をして……ふと、ネメシアさんを見る。

所在なさに溜息をついているようなそんな感じなんだけど……聞いても何をしているのかは言うてはくれなさそう……そんな凜とした感じもある。

「んじゃ、一緒に行こうよ。ネメシアさん。目利きして欲しいし」最初は『私はここにいるわよ』みたいにきよとのんとした顔をしていたけど……なんか一人にしておくとそのまま消えてしまうような感じがして……アタシは何度も頼み込んだ。やっと『んじゃ、しようがないわね』みたいに微笑んでくれて、アタシ達は部屋を後にした。

「あ、ちょっと待って」

宿の外に出ようとしたところで、ちょっとだけネメシアさんに待って貰って、アタシはカウンターへと走り寄った。

朝食の支度を終わって、グラスとかを拭いている支配人を見かけたから。ちょっと聞きたいことがあったのさ。

「ちよつといいかしら？」と尋ねるアタシに支配人はちらつと一瞥して直ぐに視線を拭いているグラスに戻した。やな感じだな。

「なんだい？ お嬢ちゃん。朝食のメニューの変更なら追加料金を頂くよ」

「そんなんじゃないわ。ちょっと聞きたいことがあって」

ん？ と真面目な顔に戻り、グラスを樹綿のネルに置き、アタシに視線をきちんと向けた。

「何か必要な情報でも？ 念のため言うておくがここはギルドだ。情報も金貨銀貨との交換だ。判っているね？」

と、説教気味の支配人の鼻先に金貨一枚を差し出した。

「金貨に相当するほどの情報……という訳かね？」　にやりと笑う支配人にしれつと言いつつた。

「取り敢えず、両替してちょうだい。どれだけの価値があるのかは……アタシが判断するわ」

「なかなかやるね」とばかりに不敵に笑みに変わった支配人は銀貨を2つの塔にしてカウンターに置いた。アタシは銀貨の塔の横に金貨を置いて……銀貨の塔に手を置いた。

「で？　聞きたいことは？」　支配人は金貨をすつと手に取りポケットへとしまってからカウンターに手を置き改めて尋ねた。このとおり武器は使わないけど変なことはするなよ？　オレだってそれに実力はあるぞ？　というポーズ。この人もギルド直系の宿の支配人だけ在って一癖はありそうだ。

その間にアタシは銀貨の塔の1つを仕舞ってから、もう一つの塔に手を置いたままにしておいた。少なくとも銀貨の塔1つ分の価値を認めて場合によっては払うという意味で。

「聞きたいのは……遺跡のコトよ」

そう。アタシとソフィアがこの町に来たのは遺跡探検。有り体に言って遺跡の中の宝物探した。……武術大会でごちゃごちゃになつていただけ。

「遺跡？　そんなモノがあるとは聞いてないな」

支配人の話だと……支配人がこの町に来たのが数年前、前任がオ―ヴェマの侵攻前に居なくなつて、その後任としてきたのだそう。な宿と支配人の権利を買つて。

「まあ、実際には武力侵攻が無くて政略侵攻だけだったから……前任が戦争に巻き込まれてお亡くなりになったという訳では無さそうだが……兎に角、正式に引き継いだ訳じゃない。従つて町の情報とかは……このオレもそんなに詳しい訳じゃないが……少なくとも、この町近くに遺跡があるなんて話は聞いたことがない」

うゝむ。地元情報に詳しいはずのギルドで情報の引き継ぎがないんじゃない……こんなモノかね。

「さて？ 大した情報が無くてすまないが……幾ら払ってくれるのかね？」

相場は知っているよな？ と言わんばかりの不敵な笑みにアタシは銀貨の塔を持ち上げた。カウンターに残っているのは……銀貨2枚。

ひゅーと軽く口笛を吹く支配人の顔を笑いながら見つめて……2枚の横に指先を軽く置いて3枚の銀貨を置き、残りの銀貨の塔をポケットにしまった。

「これは今後の情報収集と集めた情報への前払い。勿論、下らない情報だったらコレは払わないわ」

「ほほお」

ギルドの使い方を知っているねと言わんばかりににやける支配人にきっぱりと言った。

「期限は5日。その時までには情報が集まらなかったら、コレは晩御飯の御馳走に変えてね？」

「判った。アンタは上客だ。但し……価値のある情報だったら……」
「勿論、追加料金を払うわよ。但し……アタシの査定は厳しいわよ？」

「ふふん。やるじゃないか」と言わんばかりににやけきった支配人に背中で手を振って「宜しくね」と言い残し、アタシはネメシアさんと町へと出かけた。

骨董品店で、前にネメシアさんが選んだ品は売れずに残っていたので……それらを全部お買い上げ。さらに色々追加で選んで貰って、総て購入。

なんとといっても、賭で勝った分があるからね。今はすることがないから、ネメシアさんの目利きを信じてあれやこれやと買っておこう。

……前に言っていたことと違う？ 気にしない。臨機応変って言葉はこういうときにあるんだよ。いいの。こういうときのためにあ

るってコトを信じなさい。ソコ。

骨董品を買い漁った後は他の店で小物を買って……と、気がついたら昼前だ。

何で買い物って時間が経つのが早いかな？ 取り敢えず、さつさと宿に戻ってソフィアと合流だ。

宿に戻ったらカウンターで支配人がにやつと笑って手を振ってきた。んゝ何か情報でも仕入れたのかな？ 念のため、確認しておく。

「……で？ 何か手に入れた？」

「大したモノじゃないんだが……」

こういう言葉を前置きするってコトは自信はあるんだろうな。

「……実はこういうモノが倉庫にあるのを思い出してね」と、カウンターのの中から出てきたのは……絵巻物？

「コレはこの地域の古文書らしい。前任の支配人が纏めたのか、好事家が色んなのを手に入れては巻物に纏め直したのを手に入れたんだか……兎に角、前任の荷物の中に在った。コレで要望には満足して貰えるかな？」

「ちよつと見せてよ」と手にとって、中を見てみると……色んな樹紙の古文書を樹綿紙に貼り付けて巻物に仕立て上げた……そんなところだな。ただ……古文書の文字が……ムーマ文明だかレムア文明だか……或いは知らない古代文明の紋様文字で……一切、読めない。「どうだね？」としたり顔で尋ねる支配人に……取り敢えず態度だけは取り繕っておこう。

「ん。確かに。んで御要望の代金は？」 何となくだけ追加料金をと言われそうだな。

「今朝の前払い料金に銀貨2枚プラス。……で、どうだね？」

やっぱり。まあ自信在りそうだし、色々と楽しめそうだから良いか。

「判ったわ」とポケットから銀貨を取り出して3枚カウンターに置

いた。

「ん？」と怪訝そうな顔を一瞬して、それから自信ありげな顔に戻ったのをアタシは見逃さない。

「言っとくけど、2枚は今後の追加情報への前払いだからね。そういうことで宜しく」

一瞬、「やられた」またいな渋面になったのを確認して、アタシはネメシアさんと部屋に引き上げた。しまったな。あんな顔をするようじゃ、追加料金無しまで叩けたかも知れない。でも、ま、いつか。情報を集めないことには先に進めないんだし。

18・情報 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

18・情報 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

部屋に戻るとソフィアの他にヴィオラさんとエアリエスさんも一緒にいた。

「ん？ どしたの？」と尋ねてみると……ヴィオラさんが頭を包帯で巻かれて後頭部を押さえて椅子にへたり込んでいる。ヴィオラさんの後頭部をソフィアとエアリエスさんが覗き込んでいた。

「隣の闘技場から剣が飛んできて……」

「頭に当たったのよ。気をつけてくださいね」

頭に当たった？ 剣が？ 大事じゃないっ！ って、慌てているのはアタシだけだ。あれ？

「大丈夫なの？」

「大丈夫。ソフィアが手当てしてくれたから、もう血も止まっているし。この包帯も止血じゃなくて痛み止め。ソフィアの浄化の残響術を掛けて貰ったヤツだから。まあ、今日の相手は手強かったし。それに飛んできたのを避けていたら……相手の剣が何処に刺さっていたやら……判らなかつたからね」

まあ、飛んできた剣の攻撃は1回だけ。相手のは何回でも襲ってくるからね。でも……

「……でも、ヴィオラさんって、どんな攻撃でも軽く避けられるモノだと思っていた」

「アリアそれは言い過ぎよ」

あつと……ソフィアが睨んでいる。確かに怪我人には言い過ぎだな。

「……ごめんなさい」素直に謝ろう。間違いは直ぐに対応するのが一番だ。

「かははは。いって。確かに油断していたね。複数攻撃にも対応出来なきゃ、寺院出身だといっても疑われてしまう。でも……」

ヴィオラさんは小首を傾げて考え始めた。

「……なんか闘技場に行くと、頭がぼーっとするんだよね。障壁を張るのも躊躇してしまっただけ……実践と訓練との違いかな？」

「そんなことはないでしょう？ ヴィオラさんだって精霊界での試練の経験が豊富じゃないですか。地の精霊界で岩人形千体相手に一人で立ち向って勝ったというのは寺院の語り種ですよ」

「……岩人形を千体を一人で？ よく判らんけど、凄いことだけは確かなんだろうな。」

「まあ起こってしまったことは仕方ないさ。ソフィア、気合い付けに1杯頂戴な」

ヴィオラさんはテーブルのコップを取ってソフィアに差し出した。

「やれやれ」という感じでソフィアはコップを手に取り、2度3度と振って……忽ちのうちにコップを霊精で満たした。

「なんだそれ？」と驚くエアリエスさん。あ、そうか。エアリエスさんの前では初めて……かな？ いや、一昨日の晚餐会で見ていたはずだけど？

「ソフィ姉えがいつもネメシアさんに飲ませている……霊精っていうのだけど……見てなかったっけ？」

「なんか飲ませていたのは判っていたけど……何処から出したんだ？」

不思議がるエアリエスさんにアタシが説明した。

「これはソフィ姉えの法力を液体化したモノ。ソフィアの法力が有り余っているから出来る……まあ汗みたいなモノかな？」

言い終わってから廻りの様子を窺うと……ヴィオラさんは笑いを堪えている。ソフィアには「何よ、それ。もう少し言い方ってモノが……」みたいな感じで軽く睨まれてしまった。ネメシアさんは「なるほどね」という感じで軽く頷いている。んで、説明した相手のエアリエスさんは……「そんなことが……あるのか？」という感じで納得していない感じた。

つまり、説明失敗っ！ もう少し言い方を考えておこう。

「そうだ。エアリエスさんの法力振動数は？」 唐突だけど場の雰囲気強制変更」

「法力振動数？」 怪訝な顔とはこういう顔だと言わんばかりに疑問符を頭に生やしたような顔をするエアリエスさんに……ちよつとアタシを軽く睨みながらソフィアがコップを渡した。

「そうですね。エアリエスさんの法力振動数と法力量を知っておきませんと……御依頼の件も巧くできないかも知れませんが……コップを両手でもって暫く瞑想していただけませんか？」

依頼の内容をハッキリと言わないのは……ネメシアさんへの配慮かな？

ともあれ、エアリエスさんはコップを手にとってソフィアに言われるままに両手で包み、ゆつたりと瞑想した。

「もう良いですよ」というソフィアの声に覗き込む一同。（当然、含むアタシ）

「……綺麗」 思わず声に出る。

「本当に綺麗な……重複正四角形だ」とヴィオラさん。

重複正四角形？ なにそれと疑問を視線に変えてソフィアを見るのはアタシとエアリエスさん。

「エアリエスさんの基本振動数は4。しかもこんなに綺麗に出るのは珍しいですね。さらに、倍数振動もこんなに……全体としては八芒星。法術も修行されたら……一角の召還術師になれますね」

「よしとくれ。アタシは剣術師だ。今更、法術の修行なんて……」

「剣術師のままだとしても……精霊の力のある程度には使えるようになりますよ。剣を振るうように……」

につこりと笑うソフィア。自分の手のコップの中の波とソフィアを困惑というか混乱というか所在なさ気というか、兎に角、複雑な顔で何度も見直すエアリエスさん。ヴィオラさんとネメシアさんは……なんかニヤけた顔で意味在りげに見ている。アタシは……ソフィアが言った意味が判らずに困惑さというか混乱さをエアリエスさんと競った顔できよろきよろするしかできない。

「ま、まあ。これでアタシの法術振動数とやらが判ったんだろ？」

コレで失敬するよ」とコップをヴィオラさんに渡し、踵を返して部屋を出ようとするエアリエスさんを……ヴィオラさんが呼び止めた。

「ちよい待ち。姉妹」「姉妹っ？ 誰と誰がだ？」

ちよつと怒ったエアリエスさんにヴィオラさんがコップをずいと差し出した。

「試合が終わって倒れたワタシを助け起こしてくれたじゃないか。因ってあの時からワタシとアンタは義姉妹。ということで、固めの杯といかないかい？」

……なんか、盗賊というか、無法者っぽくなってきたぞ。大丈夫か？ この集まり。と、エアリエスさんを見ると……なんか、苦笑いしてソフィアをちらりと見ている？ なんて？

「あのぐらいで、義姉妹とは軽いね。ま、いいさ。んじゃ、今後宜しく」とコップを取り、一口……霊精を含んだところで動作が止まってしまった。が、なんか気合いと共に呑み込んだ。

……そんなに不味いのかな？

「かはははは。んじゃ、宜しくね。義姉妹」と残った霊精を一気に飲み乾して……ヴィオラさんは盛大に声を上げた。

「くかあゝっ！ 今日是一段とキツク感じるよ。やつぱ、なんか疲れとかが溜っていたのかね。でも、これで午後は大丈夫だ」

……ソフィアの霊精って凄まじく効き目のある薬草茶の煮凝りみたいだな。

ソフィアと昼食を済ませ、（エアリエスさんは自室で取ったみただけ）午後の戦いへとヴィオラさんとエアリエスさんとソフィアの3人は連れだって出かけていった。残ったのはアタシとネメシアさん。

テーブルの上を片付けて……手に入れた古文書を広げた段階で気がついた。

「しまった……ソフィアに読んで貰っておけば良かった」

仕方がない。教わった知識で判るところだけでも読んでおこう。

18・情報 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

19・靈精と古文書 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

19・霊精と古文書 1

19・霊精と古文書

ソフィアに教わったことを書き留めていたノートを広げ、古文書の単語と格闘し、意味をまたノートに書き綴る。ついでに判らない絵文字とか書き写し。こうした方が判らなくても後々の知識となつて役立つ。……コトもあるから疎かには出来ないのさ。

「ん」 判るのはこんな所か？」

背伸びして、取り寄せた煎棘胡桃茶を一口啜る。

「渋っ」 煎りすぎだよ。これ」 このお茶は煎りすぎると時間と共に渋さが増す。まあ、疲れた頭には丁度いいかもしれない。

ふと、目を窓の方へと投げると……テーブルを挟んで窓を背景に儚い物憂げな椅子に座っている美少女」という感じで佇むネメシアさん。髪が窓からの光を程よく通して……良くできた一枚の画のようだ。

……持っているのがひね曲がった禍々しい感じの十字架のような剣じゃなければね。

ソフィアが用意してくれた骨董品のティーポットの中の霊精を十字取っ手の儀礼用深杯に注いではゆっくりと飲んでいる。……やっぱり、深窓の令嬢つてのを地でいつている感じ。

時々、霊精を指につけては……剣の柄から鞘に巻き付けた紫銀の鎖に塗っている。……のは、なんかのお呪いかな？

『ん？ 何？ どしたの？』とアタシの方に顔を向けてきよのんと小首を傾げた。

くうく可愛いつ！ 可愛すぎて年上（だったよね？ 確か）というのを忘れそうだ。

「あ、そうだ。人形達を直さなきゃ……」

巻物とかをちよつと片付けて……昼前に仕入れてきた小物……裁縫道具と小切れのフェルト……巻毛山羊のとか長毛跳兎とかの毛織

物の端布をテーブルに広げて……人形達をテーブルに上げた。

『 なんか？ 』 『 どしたの？ 』 『 〇なんかあつたん？ 』

……おやつ？』

『 〇。うおいつ！ アタシ（アタイ）（ウチ）達に、んなもんは
必要ないっ 』

「はいはい。漫才はソコまでにして……」

アタシは人形達を黙らせてから色々と調べてみると……確かにア
チラコチラにと解れやら生地が怪しくなっているのやら……古い繕
い直しの糸も直ぐに切れてしまいそうだ。

「アンタ達、随分と痛んできているじゃない。サーラなんかはいつ
破けるか判らないくらいじゃないの」

『 へへ……でも、ソフィアがいつも直してくれるから大丈夫やで 』
『 そうそう。時元修復の術であつという間に元通り 』

『 〇。ウチらはそんな時はちよつと休むんやけどな。そーいや。随分直
してもろうてないな 』

『 ……1年ぐらいだよ 』

「兎に角、アンタ達はちよいと暴れすぎ……ウエンディは大丈夫つ
ぽいから良いとして……」

アタシはウエンディをテーブルから持ち上げ、頭の上へと置いた。
『 ……ふにやあゝ 気持ちいい 』 『 あ、ずるゝ 』

「ずるゝじゃない。サーラ。アンタは全体に危ないわよ。いつも何
してんのさ？」

『 んゝ なんやろね？ 』

『 〇。サーラはいつも先制攻撃しようと構えたり、実際に突撃した
りしているからね 』

『 そういうノーラはいつも地面触ったりしているやん 』

『 そういうアエリイはよく転けたりしているな？ 』

『 ……アエリイは本体は空を飛んでいるのが普通だから、こつち
では地面を歩くのが苦手なんだよねゝ 』

「なるほどね」

大体の行動パターンが判ってきた。さて……

「んじゃ。本体の修復はソフィアの術に任せるとして……もし今、アタシがアンタ達に補強とかしたらどうなるの？」

「さあ？」

「あ、一回、サーラの背中が破れかけたんは針と糸で直してなかったか？」

「○そうそう。時元修復でも直りきれないかも知れないからって術を掛ける前に直してたな」

「……その後で術を掛けたら糸が歪んでたから直ぐに外してたよ」「ふうむ。んじゃ、今、直す必要はやっぱり無さそうだな……」

「ん？ あれ？ んじゃ、繕い直し跡のは……？ 寺院に行く前の直し？ だとすると別れた家族……お母さんとかが繕い直した跡なのかな？ ん……そうだとすると尚更、触らない方が良さそうだな。」

さて？ どうしようか？

「ま、取り敢えず、今、できることをしておきますか……」

ちくちくと端布を縫い合わせたり、寸法測ってみたり、小物の寸法も測って……

ふと……視線を感じて、目を上げるとネメシアさんが「結構、器用なのね」みたいな感じで見ている。

「へへへ。裁縫は得意なんだ。掃除とかは苦手だけどね。料理は……が得意だったからあまりしていないけど、それでも……よりは上手に……」

あれ？ アタシは誰と自分を比べているんだ？

「……って、誰と？」

疑問を声に出しては見たけど……ネメシアさんが判る訳がない。困り顔で微笑むだけだ。

「ソフィアは掃除とか洗濯は得意やで」

「時元修復の術の延長みたいなモノ……とかいってたな」

「○でも料理はな」

『……ソフィアは浄化の術を帯びているからね』
「ん？ どういうこと？ ウェンディ」

19・霊精と古文書 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

19・靈精と古文書 2 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

「……料理の時に食材も浄化しちゃうんだよ。味付けするときの調味料とかも……」

「ああ。それで味が妙なモンにできあがるんか」

「無味を通り越して、凄いことになっているような気もするけどな」

「一口で卒倒しそうになっていたこともなかったか？」

「……塩味な調味料とかのは浄化し切れないからね。甘味とかは変化しちゃうから」

「苦味とか酸味も変わるで」

「薬っぽい味に変わることが多いよな」

「……旨味とかも別な味に変わるからね。でも、体質だから仕方ないよ」

「ん？なんか凄そうだけど、浄化の術を「体質」としてもっているなら仕方ない……のかな？」

「なんか凄そうだね。ソフィ姉えの料理は……」

「一度なんか、屈強な兵士さん達を3日は寝込ませたで」

「んで、ソコを攻め込まれて……責任感じて、一人で撃退してたけどな」

「んでも、その件で寺院長さんにえらい怒られてたけどな」

「ん？なんで？」

「……基本的に寺院関係者は国同士の争いとかに介入することは禁じられてるんだって。自分が生まれた国とかは別としてね。力が強力すぎるから……それに寺院出身者同士で闘ったら被害が無駄に大きくなるし……利するのは魔王か魔王関係者だけだから……そんな理由らしいよ」

なるほど。確かにソフィアみたいの同士が闘ったら……勝敗以前に廻りが迷惑なのは間違いない。

なにせ鞭形態でもアタシの陣形態と良い勝負。つまり4段階ほどレベルが違う……というか根本的に威力が違いすぎるんだから……フルパワー×最高法術レベルで闘ったら地形とか気候レベルで影響が出そうだ。

「ま、争いごとにはなるべく関係しない方が……相手の幸せかもね」
「そうそう。ソフィアの料理も振る舞われるコトもないし……」
「味方の陣営にいたら白魔導師って料理番とかになるらしいからなあ」

「○そしたら、ソフィアが居る方が勢力削がれることになるから……闘っているモン同士で譲り合ったりして……」

「きゃははは……それ良いな」

「……良くないよ」

「○なんでや？」

「……ソフィアが聞いているから」

「え？」とアタシが振り返ると……ソフィアが額の端をヒクつかせながらも、笑顔を繕っているソフィアが立っていた。

「アンタ達っ！ 人の悪口で盛り上がらないようにっ！」

ソフィアの後ろにいるヴィオラさんも苦笑いしている。って、コトは……料理の腕の話とかは本当なんだろうな。

ソフィア達が早く戻ってきたのは……ヴィオラさんの試合が終わったから。当然、ヴィオラさんは勝ち上がり。霊精を飲んだのが効いたのかな？ ともある、無事に済んだのは良いことだね。

さて……夕食までにはまだ時間があるから、その間にソフィアに確認すべきコトを聞いておこう。

「ソフィ姉え。ちょっといい？」

ソフィアの人形達の直し方は……随分と簡単だなと改めて思う。人形を袋に入れて、時元浄化の術の宝珠……城を直すときと違ってかなり小さいのが1個だけというのは対象が小さいからだろう……

…をばいっと放って終わり。サーラがなんか目を回して出てきたけど……意識を退避させるのがちょっとだけ遅れたらしい。まあ、他のも含めてちゃんと全員無事だから良いか。

術がかけ終わった人形達を改めて見ると……布が薄くなっているのとかはちゃんと直っている。糸が怪しくなっているのは……完全じゃない。けど、それは術の所為じゃなく、ソフィアが戻りたい状態がそういう時点なのだという事なのだろう。

「……ちよっと、アタシが直してもいい？」

「え？　どうということ？」と怪訝そうな顔をしたので、制作中のモノをソフィアに見せる。

「ちよっと小物で作ってみたんだ。ノーラは土を弄るのが癖というか性分らしいから、スコップを装備。アエリイは転んだりするのが多いらしいから……前掛けというか外套着みたいなの。サーラは……なんか全体的に危なくなりやすいから……戦闘服というか、まあ外套着だね。そんなのを作ってみたんだけど……付けてもいい？」制作中なので小恥ずかしいんだけど……まあ、出来上がったなら、人形用のグッズとして……それなりの値段では売れそうならいには自信はあるけどね。って何を言っているんだ？

と、ソフィアを見たら……なんか目を潤ませている。何故に？

「ありがとう。こんなにいろんなのを創ってくれて……でも……」

改めて確認すると……繕い跡はやっぱり別れた家族……お母さんとかお姉さんが直してくれた跡なんだそう。妹さんも直してくれたりしていたらしい。

「判った。そういうことなら直した系とかは変えない。でも……危なくなっていたりするから、重ね直したりするのはいい？」

どうということ？　みたいな顔をしたので追加説明。直しの系は取らずに、更に重ねて糸で繕う。それで元の繕い糸にかかる力も減るから長持ちするはず。と説明したら……予想通りの反応が返ってきた。

「アリア。ありがとうっ！」と抱きつき＋抱きしめ「アタシは呼吸

困難（かなり長め）。

ふう。予想していたけど、ヴィオラさんが止めてくれなかったら、現実世界じゃないところになってしまいそうだった。

19・霊精と古文書 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

19・靈精と古文書 3 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

結局、ウエンディも欲しがったので、外套着みたいな戦闘服みたいなのは全員。ま、ちゃんと余裕を見て買つてあるから問題なし。んで、サーラとアエリイも小物を欲しがったので、玩具の剣とかを外套着にセットで付けておくことにした。無くならないように紐で繋げることにして……

「ウエンディ。アンタは何か要らないの？」と確認。一人だけ何も道具がないというのも変だからね。

「ワタシは要らない。水系があるから」

水系？ なにそれ？ と、聞き返す前にソフィアが自分の荷物の中からそれらしきモノを取り出した。

「水系つてコレよ。前に……とある場所で貰つたの」

受け取つてみると……なんだろ？ 実際、感触は水。でもちゃんと糸になっているし……引つ張つても切れない。針でつついてみても……全然刺さらない。

「んゝまあ、それも法力を具現化したようなモノだから……大抵のモノは刺さつたりはしないはずよ」

んむ？ 精霊の道具とか亜人類とかの宝物みたいなものなのかな？

普通の人（魔法グッズ好事家？）が見たら、金貨を大枚叩いて「売つてくれっ！」と懇願しそうなモノがあつさりと出てくるな。……

……と、アタシが冷静なのは何でだろう？ アタシも魔道具、聖法具とかのモノを売り買いする古物商になるのが将来の目標というか予定だつたりするのだから、こういうモノをみたら興奮するハズなんだが……

……ま、ソフィアと一緒にいて、こういう小物で興奮していたら心臓の予備が2、3個は必要になりそうだからね。

実際、誰も見たことがないという聖アイルコンティ又寺院出身者

が3人（うち1人は幽霊）もいて、魔王を打ち倒すという伝説の光の杖は……部屋の片隅に立てかけてあるという状況に慣れている。

はははは。アタシも随分と大人になったモノだなと……なんか表現が間違っている気もするけど放っておいてね。ソコ。気にしない。アタシが納得しているんだからそれで良いの。

兎に角だ。色々と試してみると……どうやら糸で縛ることは出来るみたいだから、ウエンディの外套着（製作予定）の背中に袋を付けて水系を格納。水系の端を糸で縛って外套着に結わえておけば無くなることもないだろう。

「……というコトで良いかな？」

「ん。一人だけ本物の魔道具というのは……」

「羨ましいというかずるいというか」

「。なんか負けた気がするというか……」

「……でも、水系を使えるのはワタシだけだよ？」

「アナタ達ね。そんなことで喧嘩しない。もう……だったら……」

人形達の喧嘩をソフィアが止めて……それぞれの人形達に装備予定の小物を「ちよつと手を加えさせてね」と手に取り……何か掌の中で術を掛けた？……みたいな感じで一瞬、掌の中で何かが光って……テーブルに小物を戻すと……何も変わってないような？……はて？

「何したの？」

「ちよつとね、コレらを霊精でコーティングしたの。これで、この小物を使って法術を使ったら私の力も相乗して……強力になるわよ。コレで良い？」

「。わ。い。ありがとう」 「ホントに現金なんだから」

喜ぶ人形達（除くウエンディ）。呆れながらも落ち着いたソフィア。それを見ていて苦笑しているヴィオラさんとネメシアさん……んで、アタシはなんだか理屈がワカラン。……のでちよつと呆けていた。

なんだ？　なんか凄く異世界っぽい感じの法術集団だな（除くア

タシ)。

陣形態という強力無差別攻撃呪文を使えるのが何を呆けているんだって？ だってレベルというか、基本的に到達している位置が違いくすぎる。幾ら高い山に登っても空の上には届かない。……そんな感じだ。

「ソフィ姉え……」 何か言おうとしたんだけど……何を言おうとしたのか自分でも判らない。

「なに？」 にっこりと笑い返してくれるけど……何を言おう？

「……あ、ウエンディがちょっと拗ねているみたいだけど……」

全然違うことを言っているな。でも、拗ねているっぽいのは確かだから……まあ、いいや。

「なあに。今度はウエンディ？ ……仕方ないわね」……とソフィアはテーブルの上の待針を手にとって……さっきと同じように術を掛けてテーブルに置いた。

「アリアに繕い直して貰ったら、この針を全員で分けて持っていないさい。効果は同じだから。ね？ 御願いね。アリア」

小首をちよつとだけ傾げ、両手を顔の前で合わせて……序でにウイंकされて御願いされてしまった。……なんか懐かしい可愛い仕草だ。って、「懐かしい」って何だ？

「ははは。そういう風に御願いされると弱いからなあ。昔から……」

「昔から」って？ 何を言っているんだ？ アタシは？

「昔からって何？」 思わず声に出してみるけど……誰も応えられない訳がない。ヴィオラさんもネメシアさんも困った感じで微笑むだけだ。

……ソフィアはちよつとだけ吃驚したような顔でアタシをじいつと見ていたけど。

んゝ なんか変な風邪にでもかかりかけているのか？ いや、きつと通常では有り得ない高等法術が日常々という空間に浸りきって思考回路が短絡暴走でもしたんだろう。

うん。きつとそうだ。

「それはそうと……」 雰囲気が袋小路に入った感じなので強制変更
「こういう古文書を手に入れたんだけど……ソフィ姉え、読める？」
……と支配人から入手した古文書をテーブルに広げ……ようと
してネメシアさんの儀礼用深杯に巻物の心木が当たって……倒して
しまった。

「あつ……ごめんなさい。……あれ？」

ネメシアさんに謝って（ネメシアさんは『気にしないで』という
感じで微笑みながら小さく手を振ってくれたのが嬉しいというより
可愛かったぞ。もちろん）、直後に疑問符を口にしたのは……深杯
から溢れた霊精が古文書にかかって……何も書いてなかった場所に
新たに何かの文字を浮かび上がらせたからだ。

その文字は……見たことがある。ムーマ文字儀礼文様だ。……い
や、ちよつと違う。

確かなのは……どっちにしてもアタシには読めないと言うことだ
けだ。

「コレは……」 古文書をじつと見つめるソフィア。いつになく真剣
な眼差しだ。

「……精霊紋様。儀礼文様の元になった紋様だわ」

「へえ……そんなモノが？ 寺院の図書にも何冊もなかったのが、
こんな所に？」……と、覗き込むヴィオラさんの笑顔が変わって……
……真剣な顔というか……吃驚する直前のような表情のまま止まっ
ている。

「……どうしました？ ヴィオラさん」 ソフィアが尋ねても……
止まったまま。ネメシアさんも気がつく古文書をじつと凝視して
いる様なんだけど……相変わらずに睫毛が長すぎて瞳は見えないん
だけど、表情は硬い……

「ソフィア。アリア。御免、コレ借りる」と、ヴィオラさんとネメ
シアさんがなんか目を合わせて頷き合って……徐に深杯に残ってい
た霊精を古文書にぶっつけた。

途端に古文書から虹色の煙が沸き立ち……部屋を虹色の光で包み……樹紙全面に特徴のある何かの文様を浮かび上がらせた。

「コレは……間違いない」

「なにがです？」

「これは失われた精霊ノギとの契約文書。聖光契約文書だよ」

「えっ！ 先の聖魔大戦直後に失われた『精霊契約文書』の一つ何ですかっ？」

なんか吃驚したままの表情で顔を見合わせる聖アイルコンティヌ寺院関係者様達。

……え〜と。話が何にも見えないんですけど。

19・霊精と古文書 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

20・精霊契約文書（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

20・精霊契約文書

20・精霊契約文書

精霊契約文書ってのは、文字通り精霊との契約を記した文書。因みに契約したのは精霊とその時々の人間界代表者。つまりは光の杖を所持していた者との契約ということらしい。

んで、精霊ノギってのはネメシアさんとヴィオラさんの共通の御先祖様。

「精霊ノギは最初、魔王側についていたんだ。その由縁は判らない。魔王に騙されていたというのが伝承だけだね」

「そして人間界側……つまりは光の杖側について……魔王と死闘を繰り広げた」

「戦いは凄まじく、魔王の眷族も人間界側も誰も手が出せなかったほどらしい」

「そして数日間もの戦いの後、自らも瀕死の状態となりながらも、魔王の四肢の一つを奪い去った。そして、人間界側の猛攻を受けて魔王はついに倒された」

「これはその時の……魔王と闘う前の契約か、聖魔大戦の後に精霊ノギが次の戦いには人間側に付くことを誓った文書」

「聖魔大戦直後に……残っていた魔王の眷族が聖光城アイルコンテイヌ寺院か、寺院に聖宝を運ぼうとしていた所かを襲い、他の精霊の契約文書と共に失われたと……」

「何にしても……こんな所に……コレが在れば……ワタシもネメシアも……」

悔しそくに説明するヴィオラさんに続きを聞くと……

最初は魔王側についていたという伝承のせいか、契約文書が無くなったのは精霊ノギ自身の意志なのでは？ と精霊界では少なからず疑われていたらしい。その影響か、ヴィオラさんの国とネメシアさんの国の間にあった精霊界と人間界を繋ぐ回廊は閉ざされてしま

った。そして、更にはネメシアさんとヴィオラさんの一族も次の聖魔大戦時にどちらにつくのかを……疑われていたと。

……だから、ネメシアさんもヴィオラさんも幼い内から寺院に入れたららしい。精霊ノギの子孫は魔王側につくことはないという意味表示として……

「精霊界ってそんなに魔王が嫌いなの？」　まあ、魔王が好きなのがいるとは思えんけど。

「精霊達は基本的に聖魔大戦には中立。人間達と契約した精霊が援軍として参加するだけさ。それだけに最初、魔王に付いていたというのが精霊ノギの意志だと……疑われているのさ。精霊が自主的に戦いに参加することが奇異に感じられているからね。さらに最初は魔王側についていたらしいということが……」

唇をかむ。本当に悔しそうだ。

「……でも、人間との……その戦いで縁とある聖者と婚姻されて子孫を残されたんですよ。一説には……精霊ノギを説得したとか、魔王の呪縛を解いたという聖者と……」

ソフィアが話の矛先を変える。実際、精霊ノギの話だけでちよつと堂々巡りしていたからね。

「そう。生まれた子供のうち、精霊に近い身形をしたのが精霊界、人間に近い身形をしたのが人間界に……それぞれに子孫を残してきたんだけど」

「それがヴィオラさんとネメシアさんの御先祖さん？」　アタシも割って入る。

「そ。聖者というのが美人らしくてね。ネメシアの方は美人ばかりの系統さ」

「ん？　ヴィオラさんだって美人系統じゃない？　違うの？」

「かははは。精霊界じゃ美人の基準が違うからね。アタシは……ハーフヒューマンって言われて……それなりかな？」

うゝむ。なんか差別っぽい言われ方だな。

「でも……そんなのがここにあるなんて……とつくに魔王の眷族に

消滅させられていたとばかり……少なくとも魔王への貢ぎ物にでもされたかと……」

「精霊契約文書を消滅した者は精霊からの怒りが……齎されると云われていますから……魔王の眷族としても消却したりは出来なかったのでは？ 実際、今ならば判りますけど……この樹紙はかなりの法力が籠められていますから……」

ソフィアがまだ悔しがるヴィオラさんを宿めつつ、古文書を手に取り、文書を繁々と見る。確かに記されている書というか文様が虹色に煌めいて……いるのはソフィアの法力の影響なのかな？

「でも今まで見えなかったというのは……魔王眷属達の呪い？」

「そうかも知れない。薄い樹紙を上貼って……この書面を見えないようにして……別の文書としていたのね……この上にあつた樹紙にはなんて書いてあつたの？」

今はすっかり消え去つた文書は……ノートに書き写していたからそれを見せる。

「この町の由縁を書いたモノね。精霊とは無関係の……『呪封印』とか『呪いの血を清めよ』って単語はあるけど」

ふうむ。精霊契約文書が樹紙の間にあるとは知らずに書いたんだろうか？

「その呪いっぽい言葉も関係ないんだよね？」

「関係なさそう。最後になんか上に書き殴つた感じね。書いた人は真つ新な樹紙……ただ単に古い樹紙だと思って書き記していたみたいね」

念のため、巻物となつていた別の樹紙の古文書にも霊精を垂らしてみただけ……何も変化しない。精霊契約文書は精霊ノギとの1枚だけみたいだ。

「まあ、他の精霊は新たに契約して……契約文書は寺院に保管されていると云うことでしたから……」

「ん。コレで前の聖魔大戦で契約して闘つた精霊達は全員、また闘ってくれることになる」

んん？ 再契約した？ だったら……

「あれ？ じゃなんで精霊ノギとも再契約しなかったの？」

アタシの問い掛けにソフィアは表情を硬くして、ネメシアさんは困ったような顔をした。なんで？

「かははは。精霊ノギは魔王の断末魔の呪いで……絶命した。というか、岩に変えられた。と云われているのさ。だから契約したくても……契約できない」

あれ？ ということなら……

「聖者との婚姻というか子孫が居たということは……聖魔大戦前に婚姻していたってコト？」

「んゝ。なんかその辺が微妙なんだよね。アタシの家にもネメシアの家にも詳しくは伝わっていないんだ」

「魔王の呪いの効果が……ゆっくりと進行していったとも考えられるし……よく判らないのよ」

寺院でそれなりにながらも前の聖魔大戦の状況は伝わっていて、それを教わっていたソフィアや当事者の末裔であるヴィオラさんにも判らないんじゃない？……第3者で普通人のアタシが判る訳ないな。

「なんか……不思議だね」 思わず零したアタシの言葉に……ソフィアやネメシアさん、ヴィオラさんも「ん？」というような顔をした。

「アタシとソフィアが出会った偶然と、この町に来る途中でヴィオラさんと出会った偶然、この町にネメシアさんが……エアリエスさんと一緒にいた偶然。そして……」

精霊契約文書を見る。微かに虹色に煌めく文と文様が神々しい雰囲気を放っている。

「……もの凄い偶然ながらもアタシがこの古文書を手に入れたコト。出来すぎだね」

「なるほどね」という感じで全員がお互いに顔を見合わせた。そして……

「でも、霊精を零したのはアタシだから……ヴィオラさん？ アタ

シに感謝してね？」

ちよつと威張つてみる。実際、そんなに威張れることではない。霊精自体はソフィアが造つたんだし。文書の意味というか価値に気づいたのはヴィオラさんとネメシアさんだ。

「かははは。そうだね。感謝します。アリア様」

ヴィオラさんに釣られてネメシアさんも飛びきりの笑顔だ。ソフィアは「そんなこと言つて威張らないでっ！」みたいな困惑顔だったけど……ヴィオラさんの笑顔に釣られて笑つてた。……ちよつと引きつっていたけどね。

でも……やっぱり偶然にしてはできすぎかな。

もし偶然じゃないとしたら……魔王の呪いから解き放たれることを望んでいる精霊ノギの意志なのかも知れない。

20・精霊契約文書（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

21・思わぬコト 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

21・思わぬコト 1

21・思わぬコト

そんなこんなで夕飯前。

精霊契約文書を含む古文書の巻物はソフィアに預けて、嚴重に結界処理して貰った。

勿論、他の文書とかの意味はソフィアの翻訳付で書き写し完了。殆どは別の遺跡のだったのは……収穫とも、無駄だったとも言える。さて、そろそろ夕食の時間かなと思っていたら、ドアをノックする音。

「はい。もう出来たの？」

支配人あたりが用意が出来たことを知らせに来たのかなと思って開けてみたら……エアリエスさんとグレイさんだ。グレイさんは細長い杖を手に……腰にも短い樹の棒を差しているのは……昨夜までにはなかったような出で立ちだな。

「あれ？ こんばんは。どしたの？」

馴れ馴れしくエアリエスさんに尋ねると……意味ありげに微笑んで後ろに隠れるようにしているグレイさんを……お尻に蹴りを入れて無理矢理に前に押し出した。

「こんばんは。……何？」

「いやあ……用と言うほどではないんですが……ちょっと調べましたモノで……何かのお役に立てるかなと……」

……と差し出した樹綿の荒巻紙。何だ？ と、手に取り開けてみると……自作らしき町の周辺の見取り図に何やら や や のマークが書き入れてある。

「これは？ マークの所に何かあるの？」

「いやあ……この通り、私も元白魔導師ですので手頃な杖になるような枝か朽木を捜して町の周りを探し歩きまして……洞窟の入り口やら石柱の倒れたのやらを見つけたのを記しておいたモノです。確

か遺跡をお探しだとお聞きしたモノですから……少しでもお役に立てるかなと……」

照れたような……奥のソフィアを怖がっているような……細い声で地図の説明をしてくれた。

「 그레이さんっ！ ありがとうございますっ！ これで明日から調査できる。

誰も知らないって言うから闘技大会が終わるまでは何も出来ないかなと思っていたところなんだ。ソフィ姉えっ！ 그레이さんが下調べしてくれたよっ！」

嬉しくてソフィアを呼んで……しまった。 그레이さんはソフィアが苦手だったんだ。

ちらりと 그레이さんの様子を横目で確認すると……慌てて逃げようとするのをエアリエスさんに襟首を捕まれて止められていた。

「 그레이さん。 アリアの手伝いをしてくれたようで…… 私からも礼を述べさせていただきます。 本当にありがとうございます」

그레이さんはソフィアの前から逃げようとしていたけど……きちんと礼をされて 그레이さんは……廊下に平伏して返答した。

「 いえ。 この白魔導師崩れにソフィア様から礼を頂くなど……恐れ多い。 このとおり差し出がましいことをして……」

平伏した 그레이さんの前にしゃがみ込んでソフィアは続けて応えた。

「 いえ。 私が何者であろうと、 貴方が過去に何をしていたのであると、 あの地図をわざわざ造って頂いたという事実は事実。 アリアの手助けであることには違いはありません。 事実に対して感謝を述べるのは白魔導師としての義務。 差し出がましいようですが感謝を受けて下さいませ」

그레이さんは……僧服のフードを深く被って……額を廊下にこすりつけるようにして……もう一度、返答した。

「 ありがとうございます。 ほんとうに……このような白魔導師崩れに……僧籍を投げ出したことで謝罪……」

「 いえ。 謝罪するのは私の方です。 貴方の身形だけで私は毛嫌いし

ていたようです。改めて申し上げます。ありがとうございます。この礼、受けて下さいますか？」

「勿体ない。勿体ない……すみません。何でも致します。致しますから……もう私に礼を述べるのは……」

訳が判らんほどに畏まる 그레이さんの言葉が切れたのは……エアリエスさんが頭を小突いたからだ。

「ええいつ。鬱陶しいっ！ ソフィアがこうして礼を述べているんだから、受けときや良いんだよっ！ ソフィア、アンタもそれまで手書きの怪しい地図1枚でそんなに丁寧に礼を言うことはないっ！以上っ！ なんか文句は？」

ん。いいな。エアリエスさん。こういう気っ風が良いところは昔から……

……って、何の話だ？ 逢ったのは2、3日前だぞ？

しかし、 그레이さんはソフィアを怖がりすぎだよな。ソフィアが 그레이さんをジト目で睨んでいたのがそんなに怖かったのかな？

「さっ！ 晩御飯の支度も出来て居るみたいだから。下に行くよ」

エアリエスさんの気っ風の前にはアタシの疑問も何処かへ飛んでいきそうだ。

食堂に行くとギザキさんとノイエが既にいた。

ん？ 頭の端というか額の端に小さな呪符を貼っている。どしたの？

「その呪符は？」と尋ねるとノイエが「仕方ないのよ」という感じで応えてくれた。

「午後の試合で相手の苦し紛れに投げた小剣がかすめて……変な軌道をしたのは確かだけど」

「ははは。ちよつと油断しただけだ。気にしてくれてありがとう。大したことはないさ」

それは何より。って、アタシが聞きたかったのは傷に何で呪符なのかということなんだけど……まあ、いいや。貼ったであろうノイ

工と貼られているギザキさんが納得しているのであれば。ノイエも白魔導師の心得はあるはずだし。治癒の効果がある呪符なんですよ。きつと。

そんなこんなでその日の晚餐はちよつとだけ微妙な雰囲気だった。ヴィオラさんとネメシアさんは上機嫌。御先祖さんの嫌疑が晴れた……というか、それぞれの過去に受け取らした理不尽な仕打ちの根源の嫌疑が晴れたんだし。極めて当然。グレイさんはまだなんか感涙に噎んでという感じ。何がそんなに心動かしているんだろ？ んで、エアリエスさんはそんなグレイさんを「鬱陶しいな。ホントに」という感じで軽くジト目で睨んでいる。ソフィアはと見れば「いい人みたいで良かったけど……完全には信用してないわよ」という感じでジト目睨みが軽い流しジト目に変わった程度で……ま、睨んでいるのではないけどね。アタシの隣のギザキさんとノイエは……御節介女房と無頼漢旦那というような夫婦会話を取り留めもなく続けている。

まとまりがないな　ま、元からたまたま一堂に会しているだけだから……こんなモノだろう。

「ところで明日はどうするの？　アリア」と徐にソフィアが尋ねてきた。

21・思わぬコト 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

21・思わぬコト 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

21・思わぬコト 2

「そりゃ地図在るんだし。手近なところから探っていくつもりだけ……」

ソフィアが言いたいのは判る。アタシのことを心配してくれているんだ。「危ないことはしないでよ」と視線が物語っている。

「地図ってなに？」とノイエが尋ねてきたので、 그레이さんが近くの地図を作ってくれたこととアタシは本来、この町には遺跡探検しに来たことを……前にも言った気がするけど、念のため改めて言う。 그레이さんが平伏したのは当然省略。ノイエには関係ないからね。

「へえ。遺跡探検ね。面白そう」

ありゃ、食い付いてきてしまった。お嬢様っぽいので……あまり連れて行きたくはないな。

崖際とか急な山道で「私、こんな所歩けない」とか尻込みしちゃうだし。

「ほう。そんなことを。ノイエもいつてみたらどうだ？ 闘技場で戦いを見ているのも飽きただろう？」

ギザキさんがそういうのは……御節介ぶりにちよつと飽きているんだろぅな。

「闘技が終わるまで待てない？ 私も付いていきたいし」とソフィア。心配性だな。ありがたいんだけど……過保護だぞ。それ。

「だって、終わるのは……まだ5、6日はかかるでしょ？ 9日だから10日間の予定なんだし」

と反論するとエアリエスさんが補強してくれた。

「そうだね。決勝に近づくに従い、試合数は減るし、闘技者にも休息を与えるから……終わるのは6日後の予定だよ」

ほらね。と、見渡せば心配顔のソフィアに「大丈夫でしょ？」と信頼顔のヴィオラさん、ネメシアさんにエアリエスさん。んゝアタシのことを知っていないはずの方々が信頼していて、知っているは

ずのソフィアが心配顔ってコトは……普段のアタシはそんなに危な
つかしいコトをしているんだらうか？

「仕方ないわね。後でお呪いするから……でも危ないことはしない
でね？」

その後。

部屋に戻ると……ソフィアがお呪いをしてくれた。

何やら呪文を唱えながら……自分の髪をかき上げ……指に絡んだ
髪の毛をくると回すと……髪の毛が一本の銀針のように……その
銀針となった髪の毛をアタシの外出着の襟首辺りに……縫いつけた？
「何したの？」

「精霊界との契約呪文。まあノーラがいるから大丈夫だと思うけど
……精霊界全般に通じる……汎用の呪文ね。これで最悪の事態はな
くなると思うけど……」

「。ほんまにソフィアは心配性なんやから」

「ノーラが余所見してたってアタシがいるから崖から落ちたって
大丈夫やのに」

「洞窟の中で寒うなってもアタイがいるし」

「……溶岩が流れていても凍らせてあげる」

頼もしいこと夥し。……ん？ だったらソフィアと出会ったとき
の溶岩の海の件は？ ……と、アタシの視線の意味を判ったみたい
で、ウエンデイが済まなさそうにいった。

「……あの時はソフィアに動かないように言われていたし……実
際、ワタシが凍らせても次の前の扉は開かなかったと思うよ」

んむ。確かに。そういう場所だったな。あそこは。

「せや。この際、アタイらと絆を結んでおこうか？」

「何、絆って？ 契約できるの？」

「。契約ってコトじゃないけど……ソフィアが今したお呪いの延長
みたいなモンや」

「加護しやすいようにする……まあ。するかどうかはアタシらの

勝手みたいになるけど、契約みたいに煩わしくはないで」

「契約って？ 煩わしいの」とアタシの疑問にヴィオラさんが応えてくれた。

「その子らの本体は精霊だからね。精霊と契約したら他の精霊とは契約できなくなるというか難しくなる。特に反対の属性の精霊との契約は完全に出来なくなるし……上位や下位の精霊との契約も破棄される。……と色々面倒な制約があるのさ」

「この子達は……精霊界でも実力者揃いだけど、一旦契約したら……精霊の望む行為をしなければならなくなるし、禁忌とされることも色々……」

ソフィアのいつになく真剣な面持ちにアタシはたじろぐ。寺院の規律をきっちり守っているソフィアが嫌がる？ ほどの煩わしさなんだろうか？

『せやから絆で十分や。それでアタイらが護つたる』

「その絆ってどうやるの？」

聞けば簡単。要はアタシの髪の毛か切った爪とかを人形達が判る場所とか念を籠められる近くに在ればいいらしいんだけど、面倒だから髪の毛を縫いつけることにしよう。

「もう遅いから、寝ましょ。髪の毛を縫いつけるのは明日の朝で間に合うでしょ？」

そだね。

21・思わぬコト 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

22・夢と思い出（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

22・夢と思い出

22・夢と思い出

その夜の夢。

寝る前にアタシの髪の毛を人形達のネックレスとして巻いておいた所為か、人形達もしっかり居た。最初は『おんや?』と不思議がつていたけど、悩むのは後回しにして一緒に遊んだ。夢の中だとアレだね。人形達というよりも精霊達という感じがするのは……それなりに表情が豊かになっているからだろうね。薄ぼんやりとシッポとか羽みたいのも見えるし。

『連れてきてくれたのね』と声に振り返るとネメシアさんだ。

それにしても精霊達とネメシアさんとアタシがそんなに背が違わないのは……夢の中ということなんだろうね。

一頻り、色んなコトをして遊んで……疲れた感じで草原にみんなで大の字に寝そべった。

(そうだ。ネメシアさんは精霊の世界にも行っていたんだよね?)

『そだよ。なに? 藪から棒に……』

(精霊界って……どんなところ?)

『別に変わったことはないわ。そうね。火の精霊界は地面が溶けかった溶岩みたいな感じ。水の精霊界……というか、ウェンディの国は氷の世界。アエリイの所は砂漠の上空の霞の上……蜃気楼って知ってる? あんな所。ノーラの所は……土と岩がゴロゴロと転げ回っている……そんな感じよ』

……なんか、何処の精霊界にも行きたくは無さそうな感じなんですけど。

(想像とは……随分違うな)

『きやははは。理想郷みたいな所とは違うわよ。そんな所は……あ、妖精界はアナタが思っている世界に近いかもね。でも、あの子達は……神界への入り口を隠しているだけだから。人間界にも精霊

界にも干渉しないわよ』

（ヴィオラさんの所は？）

『ヴィオラの？ 岩と砂と……樹の世界よ。人間界との回廊の一つだから精霊界よりも人間界に近いわね』

（ネメシアさんの所は？）

『私の所は普通よ。人間界なんだもの。……まあ、ちよつと砂漠っぽいけどね。乾燥地帯だから』

（ふうん。精霊界との回廊があつても変わらないんだね）

『そりやそうよ。「ここに精霊界への入り口があります」みたいな感じがあつたら……意味無いでしょ？ 回廊の入り口は判る人だけに判ればいいの。普通の人には判らない方がいいからね』

（そんなモノなのか）

『そんなモノ。だつて「ここに遺跡があります」みたいな感じだつたら困るでしょ。遺跡探検家としては？』

確かに。そんなんだつたら中のお宝なんて、あつというまに無くなるな。

『だから精霊界の入り口なんてのも行きたい人にだけ判ればいいのよ』

なるほどね。

『話は変わるけど……直つて良かったね』とネメシアさんは精霊達というか人形達の様子をみてノーラを抱き上げて膝枕にさせてあげ……ノーラのお腹をぽんぽんと叩いた。

『ん。ソフィアのお母さんが直したところも大丈夫ね』

（ソフィ姉えのお母さん？）

『そうよ。強盗に斬られたところ。ソフィアのお母さんが精霊魔法で繕い直したのよ』

なにそれ？ 随分と込み入った話だな……

聞けば、ソフィアが武器屋の家族の一員に迎入れられた直後に強盗に襲われたらしい。

『その時に……お父さんとお母さんとお姉さんが留守で……ソフィアが一人で店番というかまだ赤ん坊だった妹さんの子守をしていたんだって。人形を使ってあやしてね。そして誰かが帰ってきたと思ったら……店に入ってきたのは強盗だったらしいのよ』

『それで……息を潜めて隠れていたらしいんだけど……妹さんが泣き出してね。慌てて……人形を投げつけて……妹さんを抱きかかえて逃げ出したのよ。全力で……』

『強盗は投げつけられた人形達を反射的に切り刻んで……追いかけてきた。でもソフィアが逃げ出して外に出たときにお姉さんが帰ってきて……』

（どしたの？）

『……互角にやり合ったんだって。なんか既に剣を振るうと並みの大人顔負けだったらしいのよ』

あゝ　なんか剣術大会で史上最年少優勝したとか言ってたな。ソフィアのお姉さん。

『で、やり合っていた所にお母さん達も帰ってきて……強盗を一蹴。でも……』

でも？　それで一件落着じゃないの？

『人形達が切られてしまつて……お母さんが精霊魔法も使つて繕い直したんだって。判つた？　貴方達が依り代にしている人形は居なくなつたソフィアの本当のお母さんと、ソフィアを育ててくれた養母さんとの二つの思い出の品なんだからね。ぞんざいにしないでよ』

『そんなん知らなかった』と精霊達が驚いている。なんで？
（なんでアンタ達が知らないの？　付合ひ長いんでしょ？）

『だって、ソフィアは何も言ってくれへんし』

『でしょ？　ソフィアはあまり自分のことは言わないのよ。いつつも周りのことばかり。このことだって随分と時間が経ってから私に話してくれたし……私が遊んでてちょっと解れかけて直そうとしたときに、やっと話してくれた……』

なんか懐かしそうな面持ちだ。

『それで慌てて……二人で指導役に頼んで……時元修復という術を教えて貰ったの。指導役も使えなかったけど……私と二人で古文書を調べ倒して……色々試して、やっと……』

（そんなに……難しい術なの？）

『そうね。コツさえ判れば難しくはないんだけどね。だって、術の名前自体は寺院じゃ知れ渡っていたんだから。使う人は誰もいなかったけど……』

（なんで？ 使う人がいなかったの？）

『修行の妨げになるって言うことらしいけど……実際、浄化の術の変換術だから便利というか光の杖を握めるようになれば自然に使えるようになるって言われていたから……伝承する必要はないと思われていたんじゃない？』

なんか、変だ。術の名前は知っていて誰も使えないなんて……

『……懐かしいな。あの頃は修行に明け暮れて……魔王のコトなんて忘れるぐらい』

目を閉じるネメシアさんは……思い出を総て抱きしめるように胸に手を当てて……微笑んだ。

『ソフィアのように人のことまでは出来なくなったけど……私に係するコトは私がしないとね』

何のコトを言っているのか判らないけど悲しくなるぐらい……儂い感じで……微笑んでいる。

思わずアタシは……ネメシアさんをぎゅっと抱きしめた。

『どしたの？』

（本当に……本当に消えたりしないでね。約束よ。約束して）
吃驚した顔でアタシを見て……ネメシアさんにはっこりと微笑んだ。

『判った。やくそく……』

……と目が醒めた。

既に夜中。窓から月の光が差し込んでもない。

毛布の中で……アタシは何故か泣いていた。流れ出ていた涙を拭い、見上げるとソフィアの顔。すやすやと寝ている。……けど、ソフィアは色んなコトを黙って乗り越えてきたんだな。

話を聞いても流してきたけど……もし、それが総て自分に降り懸ったことだったら……

アタシは疾うの昔に……耐えきれないで……

「ん？ どしたの？」

不意にソフィアが目醒まして……アタシを見て吃驚していた。

「怖い夢でも見た？ 涙が出ているわよ」

「なんでだろ？ もの凄く懐かしい感じだ。」

「何でもない」 その時アタシは……自分でソフィアに抱きついていた。

「ん。んじゃ寝ましょ」 アタシの背中に回したソフィアの手がぽんぽんと心地よく叩く。

それから……夢を見ないで眠り込んだ。

22・夢と思い出（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

23・遺跡探検へと 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

23・遺跡探検へと 1

23・遺跡探検へと

その朝。朝食を済ませるとソフィアとヴィオラさんとエアリエスさんは闘技場へ。アタシとノイエとネメシアさんと人形達は連れだつて地図を片手に遺跡……かも知れない洞窟へと向かった。

「随分、支度に時間がかつたわね。何してたの？」

「ん。ちよつとね」

ノイエに言われて説明する。時間がかつたのは……ソフィアとエアリエスさんの髪をブラシで梳かしてあげていたから。梳かした序でにフィッシュボーンというかスコピオンテイルに編んだだけのさ。

「髪を梳かして貰うなんて……初めてかも」とかなんか嬉しそうにしていたけどあんなに長くて綺麗な濃い金髪なんだからね。少しは綺麗にすればいいのに。ま、予想通りに腰までと届きそうなロングヘアだったから……思ったよりも美人さんに仕上がったな。ちよつと悔しいぐらいに。

「ああ、そうか。なんか今日はいつもより綺麗だなと思ったらアナタの仕業だったのね」

「そうだよ。編み物とかは針仕事は得意なんだ」

ソフィアも羨ましがるぐらいに美人さんになってたな。ソフィアは寺院の戒律で化粧は禁止されているらしい。でも……ね。化粧しなくてもかなりの美人なんだから贅沢言わないのって言っただけなら嬉しそうにしていた。

やっぱり乙女だね

ソフィアもブラシかけただけで綺麗さが一段上がるぐらいなんだからちゃんと化粧したら……どうなるのかね。ヴィオラさんもエアリエスさんとソフィアの様子に羨ましそうにしていたから、帰ったらちよつとだけ……いじれないな。短い巻き髪の癖っ毛なんだし。

でもまあ、ブラシぐらいはかけてあげよう。

「ふうん。エアリエスさんとは昔から親しいの？ 髪を弄るなんて」

「いんや。この町に来てからだよ」

ま、ホントの狙いはブラシに付いた抜け毛なんだけどね。昨夜、ソフィアに言われたとおり自分の髪を人形達に縫いつけようとしたんだけど……アタシの髪ってちよつと赤銅色っぽいから色彩的にイマイチで嫌なんだよね。ネックレスのままなら直ぐに取れるから気にならないけど縫い付けるとしたらやはり気に入らない。それで、ソフィアの深い栗茶っぽい黒髪とエアリエスさんの濃ゆい金髪とで紐に編んだら……目論見通り綺麗に仕上がった。

一応、言つとくけど黙って採ったんじゃないからね。エアリエスさんに「髪の毛少し頂戴」って言ったら徐に剣で一束斬ろうとしたから慌てて止めて、ブラシをかけたのさ。ソフィアも……ブラシしかけたことがないって言ってたな。寺院の戒律をソコまで守らんでも良いだろうに。ま、兎に角、御両名の了解済み。

「でも何でそんなことを今朝になって？」

「ま、それは良いじゃない。今朝に思い付いたからだよ」

絆の話はノイエには悪いけど内緒。こういうコトって人に話すと効果が無くなるような気がするし。出来上がった髪の編み紐は縫いつける時間がなかったから、首飾りにして結んでいる。多めに編んだのをソフィアとエアリエスさんにも渡しておいた。ソフィアは手首に巻いて、エアリエスさんは髪の結び紐の上に巻いていた。二人とも嬉しそうだったな。

……迷惑そうの間違いじゃないかって？

そついう野暮は言わないのっ！

そついえばとノイエの髪型はと見れば……ロングヘアを赤と黄と青と緑の編み紐で縛り一つに纏めて右肩から前に下ろしている。素朴に可愛い纏め方だな。

「その編み紐って四力の精霊の？」と聞いてみる。

「そうよ。白魔導師だから、髪を飾っちゃいけないんだけど……まあ、紐で纏めるぐらいは許容範囲なんじゃない？　一応、精霊にも平等にしているし」

白魔導師って、本当に戒律とかで煩わしいな。

しかし、ノイエの格好って……在る意味、山に慣れているのか慣れていないのか判らない格好だ。カシミールとか前合わせの外着に幅の広いズボン……聞けば袴とかいうモノらしい……を穿いて履き物は……樹のプラットフォーム・シューズみたいな……これも聞くと高舟小町樹下駄とかいうモノらしい……を履いている。

「その格好で大丈夫？」と一応確認。

「大丈夫。森とかは慣れているわよ」と自信ありげに応える。

ふうん。んじゃ、お手並み拝見ときしょ。

山に入ると……ノイエの格好は一変した。いや、着ているモノは変わらないのだけど、紐で足首から膝にかけて縛り上げ……ロングブーツみたいになった。いや履いている下駄とか言うのは一枚の板の……聞けば山岳修行僧が使う天狗下駄というモノらしい……に履き替えて、その樹の履き物に結わえ付けた紐をそのまま足首から膝に縛り上げている。幅の広がったズボンは膝から下が細くなって、山歩きには適した格好に早変わり。上着のやたらと垂れ下がった袖も……デミ・グラブみたいのから編み付けてある紐で縛って細めの袖みたいに仕上げてしまった。

「はあ……紐でそんなに格好が変わるなんて……」

「驚いた？　城にあった古文書に書いてあったのを見ながら自分で仕立てたんだよ。『駒野威知』とか……なんか当て字ばいから意味は判らないけど……そんな書簡に書いてあった服飾よ。多少は私のアレنجジだけだね」

ふうん。針仕事はアタシと良い勝負かな。と、認めてあげよう。でも、『巫女』って言うような気がしているんだけど。元の格好は

23・遺跡探検へと 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

23・遺跡探検へと 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

23・遺跡探検へと 2

「速あ……」

呆れるぐらいにノイエは山歩きに長けている。さつさと先に行つては道を探し当て……こつちが躊躇するような崖際とか段差をすすつと進んでいく。岩蜘蛛という山歩きの術を駆使してわしゃわしゃと……

確認すれば……住んでいた城の周りの森やら山やらを一人で走り回っていたんだつてさ。

「……跳栗鼠が果物を持ってくるわけだな」山の化身といつても納得してあげよう。

「なにやってんの？ 日が暮れるわよ。そんな速度じゃ」

悪かったわね。こつちは町で暮らしている文化人なんだから。岩蜘蛛の術は……それなりにしか使えないのさ。序でだけど、ネメシアさんは……幽霊らしくふわふわと浮いて斜面や崖を何にも気にせずについてくる。在る意味、羨ましい。

「あ、あまり崖の際の石には乗らない方が良いわよ。幾ら大きくてもちよつと力をかけたぐらいで転げ落ちる事もあるから。危ないわよ」

はいはい。山歩きのプロの御高説。有り難すぎて無視したくなるわね。

……実際、危ないから従うけどさ。

そんなこんなで、探し当てた最初の洞窟は……ただの何の変哲もない洞窟。

次の場所では遺跡っぽく石柱が立って……いなくて倒れていたし、石柱自体も削り作ったモノじゃなくて自然の柱状節理でできた石柱に呪文が刻まれたモノだったけど……ノイエでも呪文の種別が判ら

ないし、浅い洞窟内部の呪紋様も遺跡とは結びつきそうにもない。ノイエと二人で恐る恐る剥がしてみたら……ちよつと光の粒が溢れたような感じはしたけど……洞窟が遺跡の入り口に一瞬で変わったっ！……なんてコトは一切無い。念のため呪紋様をノートに書き写して次の場所へと……

……ふむ。無駄足が多いな。まあ職業的に無駄足は宝物への糧なんだけどな。ちよつと落胆というか疲労の度合いが多いのは……アタシが期待しすぎている所為かな。

地図にある印の半分を調査した段階で昼になったので、一休み。

断崖絶壁上のちよつとした平らな岩の広場でお昼を広げた。（もちろんノイエ様の御指示に従い、際からはそれなりに離れた場所だ）黒蜂蜜と白チーズ、果物、焼堅瓜、パンだけの簡単なランチ。ちよつと足りないような気がするけど焼堅瓜が甘くて美味しかったから……ま、いいか。

「ふう。結局、今日は無駄足だったかあ」と嘆くアタシ。

「なんで？ 午後もあるし、地図の印だって半分はあるんじゃない？」とノイエが突っ込んできたので地図を渡して崖向こうに見下ろす町を指す。

「アレがノギの町。アタシ達が居るところはここ。チェック済みの印と未調査の場所を示す印は判るよね？」

ノイエは地図と印の位置を確認して……納得した。

「そか、町から東側は全部調査済み。残りは西側の山の中か……」

「そ。こつち側には未調査の場所は無し。戻るだけで時間がかかるから……残りは明日だね」

「なあんだ。じゃ今日は無駄だったってコトね」

「んゝ無駄足と無駄は違うわよ」と指摘するアタシをきよとのんとした顔で見る。

きよとのんって表情は世間知らずの方々の疑問符顔なんだなと改めて認識。

「確かに無駄足だったけど無駄じゃない。こっちなにも無いということは、あっちには何かあるかも知れないってコト。つまり……」
「なるほど。情報として価値があるってコトね」とノイエは地図を丸めて返す。

ちよつと違うけど。まあ、いいや。微妙な意味で言い争っても仕方ない。

「それよりさ。私、聞きたいことがあるのよ」　んゝ微妙に真剣な顔だな。

「何？　ソフィ姉えのこと？」　多分、そうなんだろうなと先回りしてみる。

「そう。やっぱり納得できないのよ。なんで旅しているの？　寺院で修行しているモノだとばかり思っていたから……」

まあ、そう思うよね。自分の姉様から何かしら聞いて居るんだろうから。

「ソフィ姉えはね……　家族を捜して居るんだよ。魔王が復活する前に……逢うために」

それからアタシは……　ソフィアのことを話した。少しずつ。

本当のお母さんと生き別れた事。武器屋さんの家族に迎えられた事。そして、一緒に育った姉妹の事。武術大会で姉さまが大人の部で、ソフィアが子供の部で優勝した事。それで王宮に招かれて……
光の杖を掴んでしまった事。その後……　家族と別れさせられた事……

「本当は……　この町にも居なかったみたいだから……　直ぐにでも旅立って次の町に行きたいんだろうけど……　白魔導師でいないとね。

出逢ったとしても家族の方に判って貰えないかも知れないから……　白魔導師としての責務をいつも果たそうとしているんだ。今だって……

……頼まれもしないのに闘技大会で傷ついた人達を治しているし……　ま、それは本来の性分なのかも知れないけど」

アタシの話にノイエは……　下を向いて黙って聞いていた。

「そう。……　そうだったの」

「そっぴやノイエの家族って何処にいるの？」と何気なく聞いてし

まった。考えも無しに……

「私の家族は……姉様しかいないわ。城のみんなは……死んでしまった。闇の眷族に襲われて……」

「え？」

23・遺跡探検へと 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

23・遺跡探検へと 3（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

23・遺跡探検へと 3

驚くしかなかった。ノイエの家族って……闇の眷族、いや魔王を崇める勢力達の手によって撒かれた毒によって死んでしまったことをアタシは黙って聞いていた。唯一生き残れたのがノイエだけ。姉のノエアさんは寺院に修行していたから難を逃れたらしいけど……「だから……信じられなかったの。闇の……魔王と闘うって人がこんな所で……修行と関係なさそうな事をしているなんて」

まあ……そうだね。ソフィアの事情を知らずに光の杖を携えた尼僧の存在だけを知っていたら……そう思うよね。

「大丈夫。修行なんてモノは何処でもできる。実際、今、誰彼と無く治療しているのも修行の一つ。自分の都合だけを考えているんだったらそんな事しないでさっさと旅立っているわよ。それをしないで……アチコチで……頼まれたら頼まれたコトを必要充分以上に応えてきた。頼まれなくてもね。それがソフィア。ソフィ姉えの性分。大丈夫。魔王が復活したって……一番に駆けつけて一撃で倒すわよ。きつと。それだけの实力があるって認められたから寺院を出て旅することを赦されているんだから」

闘技大会でのソフィアの闘いを見ているだろうから……ノイエも实力は判っているはず。

「ん。そうだね。魔王を倒す、世界を救うってコトは……みんなを救うってコトだものね」

「そ。ソフィ姉えがここにいてるってコトは魔王が復活していないって事。復活する兆しもないって事。居なくなったら……黙って居なくなったら……」

そうか。アタシは自分の言葉で……何日か前の……あの夜の自分の気持ちが判った。でも……何か違う気も……している。

「そうか。ここにいてるって事は世界がまだ平和だって事なのね」

ノイエはアタシの気持ちも知らずに……アタシが言いたかったこ

とだけは判ってくれた。

「ん？ どしたの？」

ノイエに尋ねられて……アタシは自分の戸惑いがなんなのかを考えるのを止めた。

「ん。何でもない。兎に角っ！ ソフィ姉えは歴代の光の杖の所持者の中でも史上最強っ！ ってヴィオラさんもここにいるネメシアさんも太鼓判を押してくれているし。ここにいるコトを心配しなくても良いってコトだけは確かだ……とアタシは思うよ」

実際、法術の威力とかを見ても桁外れの桁が想像以上に違うことだけは確かだ。

「ん。判った。私が自分の事だけで考えていたみたいだね」

「そりゃ仕方ないわよ。誰だって自分の事から推し量るしかないんだから……あ、そうだ。今話した事はソフィ姉えには内緒ね。約束してよ。自分の事をあまり周りに話さないんだ。最近は……」

そうだ。それは最近のコトだな。アタシに逢ったときには直ぐに話してくれたんだけど……近頃は黙って武器屋さんを捜して……黙って次の町へと旅している。

「判った。約束する。話してくれてありがとう」とノイエは飛びきりの笑顔で応えてくれた。

ん。流石はお姫様らしい雰囲気が漂うお嬢様だ。穢れを知らない少女ってこういう笑顔なのよって言わんばかりの眩しい笑顔だ。

「ありがとう」負けずに飛びっきりの笑顔で応えてみたけど……眩しさでは自分でも負けた気がしているのはきつと気のせいだろう。

「ふあゝ 良い天気だな」 昼を済ませ、横になる。

ノイエは「なにか探してくる。木の実か果物、薬草とかあるかも知れないし」と山の中へ。念のためアエリイとサーラに同行して貰ったから問題はないだろう。

ウェンディはアタシの頭のあたりで微睡んでいるし、ノーラは何か岩の周りの地面をスコップでほじくり返している。

ネメシアさんは宿にあった水筒……無論、旅人用に常備している売り物を今朝、買ったのさ……から霊精を出してゆったりと飲んでいる。

空を流れる雲がゆっくりと駆けっこしているような初夏間近らしい天気だ。

「しかし……なんか気になるなあ」

もう一度、地図を出して空を背景に眺める。

「ここが石柱。ここは何も無し……」と指でなぞっていく。……と

「あれ？ これって……」

起き上がって……もう一度なぞる。間違いない。意味不明な呪紋がある石柱の洞窟を繋げると……

「七芒星？ いや、封印呪紋様？」町の反対側は調べてないけど、こつち側の洞窟と町の中心部の位置関係は封印呪紋様の半分に見える。

「町の中心？ ！ ということはアレは……」

脳裏に浮かぶ闘技場にある石柱。よく判らない呪紋様がある石柱が……封印呪紋様の中心だ。

崖際に行き、町を見る。

「あれ？ あれは……」町の南側の通りの終わりの広間の下。崖の中腹に窪みが見える。

「アレ……洞窟かな？ ネメシアさん。ネメシアさん？」

問い掛けたネメシアさんは……アタシが指さす方を見ずにアタシを見つめていた。

……悲しげな顔で微笑んでいた。そして唇は「やっぱり判ったのね」と……

アタシはその顔の意味も言葉の意味も判らず……ちょっとたじろいて後ろに一步……と、足が空を踏んで……

「あれ？ なんで？ 此処には地面があつたはず……」と思う間もなく……アタシは崖から下へと……落ちていく。吃驚したネメシアさんを崖上に残して……

落ちながら……「ああ。大怪我するな」と何故か冷静だった。
「いや……大怪我で済めばいいほうだな」とも……
でも何故か……ソフィアとエアリエスさんの顔が浮かんだ。
そして慌てて……誰かの名を叫んでいた……

23・遺跡探検へと 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

24・遺跡への……（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

24・遺跡への……

24・遺跡への……

叫んだ後で……何故か冷静に戻った。

アタシに今、できること。それは……足掻くことだ。藻掻くことだ。今、できることを全部してやるっ！

身体の姿勢を入れ替えて背中から落ちるのを真っ正面に変えた。頭の先に地面が見える。迫る地面を睨み付けて……アタシは術を放った。爆空陣。純粹な風の術の陣形態。圧風が落下速度を落とすはずだ。ほんの少しだけでも……

けど……術は効かなかった。いや、発動しなかった。「なんでよおおおおおっ！」

叫び声が地面に反射してアタシの耳に届いたとき……視界の隅に影が……しかも3つ？

直後に……地面が爆発して……視界は真っ暗になった。

目を開けると……見覚えのある姿があった。

「グレ……イさ……ん？ げほっ……げふっ」

気持ち悪い。やっぱり何処か打ったようだ。起きあがれない。

「大丈夫。衝撃が大きすぎたようですが、大した怪我はありません。暫く横になられていたら、楽になりますよ」

たぶん……あの影の一つは 그레이さんだ。ということは……朝からずつと後ろを付いていたんだな。見守るために。そしてアタシが落ちると同時に崖から飛び降りて……助けてくれたんだな。

ふと、見れば…… 그레이さんの額から一筋の……紫色っぽい血が流れ落ちている。

「ありがと。 그레이さん、怪我したの？ 血が出てるよ」

「あ……いやあ。私の術とノーラさんとウエンディさんの術がぶつかってしまって……最弱の私の術が弾かれたという……まあ、私が

未熟者という証ですよ。気になされずに」

「そか。ノーラとウエンディも助けてくれたんだ。ちょっとだけ目を動かすと……頭の横で心配そうに見ているノーラとウエンディもいた。そしてその後ろにネメシアさんも。」

「ありがとね。どじったアタシを助けてくれて……」

『。気にせんと。もう少し巧く助けられたんに。慌ててしもうて……』

『……大丈夫。少しだけ休んだら歩けるようになるよ』

空の青さが染みるなあ……心の中に。

「そういえば…… 그레이さん。教えてくれる？」

「身体はまだ動かない。でも頭は動く。何処か怪我したのかを……不安をかき消そうとアタシはどうでも良いようなことを 그레이さんに尋ねた。」

「アタシね……術を放ったんだよ。風の術。なんでか発動しなかったんだ。……何故かな？」

「多分、慌てて呪文でも間違えたのかも知れない。でも……確かに放ったんだ。」

「それは……放ったのは風の術ですよな？」

「 그레이さんは……地面の砂を――& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みして……アタシに見せてくれた。磁結晶か霊結晶の粉かな？　なんかキラと虹色に輝いている。」

「この砂は……霊結晶が砕けてできた砂。風の術が発動できなかったという事は捜している遺跡は土の精霊の縁の遺跡……精霊神殿かもしれない。コレが古の神殿の石柱などが砕けてできた砂だとすれば……風の術は無効化されますね」

「そうか……土の精霊の……神殿かあ。じゃ相剋の風の精霊の術は……効かないね。」

「なんだ……だったら……土爆陣にしとけばよかった」

「だめだな。その術じゃアタシの身体へのダメージが大きすぎる。」

「ははは……そんな強力な術は使わないでください。私まで吹き飛ばされてしまいますから」

グレイさんって良い人だな。どうでも良い愚痴を冗談にしてくれる。ギザキさんが信用するわけだ。

「それにしても……」 ん？ 何か真剣な面持ちだな……

「陣形態なんて…… 凄い術を知っておられるんですね。感心しました」

「ん？ んゝ強くなりたかったからね。小さくても手軽に強くなるには剣術よりも魔法術の方が手っ取り早いからね。店というか家にあった古い魔法術の本を読み倒したんだ」

「なるほど。古魔術ですか。ならば強力な分、精霊界の力を多めに使いますからね。精霊の機嫌を損なわないようにしませんと……」

「ふゝん。そうなんだ」

やっぱり、グレイさんって白魔導師としてもかなりのレベルだったんだろうな。話し方に深みがない。

「しかし…… 何故にそこまで憶えられたので？ 大抵は魔法術呪文は知って唱えられたとしても発動するところまでは到達しませんのに……」

「強くなりたかった。それだけだよ。そうしたら…… 襲われても…… に迷惑かけずに……」

「…… 誰にです？」

あれ？ 誰にだ？ どっちかというと魔法術を憶えた所為で家族には迷惑かけていたような気が…… それなりにというか、かなりするけど……

応えられないアタシを気遣ってか…… グレイさんは話を変えた。

「しかし…… 貴女の調査能力には驚きました。半日で対象箇所を半分を踏査するのですから」

「ふふん。遺跡調査は本職ですからね。お任せあれ…… あれ？ ノイエだ」

崖の上にノイエの姿が見える。何か叫んでいるけど…… 聞こえなくても言っていることは判る。

やっとこさ動くようになった左手で手を振る。「大丈夫だよ」っ

て言っても聞こえそうにもないから……

ふと……アタシの目の前に小さな光の珠が上空から現れて……ふつと消えた。

「おや？ ソフィア様とエアリエスさんも来られたようですね」

視線を町の方角へと変えると……崖の上にソフィア達の姿が見える。今のは……ソフィアの探索用ウィスプだな。アタシを捜してくれたんだ。きつと……

二人とも息を切らして……髪が乱れている。元気になったらまた梳かしてあげよう。

「では……このままソフィア様の所へお届けいたしましょう。ノーラさん、ウエンディさん、ネメシアさん。アリアさんについていてももらいませんか？」

と、アタシを抱き起こすと……ノーラとウエンディをアタシの上に乗せ、ネメシアさんに近付き……グレイさんは何やら呪文を唱えた。

途端に……アタシ達の身体を虹色の大きな球体が包み……空中にふわりと浮いた。

「では……私はノイエさんと一緒に帰りますから」

虹色の球体は……ゆつくりと上昇して……ソフィアの方へと運ばれていく。

グレイさんとは見れば……崖をすたすたと歩いて登っていく。垂直な崖をだよ？ あれは岩蜘蛛の術なんだろうけど……あそこまで使いこなす人は初めて見たような。

と、ネメシアさんが真剣な面持ちになっている？ 首を動かすと……崖の中腹に洞窟。そして洞窟の両側に……石柱のリレーフ……の刻みかけ？ 洞窟の奥深くまでは古い呪紋様が刻まれている。石柱のリレーフとして刻まれた呪紋様……それが記憶にある闘技場の石柱の呪紋様と結びつき……不意にそれぞれの呪紋様の意味が理解できた。一瞬に。

（そうか……『幻は古の……』）

アタシの中で何かが一つの糸になって繋がった。

24・遺跡への……（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

25・襲撃 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

25・襲撃 1

25・襲撃

ソフィアに抱きかかえられて宿屋へ。

宿に入る前にちらつと見た闘技場は……なにやら妖しい雰囲気。ソフィアが怪我人を治さなかったりしたのが……影響しているのかな？ というよりもアタシが怪我人となったせいかも知れないけど……ともあれ、診て貰ったら全身打撲で、結構、酷いらしい。でも、ソフィアの治癒の術は確かだ。細胞というか筋肉が治っていく感じって……結構心地よい。でも懈くて動かしなくなるのは……浄化の術が混じっているからなんだろうな。ソフィアは浄化の術が基本魔法だからどの術を使っても浄化の術の効果がはいってくるんだから仕方ない。

ソフィアとエアリエスさんが何で直ぐに来たのかを聞くと……アタシが作って渡した髪の新が切れたらしい。それで二人とも胸騒ぎして……探しに来てくれた。ということはアタシが作ったお呪いの品でも効力はあるんだねって惚けてみたら「ははは。だったら、さつさと元気になって作り直しておくれ」だってさ。エアリエスさんには敵わないな。ソフィアは「そんなこと言ったら誰も助けに来なくなるわよ」って怒ってたけど。真面目だな。真面目さでソフィアを上回る人はいないだろうな。

ヴィオラさんが試合を終えて戻ってきて、念のためアタシを診てくれた。

「んーソフィアもワタシも術は過剰になりやすいんだけど……巧く抑えたね」って……突っ込んで良いのか悩むぞ。その言い回し。

「もう少し良くなったら、ワタシが細かく直してあげるよ。コレで」と長い指の先から……鋭い爪がにょんと飛び出した。聞けば……爪で経絡孔とかという箇所を刺激して治すらしい。「ワタシがまともに術をかけたら大抵は筋肉が吹き飛んだりするからね。ワタシの

治療の仕方はコレなのさ」って……怪我人に怖いことを言わないように。って、ソフィアとエアリエスさんとネメシアさんに突っ込まれていた。

程なくしてノイエが戻ってきて……帰り道で薬草を摘んできてくれていた。

「アンタね。遺跡探検家が遺跡散策中に怪我するなんて看板倒れもいいトコね。しっかり治しなさいっ！」って……泣きながら怒っていた。ははは。面目ない。「ありがとう」って素直に謝ったら「じや薬草煮出してくるから覚悟しなさい。特別に苦く仕立ててあげるから」だって。ギザキさんも大変だな。ノイエが婚約者じゃ。暫くしてからギザキさんも戻ってきて見舞ってくれた。「大丈夫か？ まあ、白魔導師がこれだけ揃っていれば大丈夫か。ノイエの薬草茶？ アレは苦いぞ」覚悟しといってくれ」だってさ。似たもの夫婦（予定）だな。

しかし……怪我してこれだけ見舞ってくれるなんて……人生初めてかも。

なんか嬉しい。

ソフィアもエアリエスさんもずっと横にいてくれる。ほんと、嬉しくて……涙が出てくる。

今までは……一人で旅して……風邪を引きかけても、気合いで治していたけど……護ってくれる人がいるのって……ほんと、嬉しい。一人じゃないってコトだけで嬉しいんだね。

結局、なんだかんだでみんながアタシ達の部屋で夕食。狭いから立食パーティみたいになっている。偶でコソコソしているグレイさんをエアリエスさんが「アンタ。こんな時に隠れてどうすんのさ。アリアを助けたんだろ？ ちつとは威張って前に出たらどうなんだいっ」って足蹴にして突っ込んでいた。

なんか良いコンビだ。命の恩人を足蹴にするなんて、仲が悪くなければできないコトだろう。ソフィアはそんな様子をジト目で見て

いたけど、睨むほどじゃなくなっているのは…… 그레이さんの人柄が判ってきている所為だろう。

そうそう。ノイエの薬草茶は飛び切り苦かった。「良くなるまで作るからね」って言うてたけど…… 飲みたくないから全力で回復するしかないな。

…… ひょっとして、そういう方向で効力を発揮しているのかな？

そんな感じで結構、夜遅くまでみんなで騒いでしまった。

ふと気づくと…… 窓の外が騒がしい。見れば濃霧が北からの風に乘って流れ来ていた。黒に灰色を混ぜたような霧が嵐のように吹き荒んでいる。

「珍しいな。この辺りで霧なんて」とエアリエスさんが呟く。

そだね。この辺りは乾燥地帯のハズ。水っけは朝夕に露が降りてくるぐらい。

「さて、そろそろお暇するか」とギザキさんの声で窓の外を睨んでいたノイエ共々、三々五々とみんなは部屋に帰っていったけど…… エアリエスさんが最後に残って「元気になっても大会が終わるまでは探検には行かないでくれ。アタシも同行するから」って手を握ってくれた。

なんか嬉しい。心配してくれる人がソフィアの他にもう一人できた。

アタシは黙って頷いて…… 布団を被って涙を見せるのはやめておいた。

その夜。

夢の中でネメシアさんを待っていた。

人形達は…… 何処かにいるのかも知れないけど姿は見えない。多分、遠慮しているんだろうな。草原の端の方が金色に輝き始めて…… その光の中からネメシアさんが顕れた。なんか…… 神様みたいだな。

『待っていたのね』

（そうだよ。確認したいことがあったから）

『多分……貴女の想像通りよ。つまり……』

（それはいいからっ！ 聞きたかったのは……どうして黙っていたの？）

『……私は近いうちに居なくなる。だから……できることを……』

（違うっ！ 一人ですることなんかじゃない。遺跡を復活するなんてっ！ 精霊への呪いなんて……アタシは確かに何にもできないけど……ソフィアだったら直せるよ。きつと……）

『それじゃダメなのよ。この遺跡は……末裔である私が直さないと……精霊の……』

不意に目が醒めた。誰かがドアを叩いている。いや、外で何者かが宿の壁を叩いている。

「ギザキだ。早く外に出る準備をっ！ 囲まれているっ！ ノイエの結界呪だけでは持ちそうにもないっ！」

何事と見渡せば……ネメシアさんが居る。夜なのに珍しい。ソフィアもヴィオラさんも旅装のまま寝ていたから直ぐにでも出ることができる。アタシも中着で寝ていたから大丈夫。ささっと支度して荷物を担ぎ、ソフィアの肩を借りて下に降りると……エアリエスさんとギザキさんは完全武装。 그레이さんは……元々荷物が少ないのか例の呪紋様の箱と杖を持って玄関の扉を睨んでいる。ノイエはなんかの呪符を手に持って構えている。

やっぱり全員、旅慣れている。昨夜の霧の様子で……何かありそうだと準備していたんだな。

「では……私が正面のを何とかしますから、皆さんはその後で……」と 그레이さんが2階へと上っていった。

ソフィアはまだちゃんと歩けないアタシを気にしていたけどヴィオラさんが「大丈夫。ワタシに任せとけ」と片腕でひよいと抱き上げた。ネメシアさんも剣を抱きしめてヴィオラさんの背中にしがみ

つく。やはり、こういう時には体格が物をいうね。

程なくして……窓から外に出た 그레이さんが襲撃していた何者か達を一蹴したらしく、悲鳴と呻き声が響き渡った。

「今だっ！ 行くぞっ！」 ギザキさんが玄関を叩き壊して外に出る。外に出て判ったけど……襲ってきているのは……町の人達だった。

25・襲撃 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

25・襲撃 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

宿を出て辺りを見渡す。 그레이さんが作った敵のいない空間に無事に出た。敵は自分の意志が無くなって誰かに操られている様な感じで…… ゆっくりとアタシ達を取り囲もうとしている。通りの前後は密集していてどちらにも進めそうにもない。そして…… 通りの先、闘技場の辺りは…… 黒い霧が渦を巻いている。

「ソフィ姉え。北の方に障壁、張ってっ！ エアリエスさん、ギザキさん、 그레이さん、南の方へっ！ この先の広場まで移動するっ！ ネメシアさん、ノイエ、気をつけてっ！」

なんでだろう？

アタシが指示出している。でもアタシの指示を待っていたかのように全員が動き出した。

ソフィアが張った障壁は強力。だけど障壁を張っている間はソフィアはその場を動くことはできない。それでも一方からの攻撃を全て防ぐことができる。

それに敵といえども元は町の人だ。何かに操られているだけ。ソフィアやヴィオラさんは気絶させることはできても…… 殺めることはできない。それはエアリエスさんもギザキさんも 그레이さんも同じようで、殴り蹴り散らすだけ。ノイエがギザキさん達が散らした人達の額に呪符を貼り付けて動けなくするのは…… 敵の数を減らすということでは有効…… じゃない。直ぐに別の敵に剥がされて復帰してくる。

広場まで…… ヴィオラさんに抱えられて移動していたアタシは声を出した。

「広場の先に行かないでっ！ 半分ぐらいは幻だからっ！」

半分っていうのは適当だけど…… 幻であろうコトは確信している。そして…… 全員がアタシの言葉に驚いている。とは言え、今は「何故そんなことを？」と問う時では無いことも全員が判っている。

「ヴィオラさん。広場の前に障壁張ってっ！ ソフィ姉えが帰ってくるのを待つっ！」

素早く、ヴィオラさんが広場と通りの境に障壁を張った。流石は寺院出身者だ。作った障壁は巨大で敵は誰も障壁を越えては来られない。程なくして……敵の群れの中から何かが光り……光りは上空へと飛び上がった。ソフィアだ。敵を浄化の術らしい閃光で惑わして上空へ飛び……そしてそのまま飛んでアタシ達の上へと……

「ヴィオラさん。障壁を一瞬だけ解いてっ！ みんな、障壁が無くなった時に気をつけて」

と、 그레이さんが障壁の間際で何かの術を準備している。振り返り、ヴィオラさんに目で合図すると……ヴィオラさんが障壁を解いた直後に 그레이さんの手が地面を叩き……術が発動した。……後で聞いたら地閃雷とかいう土系の稲妻の術。地面を閃光が走り回り、敵達は一瞬だけ痺れて動けなくなっていた。……アタシ達もちよつと痺れて動けなかったけど、襲われなかったから……まあいいや。その隙にソフィアが合流。直後に痺れているヴィオラさんの代わりに障壁を張った。

これで全員が揃った。さあこれからだ。……と、その前に 그레이さんがエアリエスさんに殴られていた。

「もうちつと術の種類を選べっ」って。仕方ないよ。緊急時なんだから。

「さあ……これからどうするの？」ってノイエが尋ねてきた。「何の考え無しに指示してないよね？」と言いたげだ。勿論、考えているわよ。兎に角、いまはソフィアの完全防御結界障壁の中で世界一安全なんだから慌てない。

「大丈夫。先ずは敵を……」

通りの先を睨む。町の中心にある闘技場。その真ん中に斜めに立っている呪紋様の石柱。そして黒い霧が渦巻いているのは……間違いない石柱の上にある灰色の水晶。魔石に間違いない。誰かは知らないけど……この町に配された封印呪紋様の中心。

「ソフィ姉え。あの石柱の上にある水晶……判る？ アレを浄化の術で打ち砕いて。それで……」

ソフィアはアタシの言いたいことが判ったみたいで、にっこりと笑った。

うん。ソフィアの敵なんてこの世には居ない。魔王だって片手間で倒すだろう。

「はあああああつ！」

ソフィアの気合いと共に両手の間に作られた虹色の法力宝珠が小さく凝縮されていく。片手に宝珠を持ちながらも片手で指を伸ばし髪をかき上げて……一本の髪を核にして霊精が固まり銀針……いや、白銀の矢となった霊精に虹色の宝珠が溶け込み……虹色の矢となった。浄化の術の化身となった矢を杖にあてがうと同時に杖の両端からのびる霊精の弦。いまや強弓となった杖を引き絞り……念のために言つとくけど杖は撓ってはいないよ……虹色の矢を放つ。

矢は……障壁を通り抜け……敵達の上空を音を立てて飛び行き……石柱の灰色の魔石に命中。脆い音と共に虹色の光りが旋風となつて……町を覆った。

アタシ達も眩しくて目を閉じていたけど……ソフィアの「もう大丈夫よ」という声に促されて目を開けて確認する。

敵は……町の人達はぐったりとして地に伏せ倒れている。

終わった？

違う。

これから始めるんだ。

25・襲撃 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

26 遺跡の中へ 1 (前書き)

ソフィアとアリアの仲間達

26・遺跡の中へ 1

26・遺跡の中へ

と、その時。

後ろで……岩が軋む音が響き渡った。ソフィアが素早く明灯の術で作った輝く珠を崖の上に放つ。光りに照らされて様子がわかる。崖下の砂がまるで意志を持っているかのように集まり、岩となり……或いは砂のまま崖を這い上がって岩と固まり……岩の固まりが集まり岩塊となつて崖に張り付いていく。

時が戻っていくかの様に……

「これは？」

「何が起こっているの？」

ギザキさんとノイエが呟く。

「呪いが解かれたのか？」

エアリエスさんが意図せずに正解を呟く。ソフィアとヴィオラさんは何が起こっているのか判っているようで黙って状況を眺めている。ネメシアさんは……『やっぱりソフィアには敵わないな』という感じで……ソフィアを寂しげに見ている？

数息の間に……崖下の砂は総て元の姿へと戻り……小さな広場はかなり広めの岩の広場となった。

そして端には二つの大岩。

岩の間には……刻みつけられた階段ができている。

「さあ……行きましょう。仕上げが待っている」

アタシの言葉に……全員が先へと進んだ。

先に進むソフィアが岩の階段を杖で突いて確かめながら進む。

階段は崖に沿って進み、東から西へと回り込んで……最初の大岩の下あたりで洞窟の入り口に辿り着いた。改めて周りを見渡せば……周囲の岩壁にも石柱のリレーフが刻まれているのが二つ月の月明

かりと明灯の珠の光りに浮かび上がって……荘厳な遺跡であることを物語っている。

「こんな……遺跡が？」

「こんな所に？」

「古の遺跡とは……コレか」

疑問を口にするのはギザキさんとノイエとエアリスさん。

他の人達……寺院関係者は遺跡がなんなのかは既に気がついてるようだ。アタシだって……ソフィアと出会った時の精霊の力を具現化した遺跡の一件が無かったら驚きまくっていただろう。

洞窟の入り口の両脇には石柱のリレーフ。

リレーフに刻まれている呪紋様は……絵地図に書かれていた古文字と同じだ。

ならば……順序は判っている。

「ネメシアさん。……先導してくれる？」

アタシの言葉にネメシアさんとはびつきの笑顔で応えてくれた。やっぱり、末裔の方に役目は譲らないとね。

ん？ まだ判らない？

んじゃ黙ってみてなさい。

洞窟から入って……程なくして小さな部屋っぽい場所に出た。部屋の前には洞窟が続いているけど……その先に何があるのかも判っているけど、今すべきなのは前の洞窟へと進むコトじゃない。部屋の真ん中に飛び出た腰までの高さの石柱に刻まれた文様は……精霊文書で見たヤツだ。まだ読めないけど、意味は判っている。ネメシアさんが手に持つ剣を石柱の上に置く。と、前と左右の岩壁が砂が崩れるかのように落ちて……洞窟への口が開いた。洞窟の上には何かの呪紋様。これも読めないけど、意味は判っている。

「最初は……新しき光へ……東だよな？」

アタシの言葉にネメシアさんはっこりと笑って応えた。東の方、つまりは右へと進む。やがて広めの場所。そして壁には……石刀を

振り翳した姿の石像が並んでいる。

「最初の……試練の間だね」

石の床に刻まれたムーマ文字。単語しかわからないけど意味を繋げれば……と、一步踏み出した瞬間に石像達が動き出したっ！

瞬後にエアリエスさん達が応戦した。

「気をつけてっ！ 胸とかの七芒星を打ち抜けば動きは止まるっ！」

床の大文字は『技』。続く文様が『印を打つ』とある。石象たちの動きは素早く……直ぐには七芒星を打たせてはくれない。

でも、時間の問題だった。

エアリエスさんとソフィアが直ぐに息を合わせて、二人で応戦するようにになると簡単に打ち抜いていく。七芒星を打ち抜かれた戦士は砂に変わって……散っていく。 그레이さんとギザキさんも息を合わせて……何処かの戦場で組んでいたのだろう……瞬く間に総ての戦士を砂に変えていく。 ヴィオラさんはちよつと手間取っていたけど……何か意地で戦士に頭突きを喰らわせて額の七芒星を打ち抜き……最後の一体を砂に変えた。

「ふう。こんなのが続くのかい？」

ヴィオラさんの問いに黙って頷くネメシアさん。

この二人は……本当に姉妹のようだな。

26・遺跡の中へ 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

26・遺跡の中へ 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

26・遺跡の中へ 2

次の間は……直ぐにあった。

手前の床に刻まれた大文字は『力』。

一歩進むと……床一面の砂が固まり……巨大な猛獣……虎のような獅子のような……兎に角、猫系の猛獣の姿になった。

「ん。じゃ、此処はワタシだけで……」

ずっと前に出たヴィオラさんが人化の魔石を外してアタシに預けて服をささつと脱ぎ……直後に相手よりはちよつとだけ小さな猛獣へと姿を変えた。

出逢ったときは『猫』っぽかったけど、今の姿は……まさしく魔獣。

いや精霊獣。

牙も鋭く、爪も鋭く長い。だけど爪も牙も相手が砂の身体で役に立たない。通り抜けるだけだ。

「ヴィオラさんっ！ 七芒星っ！ 7箇所七芒星を咬み抜いて……」

……咬み伏せてっ！

床の古文様には『咬み伏せよ』とある。

つまりは相手の身体に幾つかある七芒星だけは咬み付くことができる……ハズ。

すかさずヴィオラさんは咬んで相手の身体を背中から床に叩きつける。

最後は喉の七芒星。

咬み伏せると……猛獣は砂に変わって消えていった。

「なんだ。大したことはなかったね」

って人化の魔石を付けてあげて戻ったときのヴィオラさんの言葉

……は兎も角っ！

早く服を着てくれないとギザキさんがノイエに首を曲げられて呼吸困難に成りつつあるんですけどっ！

グレイさんはさつさと後ろを向いて……エアリエスさんのギロ目睨みをさつさと避けていた。

先に進むと……元の場所。最初の部屋に戻った。

皆は不思議がつていたけど、アタシとネメシアさんには既知だ。

『古き光りより』だから西から戻るわけだな。……どういつ理屈からくりというか機関からくりなのかは知らないけど。

今度は北へと進む。

南へ行ったら出口というか元に戻るからね。

次の間は……やはり砂の床。

一歩進むと……砂が数体の女性？ の姿となり……手に持つ杖でアタシ達を押し戻す。

ギザキさんとエアリエスさんが瞬後に対応していたけど……殴つても剣で斬りつけても相手は元の姿に戻る。

七芒星は……額というか眉間にあるけど打ち抜くだけじゃダメだ。「みんな、下がって。ココはアタシの出番」

アタシの声にエアリエスさん達は後ろに下がる。

相手は追ってこずに……部屋の真ん中あたりで佇んでいる。

部屋の手前の床に刻まれた大文字は『術』。

ソフィアやヴィオラさんのほうが法術としては遙か上の实力だけど此処はアタシじゃなきゃダメなんだ。

何故ならば『術』の文字の下に小さく書かれてある単語は『攻撃』。

攻撃呪文は黒魔術。つまりはアタシの出番だ。

見てらっしゃい……と力んだらちよつとだけ眩暈がして……床にへたり込んでしまった。

うう。か弱い乙女だなあ。アタシは。

ふと、視界に筒が差し出された。見れば……水筒。

ネメシアさんが『しっかりね』みたいな感じで差し出している。えーと、この中は……確か霊精？

ふむ。飲めということならば飲んでやろうじゃない。

法力の源なんだし。虹色に煌めく液体を一気に飲み乾した。つて、飲んで……後悔した。ちょっとだけ。

何というか……舌先が痺れてその痺れが全身を駆けめぐって、脳天に抜けていく感じ。

きつい炭酸水を全身の毛が逆毛立つぐらいの稲妻仕立てにした……そんな感じた。

こんなのよく飲んでいるな……とはいえ、法力的には力が漲ってきているような……んむ。何はともあれやってやろうじゃないっ！ふうと一つ深呼吸をして有りつ丈の力を込めて術を放った。

「岩硬鋭牙陣っ！」

地面から無数の硬い岩の牙が天井に届かんばかりに顕れて砂人形達を呑み込み……砂埃に包まれた。

やはりこの場合は土系の呪文だろうね。

……と、自己満足に浸っていたら、かくんと膝が抜けた。うう。やはり、この集まりの中ではアタシが最弱だな。

砂埃が収まって……見れば、砂人形の女性達が何事もなく佇んでいる。

ありや？ 失敗？

とちよつとだけ目を丸くしていたら……先頭の砂人形の方が小さく拍手？ しているような？ で、程なく全員が深々と会釈して、アタシ達を「どうぞ」と言わんばかりに部屋の奥へと導くように脇へと並び立った。

ふふん。どんなモノよ。

と威張りたかったけど、床にへたり込んだまま。

ソフィアに起こされて……「お疲れさま」とヴィオラさんが抱き上げて奥へと進んだ。

奥は……広いホール。

そしてホールの壁一面に今となつては見慣れた特徴的な呪紋様。

精霊ノギの精霊契約文書にあった象徴文様。
その呪紋様の中にあるのは……巨大な石像だった。

26・遺跡の中へ 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

27・精霊への 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

27・精霊への 1

27・精霊への

石像は地に伏せ付けられながらも何かを睨んで起き上がろうとしているような姿のまま固まったような姿。ただ……異様なのは石像に深々と突き刺さった石の槍？ 遺跡の天井を突き破って、石像の首から左胸に向かって石柱のような槍が深々と突き刺さっている。そして突き刺さっている辺りが黒く変色しているのは……呪いの力の所為だろう。

「こ、これは……」

ギザキさんが驚く。ノイエも声を出せずに驚いている。二人には何か似た様なことでもあったのかな？ 「こんな所でも……」とか呟いている。ヴィオラさんも少なからず驚いていたようだけど、ネメシアさんとアタシとグレイさんは……予想していたことだ。

町の周りの遺跡跡。アレはこの石槍を封じるための遺跡。若しくはこの遺跡を防御するための遺跡。それらを破壊して石の槍を石像に突き刺した。

誰が？ 決まっている。石像が顕している精霊。精霊ノギを次の聖魔大戦に参加させないが為の封印呪。つまりは精霊ノギの末裔であるヴィオラさんとネメシアさんを敵とする者。

闇の勢力だ。

ソフィアは黙ってみていたけど……ぎゅっと握った拳が震えている。エアリエスさんは……静かに眺めていたけど、少なからず怒っているようだ。

「悪戯にも程がある。神殿を戯れに壊すなんて」と呟いているし。そうだね。どう見てもこの遺跡は精霊を祀る神殿遺跡。信仰の対象である石像を壊すなんて聖魔大戦を別にしても悪意に決まっている。

「つまり……あの石の槍は……？ あの魔水晶の？ 柱？」

ノイエが誰と無しに問う。

「そう。上の……町の中央にある闘技場の石柱。この石像を封じ、さらには呪いで縛り付けるための……」

アタシの推理を全員が黙って聞いている。と、アタシ達の後ろに従って入ってきた砂人形の女性達が壁際に並び立ち……床から低く立っている石筍の上に置かれたモノを手にとって音を奏で始めた。見れば持っているのは楽器。笛やら鈴やら……何体かが手持ち無沙汰に何もせず立っている。

（そうか……）

アタシは荷物の中から……陶器の笛やら鈴みたいのを取り出して……楽器を持っていない砂人形達に渡すと嬉しそうな表情になって……軽く会釈して受け取って……たおやかな仕草で音を奏で始めた。砂人形達の演奏は……何処か儚げで、悲しそうで……でも勇ましげな……鎮魂歌のようだ。

皆が黙って音に聞き込んでいると……どこからか光りが差し込んで……何処から？ と捜すとそれは石像。石像の目が開き……金色の光りと共にアタシ達を睨んでいるっ！

『人間……そこな人間。オマエは誰だ？』

頭の中に声が響く。これって……石像の？ いや、精霊の声っ？
「私はソフィア。アコライト。アイルコンティ又寺院より修行の旅を赦され、この町に参りました。基本魔術は浄化。称号はプラチナクリスタル。お見知りおきを……」

『オマエではない。侍女達に術を放ったオマエだ』

んん。アタシのコトか。というか精霊だけあって偉そうだな。

「アタシはアリア。遺跡探検家。アチコチの遺跡を捜してるわ」

『遺跡探検家？ 黒魔導師ではないのか？』

「違うわよ。黒魔法は自衛のため。独学で憶えたわ。選礼式で引いたのは……」

……なんだったっけ？

『自衛で？ しかも独学で陣形態まで習得するとは……』

構わず自分の都合で話を進める精霊さんだこと。まあ、精霊でも驚くぐらいなんだから自慢して良いんだなと再確認

ふふんだ。

『ならば聞くっ！』

一際大きく精霊の声が響く。

威圧感というか足元を揺るがすほどの聖霊の声に身が震えた。

砂侍女さん達も演奏を止めてしまった。

『我が剣ばかりか我が身に呪いをかけるとはっ！　これは人間界の真意かっ！　さもなくば如何なる所存の所作かっ！　些末なる虚飾を廃し真意を述べいっ！』

吃驚して声が出ない。

えーと。つまりアタシが呪いをかけたと……誤解してなさる？

というか、アタシは人間界の代表だと？

光栄すぎて固まってしまった。

『お待ち下さいっ！』

一步、前に進んで声を出してくれたのはソフィア。やっぱり頼りになる。

「私は光の杖の継承者。魔王との戦いの義務を負う者。我らの誰も貴方様に呪術を施してはおりませぬ」

『ならば何故に闘ったっ？』

精霊の怒りは収まらない。

なんだ？　闘ったって？

『闘技場で血を流す。流させるということは我が身への呪いの力を増幅させる。何故に闘い呪縛を増補したっ？』

……そういう仕組みだったのか。

どつりで石柱に魔石があったわけだ。

「お言葉を返させていただきますが……我らは誰も血を流させてはおりませぬ」

凜としてソフィアは言い返す。確かに……ヴィオラさんとギザキさんの2回戦目からは見てないけど……二人の戦い方からして相手

の血を流してはいないだろう。

「そして私も後ろに控えるヴィオラも他の戦いで負傷した方々を総て治療いたしました。そして浄化も致しました。少なくとも……今回の戦い……闘技大会では血は……呪いは増補されてはおりませぬっ」

「そうだ。御先祖様。アンタの末裔が呪いをかけることなんかに手を貸したりはしないよ」

ヴィオラさんが一歩前に進んで声を出す。

頼もしいぞ。

『末裔だと?』

27・精霊への 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

27・精霊への 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

27・精霊への 2

「そうさ。精霊ノギ。ワタシはアンタの末裔のヴィオラ・ノラネだ。そっちの幽霊もアンタの末裔のネメシア・ノラゼ。末裔が……聖アイルコンティヌ寺院で修行した末裔が御先祖様に呪いなんかかけないよ。誤解は精霊に相応しくない。さつさと改めてくれない？」

あのー 精霊に対して馴れ馴れし過ぎると思うんですけど。幾ら血縁だとしてもね。

「闘ったというのが問題だというならば、私にも責任がある」とギザキさんが前に出た。ギザキさんも物怖じしないタイプだったんだな。魔獣なんかと闘って聖宝の一つや二つ持っていそうな頼もしさだ。

『誰だ？ 名乗れいつ』

「我が名はギザキ。本名はギーザ・ワルト。無論、私も相手を斬ってはいない。グレイ、ノイエは闘ってもいない。精霊。貴方の怒りを此処にいる者達に向けるのは理不尽だ。改めていただきたい」

「そうよ。幾ら精霊だからといってもその怒りは理不尽だわっ！」
あらら。ノイエまで割り込んで来ちゃった。

これだから世間知らずのお嬢様は……

『その小さいのは誰だ？』

困惑気味の問いかけだな。精霊も手に余るのかな？

「私はノイエ。ノイエ・ノート・ワネル。ノ・トワ城の城主よっ！」
おい。フルネーム言っちゃってるぞー

まあ、呪いをかけるような人間は此処にはいないからいいか。つて、城主だったの？

随分と天真爛漫な城主さんだ。

『ノ・トワ城だと？ 其方が城主だと？』
精霊さんも困惑しきりだ。

しかしソフィアが直した城がそんなに有名だったとは……

もう一度行ったら宝物とかを捜してみよう。

「闘いが問題というならば、アタシにも責任がある」

何故かエアリエスさんが精霊の悩みを無視せずいつと前に出た。まあ……『理不尽な怒りを先に収める』という意味の行動なんだろう。

エアリエスさんも曲がったことが嫌いなんだろうな。

「アタシも審判としてだが闘技場に立ち、そして失格者達を止めるために闘っている。序でに言えば……」

後ろにいる 그레이さんに視線を投げた。

그레이さんはあたたと慌てていたけど、意を決して前に出ようとした。が、エアリエスさんが先に言葉を続けた。

「コイツも暴漢を抑えるために手を出している。闘技場の脇だけだね。そういうのも問題なのかい？」

エアリエスさんの斜め後ろで 그레이さんが転けていた。

出鼻を挫かれる。という場面を実際に目の当たりにしたんだけど……かなり滑稽だ。

「誰だ？ その薄汚いのは」

「失礼しました。私は 그레이。白魔導師の職を辞し今は人形遣いとして生を無為に過ごしております。ところで……」

すすつと前に出た 그레이さんは恭しく礼をしながらも……精霊を見る目は……何処か鋭い。何か決意しているような……

「先程『我が剣』と仰りましたが……それは」

그레이さんはすすつと手でネメシアさんを指してから言葉を続けた。

「……あの剣のことでしょうか？」

そう言えば『我が剣』って……呪いをかけたとかも言っていたな。そうだ。我が魔王を倒した証。我が牙と爪とで魔王の牙を封じた

剣。何故に呪いと穢れに塗れ……今はまるで魔剣。其処までの穢れと呪いを施した者を……我は赦すわけにはいかぬっ！」

精霊の怒りが見えぬ威圧となって嵐のように吹き荒びアタシ達をたじろがせた。

……いや、たじろいだのはアタシとノイエだけだ。

グレイさんも、ギザキさんも、ネメシアさんも、ヴィオラさんも、そして、勿論、ソフィアは凜然として精霊を見つめている。

エアリエスさんは……戸惑っている感じたけど……

「あれは……その剣は……魔剣ではないのか？」

……そうだ。その剣は魔剣だとエアリエスさんから聞いたんだな。
『違うっ！ 我が聖戦での証。我が威信の証っ！ 血塗り、穢れさせ魔剣としたのは人間達の本意かっ！ ならば、次なる争いには我は人間の陣営に加わることは……』

『お待ち下さいっ！』

別の声が頭の中に響いた。

天使の如く、妖精の如く、天から響いたかのような清らかな声。

この声は……

『我が祖先。精霊ノギよ。我が名はネメシア。ネメシア・ノラゼ・エムル。末裔の一人。そして聖なる光の陣営の一人として闘うことを誓った尼僧。プラチナム・ランスの称号を持ち、浄化の術を基本魔法とする者。そして……』

ネメシアさんは……すうっと前に出て……そのまま石像の正面まで空中に漂い浮かんだ。

『落命し、法力の残り火でここに辿り着いた者。我が残る法力の総てを持って……』

「やめてっ！ 消えちゃダメッ！」

思わずアタシは叫んでしまった。

ネメシアさんは……ちよつただけ振り返って……につこりと笑った。

まるでこれからすることが……運命。

その運命を享受するかのように。アタシ達に『心配しないで』と囁くかのように……

『我が法力の総てを持って、この剣の穢れを被い、呪いを浄化して参りました。そして、これで……』

ネメシアさんは両手で捧げ持つ剣の柄に手をかけて……すらりと抜いた。漆黒の……まるで闇を顕すかのような暗黒の刀身が異様さを霞として放っていた。

27・精霊への 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

27・精霊への 3（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

27・精霊への 3

え？ その剣はエアリエスさんしか抜けないんじゃない？

ネメシアさんはゆったりとした仕草で……鞘と柄を合わせると……虹色の輝きが繋げていく。それはまるで……長巻とかいう握り柄の長き剣。細長い十字架のような業物となった。

「待てっ！ その剣を受け継いだのはアタシだっ！ 血を吸わせたのも、穢れさせたのもアタシだっ！ 何でアンタが責を……」

ネメシアさんは……ゆったりと振り返り……ネメシアさんに、飛びきりの笑顔で応えた。

『この剣は……我が王国の聖宝。遠き昔に戦乱の時の中で失われ、闇の……魔の眷属達によつて魔剣と改変されてしまった剣。其方の手に渡つてからの穢れなぞ、我が身が追うべき責に比べるならば塵ほどの……』

「五月蠅いっ！ アタシの責をアンタが負うのは赦さないっ！」
泣きながら……エアリエスさんが叫ぶ。

そんな……エアリエスさんのことを思っていたのだろうか。
いや、それともエアリエスさんの責任感が言わせているのだろうか？

「アタシの命を救つたグレイを……アンタは生き返らせた。それだけで十分な……」

『心優しい、強き者よ。其方が闘いは望んで行つたモノではない。剣が総てを知っている』

剣は……漆黒の刀身の中から輝き始めているかのような……眩い光を帯び始めている。

『……其方の闘いは闇の中で光を求めての闘い。その闘いの中での穢れも……』

グレイさんの方を向き、改めて……微笑んだ。

見ているモノ総ての心の闇を払うような天女のような微笑みで……
『グレイ。其方の法術が穢れを祓い、呪術を封じ……聖剣へと戻す道を示してくださいました。蘇生はその過程での結綬。其方が望む程道ではなかったことは謝罪します。お許し下さい』

ゆったりとした仕草で謝罪するネメシアさん。

いまや……幽霊と言ふよりは光の中の妖精のような姿で真剣な面持ちで言葉を繋いだ。

『ソフィア。貴女と知り合えて私は幸せでした。サーラ、アエリイ、ノーラ、ウェンディ。遊んでくれてありがとう。ソフィア達を宜しくね。ヴィオラ。貴女が遠縁でも血が繋がっていることは心強かった。寺院での日々も楽しかったわ。エアリエス、グレイ。其方達にこの剣の運命の一端を負わせてしまったことは我が一族の責。気にしないで下さい。ギザキ、ノイエ。短い間でしたが同じく光の定めに従う者と出会えて幸せでした。そして……』

ネメシアさんは……アタシの方を向いて、にっこりと笑った。

『アリア。ありがとう。貴女が言うとおり、私だけじゃこの遺跡を復活させることはできなかった。そして。ごめんなさい。貴女を助けることはできなくて……』

アタシは叫んだ。叫んでネメシアさんの言葉を止めた。

「いいからっ！ そんなのは……そんなのはいいからっ！ 消えないでっ！」

ネメシアさんは変わらず微笑んでいる。

『アリア……貴女が居てくれたから、貴女が私の場所を尋ねてくれたから私は再びソフィア達と出会えた。剣の運命を改めることができた。我が一族の総てを持って感謝いたします』

「そんなのは要らないっ！ 感謝なんか要らないっ！ 要らないから残って……」

『我が祖先よ。我らが一族の聖宝、精霊刀『斬岳』に施された総ての穢れを、魔の眷属達の呪いを今、総て祓います。我が身の総てをもって……』

今や……漆黒であつた刀身とは信じられぬほどの眩く光となつて
る剣を……自分の胸に……

「だめえええええっ！」

アタシの叫びと石像の両眼から金色の光が飛び散るのは同時だつ
た。

精霊ノギの石像から飛び散つた光は辺りを包み……アタシ達を貫
いて……やがて霞となつて消えていった。

石像は沈黙する石の固まりに戻り……砂巫女さん達もただの砂の
塊となつて崩れ落ちた。

残つたのは……空中に浮いている剣。

眩い虹色の光を放つ剣。

不意に糸が切れたように落下して……音もなく砂の床に突き刺さ
り……総ては終わった。

その剣を抱きしめて……泣きじゃくるエアリエスさんの悲しみの
声だけを遺跡の中に響かせて……

27・精霊への 3（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

28・それぞれの道へ 1（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

28・それぞれの道へ 1

28・それぞれの道へ

石像に突き刺さっていた石の槍はソフィアの浄化の術と時元修復の術で消えた。

町に戻って見てみたら4つの闘技場は一つの大きな闘技場となっていた。石の槍が4つに割っていたんだね。操られていた町の人々は……なんか悪酔いしているような面持ちだったけど……闘技場の異変で目を丸くしていた。

夜が明けて……

アタシ達は……宿に戻って食堂で黙ったまま。

ギザキさんとノイエは「まだ信じられない」といった感じで誰とも無く視線を投げては虚空を見直している。ヴィオラさんは目を閉じて……感慨深げだ。 그레이さんは祈りを捧げるかのように静かに瞑想している。エアリエスさんは頬杖を付いて誰とも視線を合わせない。

そしてソフィアは骨董の深杯を手に取り……2度、3度と振り、霊精で深杯を充たし……静かにテーブルに置いた。

そして深杯を両手で持ち……ゆったりと飲むのは……

ネメシアさんだ。

なんか随分と小さくなって、背中に白く眩い半透明の翼が生えているんだけど……ぶんすか怒っている。

なんでも、精霊ノギの計らいかなんかで妖精界に行けたらしいんだけど『アナタはここにいる必要はないでしょ?』とか言われて人

間界に戻ってきたらしい。

『死んで幽霊になっても冥界に行けないし、一族の汚名を晴らした御褒美が何かで妖精になったというのに妖精界に行けないなんてっ！　どういうコトよ。コレっ？』なんて怒っているんだけど……アタシ達は苦笑いするしかないというか、聞かれても困るというか……

ま、兎に角、精霊ノギの聖剣の守護妖精となったらしい。

それからは……闘技が粛々と進んだけど……何故か誰も剣で傷つくことはなかった。ソフィアの言葉に因れば闘技場の横の壁の呪紋の効果により闘技場にかかる人は『石の身体』となるらしく、剣での闘いは意味がなくなってしまった。元々、この闘技場自体は精霊ノギへの祈りを捧げ、そして精霊ノギの祝福を受けるモノとして創られたらしいのだ。兎に角、結果として闘いは体術勝負となり、背中を床に着けた方が勝ちということで進められた。そして決勝に残ったのは予想通り、ヴィオラさんとギザキさん。その時点で「勝っても意味がないから」とヴィオラさんは棄権。ま、相手が居るんじや婿捜しとしては確かに無意味だね。

その間にアタシとノイエはソフィアと一緒に町の西側の洞窟やら遺跡跡つぼいのを探索。ソフィアの術で守護遺跡つぼいのは総て修復、そして結界処理。東側のは闘技の間のギザキさんとヴィオラさんの闘いがないときにみんなで探索して、同じく修復して結界処理した。

エアリエスさんはソフィアの術に目を丸くしていたけど……「流石だね」って感心していた。ソフィアもエアリエスさんに誉められて嬉しそうだったな。なんでそんなに嬉しいのかは知らないけど。

そうそう。

エアリエスさんの名前は「イリヤ・フレリア・ネメシア」となった。

「イリア」は「エアリエス」から『過去』と『否定』という単語を除いて、人名っぽくすると「イリア」になるらしい。本当は『イリス』になるらしいんだけど「神様の名前というのは恐れ多い」という本人の意見と、雰囲気的に長女っぽいので、「ア」の類する語尾ということで決まった。「フレイア」と「ネメシア」は本人の希望。そう。ソフィアの名前の一部とネメシアさんからだ。命名式に立ち会ったのはアタシとグレイさん。グレイさんはエアリエスさんの命の恩人だからね。ギザキさんとノイエとヴィオラさんは証明者として立ち会ったんだけどね。

それから……いつの間にか全員の身体の何処かしらに精霊の紋……精霊ノギの紋章のアザができていた。「契約か沈黙」ってコトだったから全員が精霊と契約……というか祝福を授かったということなんだろう。ソフィアとイリアさんとノイエは鎖骨の間。ソフィアのは前にあったアザの直ぐ下だった。ギザキさんは両肩に。グレイさんは胸にあるらしい。アタシは……何故か眉間。まあ、アタシのは気合いが入ったときとか、術を使うときぐらいしか出てこないよ。うだから良いけど……女の子だぞ。ちつとは紋章の場所も考えて欲しいモノだ。ヴィオラさんは両肩、両腿、そして鎖骨の間と眉間。全部出ていたけど……元々が眷族というか末裔だから良いのかもね。

そんなこんなでなんだかんだと日々が過ぎ……別れの日が来た。

28・それぞれの道へ 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

感想などいただけると有り難いです。

28・それぞれの道へ 2（前書き）

ソフィアとアリアの仲間達

28・それぞれの道へ 2

「すみません。剣を貸していただけます？」

朝食をみんなで済ませた後でソフィアがエアリエスさん……じゃない、イリアさんに頼んだ。

「何をするんだ？」と不思議そうな面持ちながらもイリアさんは腰の二つの剣……幅広のソードブレイカーをテーブルに置いた。

「ちよつと、お呪いを…… アリア。悪いけど、霊精を剣に塗ってくれる？」

真剣な面持ちでソフィアが頼むからアタシも神妙な気持ちになって、ソフィアが大深鉢いっぱいに作った霊精を慎重に満遍なく塗った。

ソフィアが何やら小さく呪文を唱え……人差し指で刀身に呪紋を描き始めた。刀を持つことが赦されない白魔導師であるソフィアが剣に触れるのはやっぱり無理があつたようで人差し指から白く煙が上がって、みんなが驚いていたけど……ソフィアは止めることなく熱がることもなく呪紋を一気に描ききった。

「ソフィア。指は？ 大丈夫なのか？」とイリアさんが確認していたけど……ソフィアはにっこりと笑い、呪紋様の意味を説明した。

「こちらの剣の片面に炎の精霊、もう片方には土の精霊、こちらの剣の片面に風の精霊、もう片面に水の精霊。それぞれの精霊の力を宿す呪紋様を描かせて頂きました」

なんでもイリアさんが法力というか法術を鍛錬すると精霊の力を使えるようになるらしい。

「私が生きている限り……そして私の法力が尽きない限り有効です」

「何でそこまで？ 指を痛めてまですることじゃないでしょっ！？」とイリアさんに問われてソフィアが至極あっさり「だって私の名を選んで頂いた以上はできるだけ健やかでいて頂きたいですから」とにっこり笑顔で応えていた。

イリアさんは……黙っていたけど、両目に涙を浮かべて喜んでた。

そつだ。余計なことだけどイリアさんの紅い右の瞳にはいつの間にか金色が混じっている。たぶん、それも精霊ノギの祝福なんだろう。前は右の瞳を見ていると何か苛立つてきたけど、いまは何とも思わなくなっている。

……時々妙に不安になったりもするけど、苛立つよりは良いじゃない？ そつだよね？

そして、ネメシアさんにはネックレスを渡していた。なんでも、浄化の術とかを宝珠に小さく固めたモノらしい。

「妖精となったネメシアさんには余計なことかも知れませんが……霊精が必要なときにお使い下さい」

ネメシアさんは嬉しそうにしていたな。ん。そうそう。ヴィオラさんが「私には何もないのかい？」って……苦笑していたけど。

あれ？ ヴィオラさんはアタシ達と別行動？

「ワタシはネメシアに付いていくよ。だってね……あの三人だけじゃ怪しすぎて……」

そつだ。イリアさんはアチコチの国で賞金首となっているらしいで、その賞金首の解除をしてもらいに旅するといっていた。でも、現賞金首に同行するのが人形遣いの 그레이さんとイリアさんの剣の守護妖精のネメシアさんじゃ……どう転んでも特別すぎる一行で無事に済みそうにもないな。

「話の始めぐらいは普通に進めたいからね。マトモのなのが必要だろ？」

……えーと。別に不必要に反論する気はサラサラにないんだけど……ヴィオラさん自体も誰も見たことがないといわれる聖アイルコンティヌ寺院出身の大猫娘なんですけど。

ま、いいか。

ギザキさんとノイエはギザキさんの生まれ故郷に向かうと言っていた。闘技大会で優勝したし、路銀にも困らないだろう。所謂、早

めのハネムーン旅行だね。

アタシとソフィアとイリアさんの髪で編んで作った紐は三人の守神。

ヴィオラさんとノイエも欲しそうにしていたから5人の髪で作ったのを全員が別に持っている。ヴィオラさんの髪は短いから……芙紗に編んで止め紐にしたんだけどね。

お返しにとノイエからは何枚かの呪符を貰った。

「いい？ 困ったときに使ってよ。何の効果かって？ それは使ったときに判るから」だってさ。なんだろうね。ま、いいけど。

全員で町はずれまで一緒に歩き……四叉路でもう一度、声を掛け合って別れた。ノイエ達は海辺の町へと向かう道。イリアさん達は近くの要塞都市へと続く道。そしてアタシとソフィアは真っ直ぐに次の町へと続く道。

みんなに手を振ってから……振り返ってノギの町を見る。

元々は精霊ノギの神殿城下町。

誰かが……闇の眷属達が呪いをかけ、戦乱の世の中で神殿も破壊され、城下町であることすらも忘れ去られた。そして、呪いを増幅・継続させるための闘技大会。それらがそのままだったら……多分、精霊ノギは魔王に従う存在となっていたのか……少なくとも、人間達に味方することはなかっただろう。それが……ソフィアが現れ、闘技大会での呪いの継続が妨害され、呪いをかけて『闇の剣』へと変貌させることに成功した精霊ノギの剣もネメシアさんが呪いを浄化し続けていた。そして……アタシが精霊神殿の入り口を見つけて……妨害しようと、その夜に襲撃しに来た。いや、町の人達を使って襲撃させた。

それが闇の一族。魔王の眷属達。

狡猾いというか、せせこましいというか。

まともに立ち向うと……ソフィアの前には一溜まりもないのだろ

う。いや、ソフィアじゃなくてもネメシアさんやヴィオラさんでも一蹴できる相手。そしてそれが判っているから正面から向かわずに影でこそこそと動き回って魔王に荷担しようとする眷族。

ソフィアが立ち向う敵の正体が判った。
でもね……

どんな手を使ってもソフィア達には歯が立たないんだから、おとなしく何処かの影で何にもせずには魔王が倒されるのを待ってなさいっての。

見つけたらただじゃ置かないわよ。例えばアタシー人だとしても、眷族の下っ端の二、三人ぐらいは蹴散らしてあげるから。

「何してるの？ 早くしないと次の町に辿り着けないわよ」

ソフィアは眩しいぐらいに微笑んでいる。

黙ってノイエの城を直して、頼まれもしないのにみんなの傷を治して……それが精霊ノギへの呪いの増補を防いでいたなんて……。さらには剣の呪いを一人で解いていたネメシアさんへ法力の源である霊精を望むままに渡して……

町みんなはソフィアがしたことなんて誰も知らないんだろうな。でもソフィアはそれが役目とばかりに黙って闇の眷族たちから、みんなを護っているんだな。

魔王なんて……きっと片手間で倒してしまうんだ。

「ん。次の町ではちゃんと遺跡とか宝物があると良いね」

「どうかしら？ また無駄足かもよ」

「いいじゃない。無駄足に勝る宝はないってね」

「へー？ それ誰の言葉？」

「大遺跡探検家であるアタシの言葉。下手な宝物があるよりも何に

もない方が次の遺跡の楽しみが増えるってコト」

「なんか、負け惜しみにも聞こえるけど？」

「いいの。人生、そんなに良いことがあるとは限らないけど、最悪を普通と考えたらどんなことでも良いことになるって意味なの」

「はいはい。判りました」

アタシ達は急がずに先へと進んだ。

この刻を楽しむかのように……

29 . それから……

そうそう。あれからノギの町は精霊神殿城下都市国家として栄えているらしい。周辺の国や都市国家も精霊の怒りが怖くて攻めてこないみたいだ。というのか闘技場で祈りを捧げた人々は石の身体となつて剣が効かなくなるんだから無敵だよな。でも有効期限がせいぜい7日間だけらしいから、強大な軍事国家にも成れないらしいけど。ま、そのぐらいが丁度いいのかもね。

結果として、近くの都市国家と同盟を組んで都市国家連合となつて平和に過ごしているらしい。

それと精霊神殿にも精霊の力にあやかろうと参拝者が列を成しているとのことだ。

ただ……きちんと順序を踏んで精霊に逢えるのは……誰もいないらしい。

それでも……誰かが尋ねているのは精霊ノギにとっては嬉しいことに違いない。

いままで……何百年もずっと一人でいたんだからね。

28・それぞれの道へ 2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これはアコライト・ソフィア、アリアとソフィア、闇の剣、岬岩城の姫の後編に当たります。

次回は「精霊の島」（仮）の予定ですが、未定です。
感想などいただけると有り難いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8281f/>

聖霊の街

2010年12月6日18時40分発行